
古城の記憶とムーンエッジ

百合花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古城の記憶とムーンエッジ

【Nコード】

N2224M

【作者名】

百合花

【あらすじ】

日本生まれの【和製吸血鬼】である牙城 文《がじょう あや》と、その同居人として【純血吸血鬼】の櫻城《さくらじょう》ノア。町はずれの古城に住み着き、二人は平穏に暮らしていた。だがある時、記憶をなくした獣耳&尻尾の生えた青年を俊足の【魔女】であり【悪魔】の少女押しつけられる

太陽が好きだが闇が苦手な吸血鬼らしくない吸血鬼と、そんな同居人を心の中で心酔しているが気のない風を装う純粋な吸血鬼。無邪気で純朴だが優しさに臆病な【狼男】の青年。そのほか濃厚な

キャラが、それまでの平穩をことごとく壊し、それに同調もしつつ
太陽好きの吸血鬼、アヤは狼男の青年を規則に背いて守り続ける
自らが朽ち果てるまで

死ぬことは罪なのか？（前書き）

初めて書いてみました。つたない部分があると思いますが、生温かく見守ってやってください。

警告です

- ・時折グロ描写があるかもです
- ・BLとさせていただきます
- ・誤字脱字のチェックはしていますが、間違いがありましたら解釈してお進みください。

こんなところですよ。おおよそ、これさえ守れば大丈夫だと思います。

死ぬことは罪なのかい？

じつとりと暑く、熱中症患者が出てもおかしくないような記録的な猛暑の日であった。家畜だろうと人間だろうと、この日はかりは室内に閉じこもっている者が多かった。

無論それは、陽のあたる生物に限ることではないのだが

「あつづい……もう駄目、死ぬ」

「うるさい。死ぬのなら外で死ぬ」

クールな声と口調ではつきりと。特に隠そうとすることもなく、突き刺さるように言葉は抜けて行った。

カランと、コップの中で氷が落ちて転がった。

「ああー、わかった。ちよつと死んで来るわ」

「行ってこい。止めんからな」

「わあってるって。んじゃ、逝つてきまーす……」

窓からのぞくはるかに高い空。じりじりと、身を焼くように太陽は照りつけてくる。

軽くストレッチと伸びをし、眼がくらむような世界へと飛び込むと体を傾けた。

はらりと、風で本の頁がめくれた。

「つ……ひゃああああつほおおお……!!」

「うるっさい!!」

自分と世界の境界があいまいになっていく。飛び込んだ世界はあまりにも儚く遠い。

そんなそんないい気分を一瞬でぶち壊しやがって。

「ぐえっ!？」

「てめえ……人の読書を邪魔しやがって……許さんぞ」

「ノア、とりあえず手え離して……ほんとに死ぬから!!」

「死ぬと言ったのはてめえだろ。さあ、絞殺してやろう……」

「う、うわああああああ!？」

悲鳴をあげながら、それでも視線は下に。

マリンブルーだの紺色だのといった水面に白い波が当たって砕けていく。断崖絶壁と呼ぶにふさわしい今の場所からだ、落ちれば確実に死ぬ。

「ノア」と呼ばれた青年は、にっこりと仮面のような笑みを浮かべた。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ……」

「怖い怖い怖い! つつーか、首掴んでんだろっ!？」

そう 窓辺にて、真昼間から首を絞められている。この真夏日に。

こんなにいい日和なのに。

ギリギリと首を絞め上げ、ノアは不敵に笑んだ。

「さア、逝け。逝ってこい」

「うぐつ……やー、なんかさあ。悲鳴上げてんのも飽きた」

「……そうか。早く逝け」

「お前は話を聞け」

「てめエの話はめんどくさい。逝け」

「はあ……?」

「逝け」

話は聞いていないがあくまで笑顔。それが無性に腹がたつが、やる気はそがれるし何より馬鹿力で首を絞められている自分がいる。

不意に、パキリといい感じの音で何かが折れた。

頬を掻き、青年はノアに向かって笑いかけた。

「首折れたんスけど。お前には聞こえない音で、パキッていった」

「なら呼吸するな。ラクに逝ってこい、読書の邪魔ものには死さえも生ぬるい」

「何その俺様論理。まあ 死ぬないんだけど」

首を絞められようと、首を折られようと 死ぬことは許さ

れない。時折、運よく死ねた奴もいるが大概は灰になるまで生き続けて惨めに死んでいく。

ふっと、突然拘束はゆるんだ。

「なら、死にたいだの何だのと言うな。俺まで惨めになる」

「ノアが殺してくれるんならいーんだけど」

「とりあえず、折れた首を治せ。気持ち悪い」

「あー……もう治ってるかも」

鮮やかなグラデーションのあるくせつ毛を揺らし、青年は首をコキコキと鳴らした。何事もなかったかの、マッサージでもするかのよう。

本を持ち直し、ノアは退屈そうにそれを読み始めた。

「文。^{あや}てめエ、いい加減にしておけよ」

「うん？何のこと？」

「月夜の晩には、野犬が出るそうだ。近くの農夫どもが噂していたが、お前、まだ外に出ているのか？目撃情報が後を絶たない」「犯罪者みたいに言うなよなー……まあ、うん、何か悪い？」

「仮にもこの主だろう。それくらい、いい加減に自覚して」

「わかってるわかってる。ノアの言うことに間違いはねえから」

わしゃわしゃと髪を掻き、「文」と呼ばれた青年はノアを背にして窓に向かった。

さんさんと降り注ぐ太陽 それとは真逆の蝙蝠の漆黒の翼が、
文の背から生えた。

*

高い高い洋風な古城。そこに住むのは青年が二人。他の人間は極力近寄らないように配慮し、ただただ恐れていた。

紅い目を持つ青年たち 古城に合わず常に和服で、破壊音は絶えずふもとの街まで響き渡っていた。それでも誰一人として、文句などは言わなかった。

あの城に住むのは『化け物』だよ。

誰ともなく言いだしたその噂。東洋らしくない紅い目や、尾ひれをつけて広まった不気味な噂の数々。それが、全ての根本だった。

人が消えようと、作物が奪われようと。都合の悪いことはすべて、この住民たちに押しつけられた。不満などは言わずに。

「で、噂って今度は何。また行方不明？」

「いいや、逆だ」

「ぎゃあくううう？ちゃんとええ」

「そのままだ。人が増えた。といっても、人かどうかは不明だが」

「同種？だったらめんどいな……」

バサバサと翼がはためいた。人としておかしい構図で。

ため息を軽く吐き、ノアは文の翼を引っ掻いた。

「いだあっ！？」

「同種ならほっておけばいい。あー、眠い眠い……」

「ちよっと、待ちんさい！お前、何知ってんの？」

「別に。何も知りたくはない」

「知りたくないって、何それ。頭悪いからとかって思ってたんの？」

「ああ、うん……そうだな」

「……ザクツてくるから、やめてあげて」

「知るか。ただ、少し 匂う」

「え、汗臭い？」

あほっぽく、文は無邪気にも体を匂った。

はあ、と無意識にノアからため息がこぼれた。

「なんだろうな、この匂いは。だから、不要に外には出るな。特に日が落ちてから」

「まんま、俺たちの活動時間じゃん」

「だが、襲われるよりはいくらかマシだ。迎撃して殺してもしたら、誰に迷惑をかけるかわからんからな……そうでなければ殺してやる

が」

「ふうん……」

興味もなさそうに、文はうなづいた。

はたと、ノアの勘が嫌な何かを告げた。

「っ、待てっ!!」

「行つてきまあす……っ」

まっさかさまに、世界に溶けてしまいたい。溶けて、解けて、融けたい

ノアの声が遠くなっていく。あえて翼はまだ使わない。地面すれすれで発動させ、大空へと舞い上がるために。こんなにいい天気なのに、どうしてノアは外に出たがらないんだろうか。引きこもってたら、体にカビでもきのこでも生えてくるんじゃないかと不安になる。

やれやれとでも言うように、ノアは落ちていく文をしばらくの間眺めていた。

「……牙城がじょうの名を汚すつもりなのか、あいつは……」

縛られはしない、ただのアホと。そう割り切ってしまうば、こんなにつらくないのに。

疼いて止まらない衝動　いつかはなくなるのだろうと願うように思い、ノアはその長い髪を結いあげた。

『和製吸血鬼』と。誰かが、そんなことを吐いた。

花火（前書き）

2話目です。

花火

*

*

*

ジージーだのミンミンだのと五月蠅い季節　夏と一口にいつても、まだ初夏であつた。未だに蛙だって鳴き続けているし、梅雨も明けたのか明けていないのかじつとりと雨が降る日もある。

明かりもつかない宵闇の中、大きく何かが遠くの空に弾けた。カラフルに空を色どり、その数瞬後に、低く体を突きぬくような音が辺りに響き渡った。

ふつと、背後に人の気配があつた。

「……いつ、帰つたんだ」

「今さっきだよ。ただいま」

「お帰り……俺に心配させて、ずいぶん楽しそうだな」

両手にたこ焼きやら綿あめやらヨーヨーを抱え、文はニヒヤリと笑つていた。

その隣に腰をおろし、ノアは呆れたように溜息を吐いた。

「てめエってやつああ……どうして、人の食い物が食べられるんだい？」

「さア？うまいじゃん？」

「知らん。俺には理解しがたい」

綺麗な黄金色の長髪を掻きあげ藍色の紐で結い、瞳は吸血鬼の特徴である紅の色でいつもどこかをまっすぐに見つめていた。切れ長の目も、人と違い異様に白い肌も。全てがノアという男を物語っている。それは、美人というのに相応しく。

うちはで顔を煽ぎ、ノアは空を仰いだ。

「あれは？何だ、警告か？」

「えー……物知りのくせして知らないの？」

「悪い。しかし、俺たちを焼き払うつもりなんじゃあ……」

こんなものも知らないなんて。日ごろから何かとからかってきて馬鹿にしてくるノアらしからぬ発言だ。だからこそ、こいつは面白いのだが。

ニツと笑ったまま、文は綿あめをノアに差し出した。

「食べて。甘いよ」

「いらない。それよりも、戦闘になるんじゃないのか」

「なるかな……どうだろ」

「つ、てめエは人里に下りて、何をしてるんだ！」

怖い怖い。それでもきつと、自分の顔は笑顔のままだ。

翼を静かに畳み、文は綿あめを頬張った。

「ダイジョーブ。守るよ」

「誰がそんなことを聞いた!？」

「怒ンなつて。お前つておもつしろい」

「殺すぞ。それ以上ほざくな」

「わりいわりい。……アレはさア」

形を変え、大きくも小さくも。赤から緑、青、黄、白。次々と変わって、輝いて、そして儚く散っていく。

パシヨンと、ヨーヨーが床をはねた。

「『花火』って言うんだよ。文献とかには出てこないわけ？」

「ああ、それか。実物は初めてだ」

「何だよ、つまんねえ。知らないなら、ずっと知らないで通せよ」

「知識だけなんだ。てめエみたいに、太陽の下に出られない」

吸血鬼 そんなこと、言われなくてもわかってる。そこまで俺は馬鹿じゃない。ただ、太陽に耐性があるらしい。たったそれだけ

まるで形や色を記憶していくかのように、ノアは花火をじっくりと眺めていた。

不思議そうに、文はまた一口綿あめをかじった。

「……月がさあ」

「ん……どうした？」

「野良犬らしいよ。月夜の日に限って現れるって」

「そうか。……っ!？」

「え、何」

突然、ノアは鬼のような形相で文の首を絞めた。

「ぐえ……」

「てめエ、人と話したのか!？」

「いけないとは言っていないだろ。行くなって言っただけ」

「まだ心配をかけさせるつもりか!」

「心配って、そんなに?俺、そんなに弱かない」

言い返したくはなかったが、いい加減うるさい。過保護にもほどがある。

一瞬言葉に詰まり、ノアはそれをすべて溜息として吐きだした。

「……疑っているんだ、わかれ」

「疑う?俺を?」

「違う。あの噂　その犬というのは　同種ではおよそないだろうが、もっと別の　」

「ああ、うん。そんなこと、野暮すぎて言わなかったんだけど」

「わかっていたのなら近づくな。あいつらは、てめエとは違う。俺もお前とは違う。衝動へのブレーキが効きにくいんだ……っ」

「知ってる。俺だって弱いつての……」

特別扱いは、何も褒められるばかりじゃあない。隔離され、誰にも会わせてもらえないなんてこともあるのだ。化け物とそれ以外とは、何もかもが違いすぎるから

それでも何か言おうとしたノアに呆れ、文は食べかけの綿あめを彼の口に押し込んだ。

「俺からだから、吐くなよ。でなきや、嫌うから」

「っ……馬鹿じゃないのか!？」

「うんうん、馬鹿だよ。だから、傷だらけ」

自分の心臓を指し、文は自虐的にも見える満面の笑みを浮かべた。

「食べないなら、怒るから。ほら、早く」

「……不味い」

甘ったるくベタつくあめ。味が濃いなんて、そんなことじゃないんだろうけど。

ノアの膝の上に乗る、文は顔を近づけた。

「ね……咬ませて」

「勝手にしろ。こちらはそれどころじゃない」

「じゃ、じつとして……」

闇夜でもわかる、雪のような白肌。雪そのものを見たことはないけれど、きっとノアのように綺麗なんだろうなと思う。

けど “衝動”の前ではあまりにも無力

「っ……あああ……!!」

苦しい?ごめん、けど、俺 止まんないよ。

突き刺さった牙を伝って、紅い血液が流れ込んでくる。共食いなどと嘲笑するなかれ、これは立派な愛情表現なのだから。

肌に垂れる鮮血を舐めて、服はなるたけ汚さないように一応の配慮も。傷は深く、深く、一点に集中して食らいつく。飲むのが下手だから、ノアが痛がる。それでも、ずっと耐えていてくれる

この血は、大好き

至上の慕情（前書き）

今回、少し短めです

至上の慕情

＊

＊

＊

好きな血と嫌いな血

他人から見れば大差はないだろう。けれど、それを食す影の者としては大いに関係がある。差だって、半端じゃないほどに。

『処女の血液は美味』、『老人の血液は飲むと心が腐ってしまう』、『子供の血液は好き嫌が多い』　なんて、そんな噂は数え上げればキリがない。といつても、嘘偽りも交じる中で真実はあまりにも薄い。

たとえば

「『同族種の血液は禁忌』」

「っ……今更、それがどうしたんだ……っ」

「いや、別に？ 気にしないでいいから」

「てめエはいつもそうやって隠しごとを……」

「はいはい。ノアにだけは、ちゃんと言うから」

惜しげもなく頬にキスなどをしてみる。それでも、舌打ちをしつつ受け入れてくれる。それだけで、ずっと幸せでいられる。

そんな俺をノアは馬鹿だと言う。けど、馬鹿でもいいからノアを独占のままにしておきたい

ということ、甘えてやろうか。

「ノアぁー……おなかすいたー」

「知るか。何年物が欲しい？」

「んー……ノアが欲しい」

「黙れ。そしてくっつくな」

これだからかうこともできるのだが、今日はやけに怒っている。

昨日のことをまだ怒っているのかと、そんなことを聞きあつような野暮な仲じゃない。

暑そうに顔を煽ぎ、ノアは立ち上がった。

「少し、外に出てくる。ここにいろ」

「え、日が出てんのに？」

「噂とやらの真偽を確かめてくる。これ以上拡大しているようならば正式に我々の住処を荒らしたとして存在を消滅させてやる。うざいだろう」

「うざいって……」

そこまで噂なんかに固執していたのか。珍しい。

ふんと文を鼻で嗤い、ノアはその頬をつねった。

「てめエのためじゃないからな。あくまで、自分のためだ」

「……え、誘ってんの？」

「馬鹿を言つな。ついて来たいなら黙って来い」

「どうせかご持ちじゃん」

「なら、来るな」

王道のツンつぶり。けど、そんなノアが好きなのが自分だろうと、そんなのわかつてる。

軽く返事をし、文はノアとともに部屋を出た。

*

バスツと、漆黒の日傘が開かれた。

やはり、ノアだけは日に弱い。そんなところは他の吸血鬼も同じなのだが、ノアはそれなりには太陽にも強い。だが、長時間当たるとそれだけ月光を必要とする。月の出ない日などは本当にノアが死ぬんじゃないかと心配さえした。

日傘を差し、ノアは長いローブの帽子をかぶった。

「イラつく……何なんだ、この光は……」

「俺は好きだよ。ほら、行こっ」

「コラ、待てっ！」

だーっと勢いよく駆け出しても、ノアは優しいから付いて来てくれる。それでも、ちゃんと追いつくように加減はするが。

そこまでも続くかのような青の草原を走り抜け、うつそうとした森も突破。何もかもが今日にいたっては順調だ。

そうして、駆け下った世界には一気にカラフルさが増した。

まだ夏祭りの余韻の残る街に足を踏み入れ、文は振り返ってはしやいだ。

「なあなあ、次は“ひぐらし祭り”だって！いいよなあ……」

「ぜえっ……はあっ……っぐ……！」

息を切らし、それでも優雅に日傘は持ったままノアはようやく文に追いついた。運動量は熱量とくわえて多い筈なのに汗は一つもかかずに。

うつりうつとその頭をなで、ノアは笑った。

「大丈夫？汗かかないなんて、いい体だよなあ……」

「うるさいぞ、セクハラ魔……っ」

「される方も悪いよ。ほら、髪が乱れてる」

伸ばした手は、あっさりと払われた。

「さて……茶番はいい加減にして、情報を集めるぞ。てめエも見直してほしかったらやれ」

「ええー？やったら、何くれる？」

「は？何のことだ」

「報酬。キスだけじゃ、許してやんねーよ？」

答えなんて聞くまでもない。言った者勝ち、宣言は絶対だ。

くるりくるりとその場で回ってみせ、文は再び駆けだして行った。

*

さて、どうするか。

あのドアホは勝手に駆けて行ってしまった。悪いが、キスだのな

んだのは断らせてもらう。

どうせ 奪われてしまっだろうが。

手のひらに残る体温はすぐに消えてしまう。髪を触られそうになっただけで動揺するなんて、自分らしくもない。血を飲ませはするが、自分は文の血が飲めない。あの体に触れただけで熱くなり、すっかりあちらのペースに吞まれてしまうから。

だから あいつに褒美なんてやれない。

深くフードをかぶり直し、ノアはザクザクと歩き始めた。

お嬢さんは俊足（前書き）

少し前よりも長いですが、やはり短めです

お嬢さんは俊足

＊

＊

＊

「んー……なあにしようかなー……」

ぶらぶらと暇人らしく、しかし心中はご褒美のことを念頭に置きつつノアの笑顔を想像してひとりでニヤけてしまったり。たまに見せる笑顔がどうしても好きすぎるのだが、最近はどうもずっと見ていない気がする。前は、二桁ほど昔だったような気も

いやいや、落ち込むと戻れなくなる。そんなことで泣くほど子供じゃあない。

……。

「……だいじょおぶ？」

「へー!?」

突然、文の腕を幼い手が掴んだ。

綺麗な亜麻色の瞳の少女が、じっと文を見つめていた。

「あ、いや……何？」

「……」

「あ……えーと、俺に用事かな？」

じーっと、ただまっすぐに。小さい子は苦手じゃないが、いきなりだと怖い。

肩に垂らしたおさげ髪が、少女のジャンプで揺れた。

「うおっ、何？」

「お兄ちゃん、どこの人？」

「え? あー……ちょっと向こうの方」

「ふうん……」

詳しく言ってしまうとノアのいかづちが落ちる。こんな小さな子

が信じるとも思えないけど。

どうやら買い物帰りらしく、少女は物を入れたかごを大事そうに抱えていた。

「て、手伝おうか？」

「ううん、いいの。知らない人には話しかけられてもついて行っちゃだめって」

「……そうだよな」

明らかに向こうが話しかけてきたが。気にしちやいけないんだろ
う。

さらに強く文の腕を引き、少女は笑った。

「お名前は？」

「んー……教えていいわけ？」

「だって、お兄ちゃんおとなでしょ？さっきは泣きそうだったけど
……」

「泣きそうって……んー、ま、いつか」

名前くらいで怒られはしないだろう。さすがにバレるとやばいか
もしれないが。

ニコツと愛想よく笑い、文は少女に言った。

「文って言うんだ。よろしくな、お嬢ちゃん」

「おじょうちゃん？私、そんな名前じゃないよ？」

「いやいや、そうじゃなくて……」

「私はリリス。リリスなの、おじょうちゃんじゃないよ」

舌ったらずというか、言葉を知らないのは仕方がないというか。
幼い子に文句を言っても仕方がないのでとりあえずスルー。

「で、リリスちゃん？俺は何すればいいの？」

「うーん……お兄ちゃん、あやって言ったよね？」

まるで知っているのかのような馴れ馴れしさ。が、年齢おかげで
文句は思いとどまった。

なるべく穏やかに、文は尋ねた。

「俺のこと知ってんの？」

「……付いてきてくれたら教えるよ」

知らない人には（以下略）。こんな少女について行っても害はないだろう。むしろ、俺がノアに叱られる。

文が答えをためらっていると、リリスは瞳を潤ませて文の腕を引っ張った。

「ふえっ……ぐすっ……」

「！？わかった、わかったから！行きやあいんだろ！？」

「ホントに？わーい！それじゃ、迷子にならないでね」

態度急変。いきなり、リリスは荷物の重さをも無視して駆けだした。

尋常じゃないほどに速いリリスを追い、文は全速力で走り始めた。

*

「つつかまえてみてよっ、おにーいちやぁーん！」

「っだぁぁぁ！待ちやがれええ！！」

最初は追いかけた。だが、リリスは成人男性で吸血鬼の俺でさえかなわないほどの脚を持っていた。恐ろしいまでの速さで、およそ普通の人が見れば風にしか見えないであろう。

間違いなく　あのお嬢ちゃんは『化け物』だ。

少々先を小鹿のように駆けていくリリスを追い、文は走り続けた。

「っ……あれ……？」

一瞬目を離れた隙に、リリスは眼前から消えていた。

いつの間にか暗い路地裏に入っていたらしく、文はあたりを見回した。

「どこだよコト……」

吸血鬼だけでも。けど……嫌いなものだってある。嫌で嫌で仕方がないものだってある。そんなの、どうにもしようがないじゃない

か。

リリスの姿も見当たらない。
もう嫌だ、嫌すぎる。

ノア あっ……！！！！

膝を抱えてうずくまった文の肩に、ひやりと何かが触れた。

「う、うわあああああああ！？」

「ひやあああ！？」

二つの悲鳴がゴチンと音を立ててぶつかつた。文が突然立ち上がったせいだったのだが。

しりもちをつき、文は慌てて相手に言った。

「大丈夫か！？ごめん、俺、びっくりして……！」

「あ……いえいえ、あの、俺も勝手に声掛けちゃって……」

暗くてよく見えないが、同じような背格好の男だった。特に警戒は必要ないと思うが。

しりもちをついたまま、相手も照れたように笑った。

「あの、とりあえず立って……俺は大丈夫だから……」

「そうか？あ……お前、血が……」

悲しいかな、吸血鬼の性だ。血に飢えていなくても反応してしまう。
う。

いつもの癖で、とっさに文は相手の手をとって指先に口づけた。

お嬢さんは俊足？

驚いたように口を半開きにし、相手の青年はじつと文を見つめていた。

「ヤバい、やってしまった。」

ほんの些細な癖だからいつもは抑えてるのに どうして？

「あ……あの……？」

「っ……！？」

困らせている そんなことわかってはいるのだが。

この血の味は

誰よりも甘く、ほろ苦く

甘美な果実のごとく、喉を潤していく。

この手を 離したくはない。

「あ、えと……大丈夫だから。ちょっと、石で切っただけ……」

「う……ああ、うん……」

名残惜しいが困らせるのはつらい。疲れがすべて、たったの数滴で消えてしまった。

フードを深くかぶり直し、青年は文に頭を下げた。

「すみませんでした……」

「こっちこそ勝手に……ごめん」

「……知らない方にこんなことを言うのもどうかと思うんだけど、あの、こっちに女の子が走ってきてないかな？小さな子で、籠を持つてて……」

「女？もしかして、リリースって子か？」

「あ、知り合いか何かなの……？」

嬉しそうにほころんだ表情が、何故か曇った。

「いや、さつき会って……付いて来いって」

「……またそんなこと言って……」

「妹とか？にしても足の速い……」

「家族じゃあないんですが、そんなものかと。で、どっちへ？」

「見失ったんだけど……」

「そっか……」

あんなに足の速い女の子捕まえることできるのか。俺でさえ無理なのに。そもそもあの子は人間じゃない。別の匂いと、あの足の速さが証拠だろう。

じゃあなんで、こいつはあの子のことを「足が速い」って知ってるんだ？

「リリスは悪い子じゃないんだけど、イタズラが好きで……すぐに他人を迷子にさせるんだ。自分は遊んでいるつもりなんだろうけど、いい迷惑で」

「で、捜してんのか」

「うん。さつき会ったんだけど、こっちに逃げちゃって」

「そっかあ。んじゃ、手伝うわ」

困ってる人を見つけたら、助けたければ助ける！別に教訓でも何でもないが、良心があるなら当然のことだろう。

困ったように、青年は慌てて立ち上がった。

「そんな、いいから！一人で大丈夫だから！」

「いいっていいって。手伝わせてよ、あんたの手に余計なことしちやったし」

「余計なこと……か。それじゃあ、手伝ってくれるかな」

ああ、やっぱり余計って思われてる……。心が痛い、痛すぎる。にこりと笑んで、青年は文に言った。

「俺はヴァニッシュ。そう呼んで。で……お兄さんの名前は？」

「お兄さん言うな。同じくらいのくせして……俺は文」

「あや、か。うん、わかった」

そう言って明るく笑うこいつを見て、どうしてもさっきの血の味がよみがえってくる。何とも比喻しがたい、至高の蜜の味と、風が足元を走り抜けた。

「!?」

「いやがったあああああ!!!!!!」

常人の目には映らないリリスの姿を文は確実にとらえていた。準備もそこに急激にスピードを上げて走り出し、文はリリスを追った。

「うにやつ!?!」

「まあちやがれええええええ!!」

あと数メートル。逃げられたのは癪だから必ず捕まえる。

狭い路地をちょこまかと逃げ回るリリスに文が手を伸ばした刹那

「　　っ!?!」

「つうかまあえた　　」

ワキから出てきた一つの影　それは文よりも速くリリスを捕えた。

ズガシヤアアン!と破壊音を立て、リリスと影は地面に転がった。

「痛たたあ……何するのよ、レディに向かってえ!」

「レディ?……そっか、レディだったね」

そう言っただけ笑む影は、文を見やった。

「ああ、驚いてる……俺も足が速いんだ」

「あ、そう……」

ヴァニッシュ　やはりそうか。びっくりしたが気にもしてないらしい。

ぷくつと頬を膨らませ、リリスは文を睨んだ。

「むう。サイッテーよ。私をヴァニッシュに捕まえさせるなんて」

「……ごめん」

なんと返していいのかわからない。

唯一つわかったこと

この男も『化け物』だ

・

お嬢さんは俊足？

「ダメだろ、人をからかったりしちゃあ……文さん、困ってたぞ」
「そんな風には見えなかったわ。暇なお兄ちゃんの相手をしてあげたの」

「このお兄さんそこまで暇じゃないよ。急いで走ってたし……」

「私を追ってたのよ。低脳ね、ヴァニツシュは」

「……あのさあ」

つまり こいつらは『化けモン』だ。それだけが何となくわかった。そうでなけりゃ、別次元の人間だ。要は人以外の生物。

リリスを叱るのをやめ、ヴァニツシュは文に再び頭を下げた。

「すみませんでした、本当に……ちゃんと叱っておくので」

「いや、そんなのいいんだけど……」

「叱るなんて失礼言わないでよ。私はレディよ？」

「はいはい。それじゃ、文さん。俺たちはこれで」

「あ、ああ、うん……」

このまま逃がしていいのか？ノアに報告さえすればいいような気もするが、逆にとてつもなく怒られるような気もする。

リリスの手を引いて帰ろうとするヴァニツシュの肩を素早く文がつかんだ。

驚いたようにヴァニツシュは振り向いた。

「まだ何か？」

「ちよつと、聞きたいんだけど。あんたと、そのオチビさんについて」

「……リリス、何がしたいわけ」

文の真剣な表情を見て、何故かヴァニツシュはリリスを見た。ぶくつと再びリリスの頬が膨れた。

「あなた、勘だけは鋭いんだから。嫌になる」

「俺と文さんを鉢合わせにしようとしたよね。今わかったよ」

「何か悪いのかしら？ねえ、文」

「は……？」

突然喋りだすもんだからさっぱりわからない。つまりはアレか？俺はこのちっさいお嬢にはめられたのか？

ヴァニツシュの手を振り払い、リリスは文に向かった。

そして、口を開いた。

「ねえ、文」

「あ……何」

「お願いがあるの。聞いてくれたら　あなたがあの上の城の化け物だつてこと黙つててあげる。この町へ降りてきたとなれば、あなたは死刑かもよ？まあ、怖がつて誰も近づかないけれど」

「……何それ。あんた、俺のこと知つてたわけ」

化け物、と。確かにそう言った。

最初から俺のことは知つていて

なおかつ勝負を申し込み（？）

そして俺とヴァニツシュを鉢合わせた

「ええ、知つていたわ。匂いで分かった」

「で？そんな化けモンに何の用だ」

「ふふつ、一応理解力はあるのね。だつたら話すわ」

ニコつと愛らしく微笑み、リリスは一枚のカードを文の手の上に置いた。

かわいらしく装飾を施されたそのカードは、不思議に暗い場所でも輝いていた。

「差し上げますわ。私はもう捕まりはしない。【悪魔】の名において、自ら現れるまでは」

そう言つて、リリスはワンピース型のドレスをひるがえし、高く跳躍した。

「っ、待てっ！！」

「アハハハハハっ！！捕まえられるのですかっ！この馬鹿ども！！」

「ええー……何あの子ー……」

ヴァニッシュは捕まえるのに必死。そして文はぽかんとその姿を見ていた。

煙のように消えてしまい、リリスの声だけが路地裏に反響していた。

特に何事もなかったかのように、やがて文はヴァニッシュに言った。

「ま、これで報告もしないでいいわけだ。めんどいし」

「え……本当にいいのか？」

「捕まえには来てないしな。とりあえず、この紙」

表は白紙。二つに折りたたまれていたそれを文は開いた。

差し上げます。

「……うん、わかった」

「え？何が書いてあったの？」

「別に？気にすんなよ」

『差し上げます』と。流暢に美麗な文字で、ただ一言だけつづられていた。

この男を。ヴァニッシュをくれたらしい。別に欲しくないわけじゃないが、これはアレか。子犬を拾って親に怒られるパターンだろう。

ああ、ノアに怒られる　どうしよう。

禁忌の味

ひょっこりと、ヴァニツシュは文の顔を覗き込んだ。

「あの、何？どうしたの？」

「ん、別に。聞きたい？」

「焦らさないでくれる？他人とはいえ、そういうのは嫌い」

「じゃ、いいけど……」

焦らすとか言っな。そんなつもりはない。ダメージ受けても知らんからな。

心の中で色々と唱え、文はヴァニツシュに向きなおした。

「俺と一緒に来い」

……はあ？

何か言いたげな、けれど何かを考えだしたそんな表情であった。そして、ヴァニツシュはゆっくりと拳を固めた。

「！？」

「何それ……殴って欲しいの？あんだ」

「はあ！？何言ってるんだよ！」

「あんだこそ、何言ってるの！？俺になにしようとしてんのさ！」

「馬鹿か！？リリースに言われたんだよっ、お前をくれるって！」

言われてはいないが、勢い余って言ってしまった。間違っていない。

沈黙に沈み、ヴァニツシュは深くフードをかぶった。

「……リリースが、そう言っただの……？」

「そうだよ。文句があるなら俺に言っな」

「……ふえ……」

うん？なんて言っただけ？聞こえなかった。

ほたりと、ヴァニツシュの頬をしずくが伝った。

「あ……え、何、お前泣いてんの……？」

「泣いてない……泣いてないから……」

「けど、ほっぺが濡れてる……悲しいのか？」

「……吸血鬼なんかにわかるかよ」

あ、イラッ。吸血鬼馬鹿にすんなよ、このへたれ。

むっとし、文は雑にフードに手を伸ばした。

「あつ、やめてっ……！触んないでっ……！」

「顔くらい見せろ。泣いてないんだろ？」

「嫌あつ……！」

腹いせというかなんというか。大体、まだはつきり顔も見えていない。そもそも暗くて見えない。

バサリと、フードがヴァニッシュの背に垂れた。

ぴくり。ヴァニッシュの頭頂部で何かが動いた。

「……え？」

「み、見ないで！俺のことイジめるだろっ……！？」

「イジめる……？」

ぴくぴく、ぴくぴく。心をくすぐる何かが、かわいらしく動く。

慌てて頭を手で隠すものの、ヴァニッシュの手はあっさりと払われた。

「わ……かわええ……」

「っ！？やめてよ、触んないで！」

「いいじゃん、じつとして……」

ああ、なるほどな　こいつは、話に聞く【狼男】というやつだ。ぴくぴくとした、柔らかそうな獣耳。尾は隠しているのだろっけど、きつとある。他の特徴としては、耳を触られるのを極端に嫌がるということだろうか。

涙をさらにいっぱいのため、ヴァニッシュはへなへなと地面に膝をついた。

「ああ、そっか……狼の一族は、耳触られると力抜けるんだっとな」

「知ってるの……？なのに、嫌がらせっ……！」

「ダメか？んー、喉かわいた……」

走ったせいもある。乾燥には弱い。

じっとヴァニッシュを見つめ、文はにいつと笑った。

びくつと、手の中で耳が跳ねた。

「なあ……味見、もつかいさせて？」

「吸血鬼なんだろ……！？禁忌じゃないのっ……？」

「知るか。お前の血、おいしいから」

美味だから関係ない。禁忌だろうと、他人が不味いなどと言おうとも。

片手で耳をつかんで力を抜いたままにし、文は静かにヴァニッシュの首筋に牙を立てた。

スウツと 血を飲むのに力はいらない。まるでストローのように牙を伝って、そのまま血が流れ込んでくる。

涙と混じる甘い血液。涙がアクセントになるなんて思ってもみなかった。

やわらかな髪が手に心地いい。ひくひくと引きつるような血の廻りがこちら側にも伝わってくる。

このまま時が止まればいいのにと願い、文はひたすらに血を貪った。

ゆらりと、二人の背後で影が揺らいだ。

「あああああああやああああああ……！！！！！！」

「いつ……！！？」

「何をしとるんだっ、このドアホがあああ……！！」

いつの間にか、背後には鬼の形相のノアが立っていた。かなり怒っていることは見て取れた。

ぼたりと、地面に血が数滴垂れた。

ヴァニツシュとノア

ダラッダラと冷や汗を掻き、文はノアを見上げた。

「あ、あの……怒ってらっしゃるのですか？」

「みようちくりんな敬語を使うな。うざすぎるわ」

「けど、明らかに怒ってるだろ……」

怖い怖い怖い。だがしかし？持つて帰ってないということはまだ未遂なのだ。そこまで怒られることもないであろうということを想定してみたが、そんなことはないだろう。

いや、でも。味見しただけだ。そこまで深い傷はつけてないし、確実に数滴しか飲んでいないし　だが、怒られるとして思い当たる節が多すぎる。

だが、安心さえしなければ雷は落ちないだろう。

「怒るだと……？」

「え、ノア……？」

「この　ドアホがあああああ！！！！」

「ひいいやああっ！！？」

ギランと瞳が輝いた。恐ろしい光を宿して。

安心しなくても雷は落ちました。

*

*

*

「全く……てめエは昔から他人のものばかり欲しがって、結局は壊したり弁償させられたりと……馬鹿だな、いつも通り。そっちのてめエも、抵抗くらいしろ」

「し、しましたよ……」

とりあえず城に帰した二人は、床に正座させられてノアに説教を受けていた。長々と終わりもなく、ほとんどエンドレスに。

しゅんとしてしまい、ヴァニツシュはノアに頭を垂れていた。

「ごめんなさい……」

「ああ、謝るな。さっきのは冗談だ。 てめエはいい子なんだな」

「いい子……？」

心なしか、ヴァニッシュの表情がほんの少しほころんだ。

むっとし、文はがばりと立ち上がった。

「お前、それじゃあ曩廩だろ」

「曩廩？何のことだ？このアホが」

「アホって何回も言うな。余計アホになるぞ」

「知るか。大体、こいつは何者だ？どうして他人の血を飲むんだ」

「……こいつも、化けモンだから」

何と答えていいのかわからなかった。ヴァニッシュを押しつけられたのは確かなのだが。

深く息を吐き、ノアは雑に頭を掻いた。

「化けモン……な。で、正体は」

「【狼】の血筋だろうけど。耳とかあるし」

「獣……！？」

ひくつと、ノアの表情が引きつった。

小首を傾げ、文はヴァニッシュを見やった。

「何かおかしいのか？おいしいぜ？」

「……禁忌も禁忌だ。獣の類は、【吸血鬼】の中でもその血を飲んだら」

「 何がダメなんだよ。こいつは、変な【魔女】に押しつけられたんだよ」

理由や言い訳にはなっていない。ただ、少し怒られることにイラついた。

すつ……と、ノアの手がヴァニッシュの額に触れた。

「温かいな……けれど、てめエの中は空っぽだ」

「っ……どういうこと」

「わからないか？ 文。てめエ、こいつの血を飲んだのに気が付かなかったのか？」

「何が……？」

ふうと、二度目のため息がノアの口から洩れた。
窓の外から射す夕陽が、熱っぽくヴァニッシュを浮き彫りにしていた。

「こいつは 頭の中が空っぽなんだ」

数瞬 空気が凍りついた。

静かに、ヴァニッシュはノアを見上げた。

「……からっぽ？」

「ああ。 てめえ、記憶が欠けているんだろっ」

「っ、記憶？」

聞き返したのは文であった。

ふるふると、ヴァニッシュは震えるように首を振った。

「記憶……？ どうして……っ？」

「自分で分かっているだろう？ どのあたりの記憶がないのかも、何が欠けているのかも」

「……ヴァニッシュ？」

無言でうつむき、ヴァニッシュは膝を抱えた。

ぼそぼそと、聞き取りにくい声がヴァニッシュの口から洩れた。

「何も……知らないんだ…… 気付いたらリリースがいて…… 俺を助けてくれて……」

「……名前は」

「ヴァニッシュ。それだけはっ…… ちゃんと、覚えてたから……っ
！……」

必死にそう言い、ヴァニッシュはノアにすがるように言った。眼に涙をため、潤ませて。

うう、とノアが低く唸った。

フードの下

「そんな目で見るな。俺が悪いみたいじゃないか……」

「お、ノアがひるんだ」

「黙ろうか、文。口を縫い付けるぞ」

にこりと嘘っぱい笑みを文に向け、ノアはヴァニッシュを再び見やった。

びくびくとおびえたまま、ヴァニッシュはさささと後ずさった。

「……嫌われてんじゃねーの？」

「……そんなわけあるか」

「だって、こいつ泣きそうだぜ？」

「っ、うるさい！そんなことないっ、嫌われるはずがないだろう」

「へえ、自信アリ？じゃあ、聞いてみな」

からかうかのように、文はそう言って笑った。

むっとしたように、ノアはギロリとヴァニッシュを見つめた。

さらにびくびくと怯え、ヴァニッシュは壁際まで逃げた。

「……ほら、嫌われてる」

「っ……おい、てめエ！名前は！」

「ヴァニッシュ……！」

「そうか。ヴァニッシュ、来い！」

何故か怯える者に対して命令形。それこそまさに間違っているのだが、ノアは一向にそれを気にしていなかった。ただいつも通り、文に接するのと同じように。

ぶんぶんと首を振り、ヴァニッシュは本棚の陰に隠れた。

「あーあ……どうすんのさ」

「~~~~っ！！！！てめエがどうにかしろ！！」

「逆切れえええ！？ったく……しゃーねーな……」

ぐしゃぐしゃと髪を掻き、文はそつとヴァニッシュに近付いた。垂れた耳に、うるんだ瞳。ひどく心をくすぐられて感情を抑える

のがやつとなのだが、そんなこともかまわずヴァニッシュはそんな状態だった。

右手を差し出し、文はヴァニッシュの頭をなでた。

「ごめんなあ……うちのは、誰に対してもああだから……怖かったよな……」

「あや……？」

「ダイジョーブ。お前のこと、結構好きだよ。ノアも嫌いじゃないっぼいから」

「嫌いになった」

即座に否定。一気に空気が凍った。

なんとか空気を戻そうと、文はヴァニッシュに言った。

「お、俺は好きだから！気にすんなよ！？」

「……そう」

「おい、文。そいつに優しすぎるんじゃないか？」

「ノアこそ、苛めんなよ。かわいいのに」

「動物に弱すぎるのがためエの悪いところだ。仮にも【狼】もしも交流があることが向こうの奴らにバレたら」

「禁忌なら、とつくに犯してるだろ。ノアの血を飲んで、ノアを愛して、ヴァニッシュの血も飲んだ。これ以上の禁忌はないからだから、追放されたんじゃないか」

今までとは一転、冷めた調子で文は言いきった。

体育座りの姿勢のまま、ヴァニッシュは恐る恐る文の手をつかんだ。

「うん？何、どーしたの」

「……俺を、苛めない？」

「苛めない。嘘はつかねえよ」

「嫌わないで……くれる……？俺と一緒にいてくれる……？」

「リリスに渡されたままだからな。一緒にいる！」

きっぱりと断言し、文は無邪気に笑んだ。

ほっとしたかのように表情の強張りをなくし、ヴァニッシュはゆ

つくりとフードを脱いだ。

陽が堕ち、涼しげな夜の風が部屋を吹きぬけていった。夜空には宝石のように輝く星がちりばめられ、まるで海のようなであった。

「見てよ」

長めのフードをのけると、薄いシャツの下から色の白い肌がのぞいた。ノアよりはもう少し健康的な、それでも【狼】としては白すぎる気もした。

チャリンと音を立て、ヴァニッシュは文の手を自分の首に押しつけた。

「痛いんだけど……触っていいよ」

「っ……なんだよ、これっ……!!」

鈍く冷たい、鉄製の枷《かせ》 家畜につけられているような『首輪』が、ヴァニッシュの首にもはめられていた。

しばらくそれに触れていたが、文はそつと手を離れた。

「……さっきはなかったのに……」

「時間制なんだよ。夜にだけ現れるように、呪いがかかっているから呪いって……何だよ」

「逃げられないように。……これくらいしか覚えてないんだよ」
表情を曇らせて、ヴァニッシュはそう言った。

少しの間何かを考え、文はノアを見やった。

「……苛めたら、本気で殴るから」

「了解した。守らねばならんらしいな」

「追われてるわけじゃないと思うけど。俺たちとおんなじような、

『外れ者』かもよ」

「だろうな。おい、ヴァニッシュ」

びくっ。まだ怖いらしい。

その反応に深々とため息をつき、ノアは文を睨んだ。

「厄介な拾いものだな」

「そう言うなって。な、ヴァニッシュ」

「え……何……?」

「 守るよ。お前のこと、全力で」

にかつと笑い、文は再びガシガシとヴァニッシユの頭を撫でた。
ノアに接するのと同じように。

ほう……とヴァニッシユの表情にも笑みが浮かんだ。

それを横目で見、ノアは何も言わずに部屋を出て言った。わから
ない程度に表情を曇らせて。

料理

「ノア？」

振り向いたときにはもう遅く、音も立てずにドアが閉まった後であつた

*

*

*

苦しい。

何故だろう、こんなにも苦しく、泣きそうになる。

何もかもを冗談ととらえているだろう？

てめエに、俺の想いは永遠にわからないだろう

？

禁忌を犯してまでてめエのそばにいたいのに。

自分の血を飲みつくされようと、てめエなら許せるのに。

衝動のすべてを永遠に俺だけにぶつけて

そして 永遠に俺のものでいて

*

*

*

その日、キッチンの机の上にはおかしなものが並んでいた。カラフルでいかにも毒のありそうなキノコ類に野菜、根菜、そしてどこから調達してきたのかと思われる怪しげな調味料多種。

それを丁寧に切り、マッチ箱が取り出された。

パァンッ！

「うおっ！？あっちい……！」

不意に文の手元から火花が散り、地面へと散った。

ひょいと、ヴァニツシュが顔を出した。

「……何やってんの」

「うあつ、いたのか！？」

異様に驚いたりアクションで、文は突然現れたヴァニツシュにそう言った。

特に驚きもなく、ヴァニツシュは文の手元を見た。

無残に散っていったマッチの山が、黒く焦げついて積まれていた。

「……マッチの無駄遣い？何やってたわけ」

「んー……なんか、火が点かねんだよ。おかしくねエ？」

「……あー……そつか。マッチ使ったことないのか……」

憐れむように文を見て、ヴァニツシュは残ったマッチを擦って簡単に火をつけた。

眼を丸くして、文は歓喜した。

「おおおおお！！すげえ！！！」

「……そう？」

「手品みたいだよ！お前すげえ……！」

褒められたことに少し驚き、ヴァニツシュは文から眼を背けた。

フライパンを温め、文は手際よく肉類を入れて炒め始めた。

「……あんたってこんなの食べるの？」

「んあ？……まあ、ちよつとな」

「へえ……そうなんだ」

ああ、できれば見ないでほしいのだが。マッチ一つ擦れなかった自分に腹が立つが、このままここから去って欲しい。

お前のために作っていた、なんて。言えるとも思っているのか。もともとサプライズの予定だったのに。

内心は冷や汗ダラダラで、文は野菜を投入した。

「……順番は？」

「へ！？何が！？」

「根菜が先だろ？火が通りにくいのを先に入れないと」

「あ、ああ、そうだな！忘れてた」

ガシッ。伸ばした手をヴァニツシュがつかんだ。

「隠してることある？」

「っ、はあ！？んなわけないだろ」

「俺は【狼】だよ。誤魔化せるとでも思ってたんの」

無駄に鋭い。獣系はこういうところが苦しくなる。

はあ、と諦めたように文はため息を吐いた。

「あんまり見透かすなよな。俺はお前みたいに見透かせない」

「見透かすって……わかりやすいから」

音を立ててフライパンから水分と油分がとんでいく。手にも散ってひどく熱いのに、何故か何も感じない。

言われたとおりに材料を入れ、文は最後だけ手際よく皿に盛った。

「うん、こんなもんだろ。味付けは適当だけど」

「……ノアに食べさせるの？」

「え？ん、食べてくれんのかな……ノアに食べさせたいんだけどさ、あいつって外の食べ物口にしないんだよ。俺が渡したら少しは食べてくれるけど」

「……ふうん」

気付かなかった。

ヴァニツシュの表情は暗く、唇は固く噛み締められていた。

フードの影に隠れたその表情を見て、文は少し慌てた。

「どっ、どうした？おなか痛いのか？」

「……あんたにはわかんないよ」

「狼の腹痛とかはちよつとな……ごめんな」

「っ……謝らないでよっ……」

昔から「空気読め」だの「そんなこと言う空気じゃないだろ」とか言われた。十分に読んだ上で破壊するのが自分の悪い癖なんだが、

よしよしとヴァニツシュの頭を撫で、文は明るく笑った。

「耳垂れてんぞー？元氣出せて、な？」

「……子供じゃないから、やめて」

「俺のがちよつと高いけどな……けど、お前って撫でてたら気持ちよくって」

「馬鹿にすんなよ、吸血鬼のくせにつ……！！」

キレたらしく、突然ヴァニツシュは文の手をつかんだ。

眼を丸くして、文はヴァニツシュをまじまじと見つめた。

「な、何？」

「……同情ならやめてくれよな」

「は……？同情？」

「俺を嫌いならっ……こっから追い出してよ……」

突然何を言い出すかと思えばそんなこと。何の戯言かは知らないが、そんなことをする必要がどこにある？

シンクに文の身体を押し付け、ヴァニツシュはうつむいた。

「……二人の方が良いに決まってる。ノアと一緒にいるあんたはすごく楽しそうで……」

「……そんなこと、気にしてたのか」

「あんたが俺に優しくするのがおかしいんだよ！【狼】と【吸血鬼】は仲良くなっちゃいけないのにつ……あんたが優しくするから逃げられなくなる」

気を遣わせていたのか

気がつくのが遅かった。ヴァニツシュを住まわせるのに、ためらいはなかった。なのに、それがプレッシャーになっていたなんて。それが悔しいのに何故かおかしくなり、文は手をシンクから離れた

じゅつ。

「！？あつつう……！！」

フライパンに当たったらしい。水につけるのを忘れていた。料理初心者もいいところだ。

火傷した右手の小指を舐め、文は照れたように笑った。

「料理なんて、素人がするもんじゃないよな。火傷しちゃった」

「っ、大丈夫か……？」

「平気平気。舐めときゃ治るだろ」

大したことなんてない。これ以上心配をかけさせてたまるか。自分のなけなしのプライドとメンツにかかわる。

赤く腫れはじめた指を見つめていたヴァニッシュだったが、ずっとその手をとった。

「この間のおかえしだから」

「」

紅血

クチュツ

「っ！んなっ！？」

「じっとしてて」

何故か怒られた。それにしても、驚いた。

ぬるりと舌が指を舐める。火傷にピリリと滲みて、痛くもむずがゆい。

だが、そんな甘い夢も終わりを告げた。

がぶっ。

「！？い、いだだだだだだだ！！」

「うあ……」

強く、指にかみつかれた。流石【狼】、かなり痛い。火傷以上に痛い。

慌てて手を離し、ヴァニッシュは口元を拭った。

「あ……そのっ、ごめん……！」

「へ、平気平気。痛くないから」

「痛いって言っただろ……ソース付いてたから……ごめん」

つまりは、おいしそうだったと。噛まれたことは確かに痛かったが、それ以上にびっくりした。眼も覚めた。

ぐりぐりとヴァニッシュの頭を優しく撫で、文は何ともないとも言うように笑った。

「大丈夫だから。これ、食べてくれたら許すよ」

「え……けど、これってノアの」

「いいから。あったかいうちに、食べて」

ノアは食べてくれないだろう。なら、ヴァニッシュに食べてもらいたい。もとよりそのつもりだった。

噛まれた手を隠すようにして、文は笑顔で素早く部屋を出て行っ

た。

*

*

*

その日、文はまだベッドに寝転がっていた。

「いつか、周りには誰もいなくなる。」そんなことを考えて。

昔から自分は特殊だった。自惚れだと嘲笑するやつがいても否定はしない。

苦しい 特殊ゆえに、誰にも近づけない。好きなものにも、ヒトにも。

「……どうすつかない……」

「 文、入るぞ」

きしんでドアが開く。

眩しすぎる逆光の朝日の中に、着流し姿のノアがいた。

にひゃつと笑み、文は寝転がったままノアの方へ視線をずらした。

「んあー、何？良いことでもあった？」

「いや、よくはない。むしろ悪い」

「そうなの？へえ……言ってみ？聞いてあげるから」

なんだか久々に会った気がする。実際はそんなことはないのに。

ぺらんと、ノアは懷から封筒を取り出した。

「……まだ、野良犬が出るらしい。あいつが正体だと思ったのだが」「マジで？えー……で、その封筒はなに？」

「俺たちに捕まえると まあ、無茶難題を押し付けてきたというわけだ」

薄墨色の着流しが、朝日と違い目に優しくノアに映えていた。封筒を受け取り、文はぐしぐしと目をこすった。

「ホントに無茶だな。で、返事は」

「していない。どうする、捕まえるのか」

「殺した方が早い。けど、殺したら怒るだろ」

「俺はどうでもいい。獣など全て死ねばいい」

「またそんなこと言うし……」

「獣嫌いも甚だしい。理由を挙げればキリがないらしいので今はスル」。

ベッドのふちに腰掛け、ノアは部屋の本棚から厚い本を一冊取り出してきた。

ノアの膝に顎をのせ、文は首をかしげた。

「そんな難しそうな本、読んで楽しいのか？」

「てめエはもつと本を読め」

「えー、無理。読んでよ」

「……読んでもつまらんぞ。自分で読め」

「つまんねーもんを読んでんのか？ノアになら、何言われても面白いって」

「うるさいぞ、女たらし」

冷めた眼で本を読み、人を全く相手にしないこの態度。これもすべて、ノアだから許せることなのだ。他人がこんなことしたらただの興醒めだ。

つまらなさそうに頬を膨らませて、文はノアの首に腕をからめた。

「飲ませてよ。読んでる間だけでいいから」

「……読書に集中できない」

「集中する気なら、俺の部屋には来ないだろ。だから、いいじゃん？」

「……はあ。好きにしろ、来たのは俺だ。返すのがめんどくさいからここで読むんだぞ」

「わかってるって。んじゃ、もらう」

「本当は、てめエといたいんだ　なんて、口が裂かれようと
も言えない。」

ノアの膝の上に座り、文は舌で首筋を舐めた。

「……………」

ぴりつとした、淡い痛み。刺さった痛みとはまた違う。

白い牙がゆつくりと突き刺さる。痛みを伴うのに、文がこれで傍にいてくれる

「ん ああ つ……………はあ……………」

「つ、ためエ……………もう少し静かに飲めないのか」

「う……………だって、着物だから熱入っちゃって……………ノアの着物姿ってエロいし、そんじょそこらのお嬢さんよりも美人だし……………」

「……………美人？」

「そう、美人。だから、じつとしてて」

首に空いた二つの穴。そこから流れ出す紅い液体に心がうずき、本能のままにノアに噛みつく。

はだけ乱れる肌は白く、肩には古い傷。美しさに全く合わない古傷と綺麗な白い肌に紅い色がよく映える。

「……………痛い？」

「いや……………前よりはマシだ。気にするな」

「……………ノアは俺の血飲まないわけ」

「は……………」

一度だつてされたことはない。いつもする方なのは俺だ。

珍しく目をまん丸にして、ノアは視線を本から外した。

「……………ためエの血を飲むのか？」

「いいだろ。噛まれるのがどんな気持ちか知らないから」

噛まれない。噛まれた時の気持ちかどんなものか知りたいというものもある。

それに ノアに嫌われていたら生きていけない。

俺に頂戴

いつだって自分は噛まれたことがない。それは時に不安で時に苦しい。嫌われているんじゃないかと、それが自分を締めつける。

目をぱちくりとさせ、ノアは静かに本に視線を戻した。

「……ノア？聞いてんのー？」

「また、冗談だろう。そんなことに付き合っている暇はない」

「……あー、やだやだ。そんなことなんて、ひっでーの」

「本当のことだろう。冗談はガキっぽいからやめておけ」

冗談、ねえ。そういう風にとらえられているのは知っていたけど、いざ言われるとつらかった。ノアはどうともないのだろうけど、自分的には大ダメージだ。

ふいと、それ以上は何も言わずノアは読書を再開した。

何も言っではくれない。話しかけても無視される。それがノアなのだが、寂しくなるのもいつもと同じ

「ノアあ」

「うるさいぞ。さつきから、何なんだ」

「……俺のこと、好き？」

不安だから訊いてみた。どうせ、いつもと同じようにクールに打ち返されるのがオチだろうけど。

しばらく黙ったままでいたが、やがてノアは本を閉じた。

「さあ。どうだろうな」

「曖昧い……はつきり言ってくれた方が嬉しいんだけど」

「はあ……？何を言ってるんだ、気色悪い」

「ザクツてくるからやめてあげて。禁忌はノアだって犯してるだろ。今更すぎねえ？恐ろしくハイブリッドな体だけどさア」

「一か月は飲まず食わずでも大丈夫だからな。それに、まだここには血が残っている。これ以上はいらない」

ああ、無愛想。これだから俺はノアが 好きなんだ。

少しからかってやるうかと、文はノアの唇に指先を滑らせた。

「俺を好きなら、吸血行為してよ。俺たちの特権だろ」

「っ……！？あんなア……っ！」

「嫌なわけ？だったら、絶交しよう」

「どうしてそうなるんだ……？てめエ、やっぱり馬鹿だな」

「馬鹿でもいいよ。だから、俺を食べて」

ここまでくると、ただムキになっているだけだ。それ以上の想いはないし、ノアを折れさせたいという願望が強い。

ノアの首に両腕をからめたまま、文はぐつとノアに近づいた。

「ノア」

「っ、邪魔だ、向こうへ行け！」

「好きだろ？俺のこと。だから、血を飲んでよ」

さあ、折れる。からかっているだけだから、要するに暇つぶしだ。とりあえず本をサイドテーブルに置き、ノアははあと溜息を吐いた。

「てめエの血、な。うざいから飲んでやるよ」

「うざいって言うな。って……飲むんだ？」

「嫌なのか？悪いが、俺はてめエ並にヘタだぞ」

「いーよ、別に。……あー……襟が邪魔……」

ノアは和服だからいいとして、自分は普通の洋服だ。さすがに襟が邪魔になる。

よりノアに密着して、文はこともなげに言った。

「脱ごうか？返り血とかは洗うのめんどい」

「っ！？脱ぐ……？」

「え、何？ダメ？」

「いや、別に……そうじゃないんだが……」

「そうか？……あー、じゃあ脱がせてよ。汗でべたついて脱げない
……」

「はあああああ！？自分でしろ！」

「……ノアあ」

憐れっぽく名前を呼んでみる。案外効果があつて面白い。
頬を赤く染めて、ノアは文から一度眼をそむけた。

「きよ、今日は暑いから……特別だぞ」

「おわ、やつさしい。ボタンが多くてさあ……」

「ボタンなら、汗関係ないだろう……」

「いいじゃん、別に。優しいから甘えんの」

本当に優しい。だから、もっとからかってやろつかいうイタズラ心が発動してもおかしくないというわけで。

ノアの首に腕をからめたまま、文は後ろに倒れこんだ。

ボタンとベッドの上にあつたクッションが跳ね、スプリングがきしんだ。

「ちよっ……何しやがんだ!」

「照れてんの? 近いくらいでちよっどいいよ」

「はあ! ? てめエ、頭は大丈夫か! ?」

傍から見ればノアが押し倒したように見えるのだが。実際は逆だ。慌てふためく姿も面白くて大好きだ。

仕方なくシャツのボタンに手をかけ、ノアは舌打った。

「どうして俺がこんなことを……」

「別に全部外さなくてもいいんだけど。邪魔にならない程度」

「汗でべたつくから、後で着替えておけ。吸血鬼なのに汗など……」

「そりゃ、俺だから。 ノア、だあい好き」

にぱつと笑つて、そんなことを言ってみる。暑さにやられているのか、言動も意識もかなりヤバい。

ぷつつん。何かの切れる音がした。

「ん? ノア?」

「……てめエ、俺をどうしたいんだ?」

「へ? ああ……っ、ごめん! バレた……?」

からかっていたのがバレた? ちよつと早すぎる。だが、ノアならあり得る。

最後までボタンをはずし終わり、ノアは指先で文の身体に見えな

い線を描いた。

「あ……ノア……？」

「てめエが望むなら……満足させてやるよ。その体、俺によこせ」

「え……？……ノアああああ！？」

壊れたかつ！？まさか、からかいすぎて壊してしまったのか！？
ふっふっふと不敵な笑みを浮かべ、ノアは文の首筋を冷えた指先
で何度もなぞった。

びくつと、文が跳ねた。

「の、ノア……？ごめん、えと……」

「文」

「は、ハイ……！？」

「ヘタだが……許せよ」

そう呟くように言い、ノアは肌に牙を突きたてた。

ヘタ　なんて。そんなの、嘘だ。ノアのテクニクと妖しさで、
参らされる。

血を吸うことは快楽に満ちている。

しかし　血を吸われることにも、快楽がある。それが大好きな
人ならば。

感じてしまうのを隠せず、文は苦しそくに声を漏らした。

「っ……はあ……っ……」

「……嫌なら、逃げろよ。俺はてめエが思うほど善人じゃない」

「……いいよ。ノアから逃げたりしない」

「けど……てめエは」

「いいから。もっと飲んでよ。噛みついていてよ。俺から　離れ
ないで」

遊びはいつしか本気に。ノアに酔わされているのだと、今の熱っ
ぽい脳では理解できなかった。

自らも暑そうにボタンをいくつか外し、ノアは文の髪に手を入れ
て何度も梳いていた。

暇つぶしのお遊び

壊されても、きっとそれは快楽のまま変わ

らない

「　　ノア」

「ん……何」

「キス……してよ」

「っ……ああ　わかった」

自分からキスをねだるのはしたことがない。そもそも、血は通っていればどこからでも飲める。ノアにも無理してしてもらう必要はなかったのだが。

文の身体をしっかりと押さえつけ、ノアは息を殺してそつと文に唇を重ねた。割れ物を扱うかのように、優しく

俺に頂戴（後書き）

長かったですかねえ・・・？
いつもよか長いですか・・・？

これくらいのろけてくれたら書きやすいんですが（え
ぼちぼち行きましょう！（誰に言ってるの

初あとかきでしたっ 今更

訪問者は侵入者

体が熱を持ってひどく苦しい。熱で瞳が潤み、ノアの姿がぼやける。

長い髪は乱れても美しく、妖しく、宵闇に映えてむしろ昼間よりも美人だった。人の心を惑わして、狂わせてしまうほどに。

夢中でノアをただ真っ直ぐに見つめ、文はゆっくりと半身を起した。

「ノアあ……大丈夫……？」

「は……？何がだ」

「俺よりも体力あるようには見えないから……」

「……そう、だな……体力は無い」

「じゃあ……なんで……？」

「……知らん。てめエは、案外攻めると脆いな」

窓ガラスに体を押し付けられて、妖艶な笑みにやられる。どんなに強がってみたところで、束縛から逃れることはできない。

単なる『遊び』だったのに　どうしてこうなってしまった　？

鍵をはずして窓を開け、文は外を軽く見やった。

爽やかに、風が部屋に吹きこんだ。

「ずつと」

「ん……？どうした」

「……いろんな初めてがさ、全部ノアだよなって……」

「ああ……そうだな。てめエがこの世界にいる前から俺は生きているから……」

俺の小さいころからノアは髪が長かった。そのせいでかわいい女の子だと思っていた時期があった。いつも木陰で本を読んでいて、膝の上に乗ると絵本を読んでくれた。

初めての友達であり、家族よりも貴いヒト。

どんなに苦しくても傍にいてくれたヒト。

何よりも全てを教えてくれて　そして、俺が初めて吸血したヒト

「……どれくらい飲めた……？」

「は……？さア……数えてない」

「そっか……ノアは」

「ん？……どうした？」

「楽しい？俺と遊んでて」

俺は楽しくても、ノアはどうなのか。昔のような遊びをまだ楽しいと思ってくれているのか

ほんの少しやはりわからないくらいに表情を曇らせ、ノアは文の唇に指を滑らせた。

「　楽しいよ。てめエは、俺に従順だから」

「従順……？そっか？」

「でなきゃ、キスなんてしないだろう。てめエにとっては遊びなんだろうけどな……」

「ん、まあ……そうだよな。　だから、その……」

「……だから、何なんだ？」

傍にいてくれるヒト　ずっといてくれたから、離れられるのが怖い。

だから、確かめるように聞いてしまう。

ノアは、優しいから

「　好き、なんだよ。ノア」

「……ガキっぽいな。まあ、ガキだが……」

「見た目はおんなじくらいだろ。ガキって言うな」

「ガキだよ、俺にとつては。だから　キスだってしてやれるんだ」

「……釣りあってないのか？」

「っ……そんな憐れそうな眼をするな。イジめてるみたいじゃないか……」

二桁ほど歳の差がある。【吸血鬼】はある程度歳をとるとそれ以上外見が変わらなくなるのだが、ノアは自分よりも少しだけ年を取ったような外見をしていた。それでも、ガキといわれるほど自分も生きていないわけではない。

ぐしゃぐしゃと雑にぎこちなく、ノアは文の頭を撫でた。

「……今日はもうやめようか。あまり遊びすぎるのも体に悪い」

「俺が……ガキだから……？」

「っ、違う……っ！」

「……うん、悪い。困らしてるよな……」

「　　はあ………てめエは、本当に変わらないな」

そう言っただけ息を吐き、ノアは何度も文の頭を撫でていた。慈しむように、それでも慣れていないようでぎこちなさは変わらずに、それでも気持ちよさそうに目を細め、文はノアをずっと見つめていた。

*

*

*

自分はノアに依存しすぎている

そんなこと、昔からわかっていた。ずっとずっと、ノアがいてくれたからここまで逃げてこられたのだ。

いつだって、一人じゃいられない臆病者　禁忌を犯し、一族から逃げる羽目になったそんな自分でも、ノアだけはずっとそばにい

てくれたから

「……んー……」

眠い……吸血鬼の夜行性もかなり自分は抑えられているのだが、それでも時折異常に眠くなる。

椅子に持たれてぐったりとうなだれ、文は氷を一口に含んだ。

嫌な予感がする。それも、とてつもなく。

「……おい」

「っ！？うわっ、びっくりした……！」

「へえ……そう？」

ひよっこりと、ヴァニツシュが突然文の顔を覗き込んだ。

驚いて椅子をひっくり返しそうになり、文は何とか机にしがみついた。

「お、おはよ……」

「……うん、おはよう。大丈夫？」

「な、なんとか……びっくりせんよ……」

「眠そうだったから。……あ、コレ。ポストに入ってたけど……ノア宛だつて」

ヴァニツシュの手に乗っている、薄っぺらい封筒。真っ黒で、それを留めるのは紅い蝶のピン。

見覚えのあるその姿　嫌な予感とはこれのことだろう。

ノアを起こそうと階段に向かうものの、文はぴたりと止まった。

「……起こせない。怖すぎる……！」

「はあ？なんで」

「寝起きは怖いんだよ……あー、やべえな……」

「……まあ、低血圧っぽいけど……で、それは誰から？」

「　　マリア伯母さ」

カッシャーンっ！！

よろしくない音は窓の方から。絶対に何かが壊されている。

ヴァニツシュにフードを深くかぶらせ、文は舌打った。

「ああー……ちつきしょう、地獄耳め……」

「へ……?」

「いいから。もう来たのかよ……」

実際のところ、手紙はいらなかったんじゃないかと思う。必要なのは、常識と物を破壊する概念を取り払うことと　ドアから入るということ覚えるということ。

やはり窓ガラスが割られており、床の上には黒い人影が。黒服だから、余計にそう見える。

冷や汗タラタラで、文はヴァニツシュを少しばかり下がらせた。

「っ……久しぶりっすね……伯母様……」

「伯母様ですって? 聞き捨てならないわね、少年A君」

「……いい加減名前覚えてください」

ボンテージ風に作られた、シツクな魔女の服。黒と紫を混ぜ合わせたようなその色は、見るだけで悪寒がする。

「年寄りはその服着るな」と言ってやりたいが、一度言っただけでボコボコにされたのもう言わない。それよか問題は。

「どうして来たんです?」

「さア　風が私を呼びましてよ」

相変わらずだ。もう嫌だ。

バサリとマントを翻し、その女性はにまりと笑んだ。

「久しぶり。A君、さっさとご飯を用意して頂戴?」

訪問者は侵入者 ？

「……ご飯ですか？」

「そつ。最近ダイエツトしてたんだけど、飽きたの。だから、ご飯頂戴」

「……はあ。開口一番がそんなことですか。まだ、ノア起きてないんですけど」

「いいわよ。何でもいいから用意なさい。私、空腹だけは耐えたくないの」

我が俤な伯母様だ。そんなこと昔から知っていたが。

そつと、ヴァニツシュが文の袖を引いた。

「あのさ……俺、どうすればいいわけ？」

「ちよつとじつとしといて。じゃないと伯母様に」

「なあにい？その子と、何こそそ話してんの？」

バレるわけにはいかない。伯母様の恐ろしさは自分がよく知っている。

軽く首を振り、文はヴァニツシュを後ろに隠した。

「何でもないつすよ。それよりも、どうして来たんです？」

「訪問するつて手紙出したわよ？何か、あなたが禁忌犯してから私以外は会えなくなっちゃったわけじゃない。まあ、偉い人の中ではつて話だけど。みーんな、あなたが怖いみたいよ」

「……脱線しすぎです」

「あら、そうね。来た理由わね」

ちろりと文の手を見やり、マリアはほうと息を吐いた。

手の中にあつた封筒は、ふわりと舞つてマリアの手中へと収まつた。

「まだ読んでなかったの？トロい」

「今さつき届いたんスよ。読めません」

「……ま、いっか。でね、実は最近あちこちに化け物がはびこつて

るのよ」

「化けモン？」

「ええ。心当たりはないかしら」

「そういえば、ノアもそんなことを言っていた気がする。あの時は『野良犬』だと言っていたが。」

「ヴァニッシュかと疑ったこともあったのだが。ヴァニッシュがうちにいてもまだ被害があった。つまり、まだ別人がいる。」

「人を襲ってただけだね。最近、なーんかおかしくって」
「……おかしいって？」

「【吸血鬼】が襲われ始めたのよ。それも、致命傷を与えられてね。ほとんどが死んでしまう」

「はあ！？ありねえだろ！？」

「ありえるのよ。“不死殺し”でしょうけど」

「……伯母様は死なないわけ」

「ははっ。私が死ぬようなら、あっちの偉い人は全員滅亡よ。吸血鬼は滅ぶわね」

確かにそうかもしれない。伯母様は尋常なく強い。俺と同じで太陽も大丈夫なのにシミがどうのこうのと言っているが。

鞆から手鏡と口紅を取り出して化粧直しをし、マリアは手紙を机に置いた。

「ま、ここでじっとしてても仕方ないわね。食事はB君が起きてから。さア、A君。遊ぼう！」

「は……？遊ぶ？」

「そうよ。あなたの体がなまってないかどうか、見てあげる」

「……遠慮します」

「そっちの子は見てなさいよ？でないと、殺しちゃうから」

不穏発言。先に告白してしまうと、伯母様は尋常なく強い。何度も言うが、本当に強い。シャレにならないくらい強い。まさに『化けモン』なのだが。

魔女の帽子を脱いで、マリアは文の腕を引いて外に出た。

照りつける太陽に、マリアは眉をひそめた。

「ちよつと隠れてなさい。私の美容を害するものはいらないわ」
「っ！？ちよつ、太陽っ……………！」

さつとマリアが手を払うと、太陽に厚い雲がかぶさった。魔法と
いうか、ここまで来ると神に近い。

数メートル文から離れ、マリアは笑んだ。

「さ、来なさい。A君も少しは強くなつてるといいんだけど」

「……………あー、もうっ！わかりました、やりやあいいでしょっ！」
「よろしい！かかつてきなさい！」

勝てる気はしない。っーか、伯母様が怖すぎる。

目を閉じて意識を手に集中し、文は両手を前に突き出した。

ボワンとした淡い光が手の中へと集まり、それは横に長く棒のよ
うな形を作った。

「本来、【吸血鬼】は魔法使えないんスよ？魔女の特権でしょ
う」

「私の仕込みに、何か文句でも？」

「いーえ、感謝してます……………」

「隙ありまくりじゃない」

マリアの手中にも短剣が。片や、自分はまだリーチの長い剣だ。

ダメでもともと。さあ、勝てるか？

マリアから一閃。肉眼ではとらえられない速さだが あのとチ
ビのおかげでスピードには慣れた。

体勢を低く構え、残像に惑わされず 斬りつける。

「っ……………！あら、なかなか強くなつてるじゃない？」

「伯母様に勝てるわけないでしょうっ……………！」

足払いを試みるも、二発目は不発。あの一閃は避けきれたが、
自分の攻撃もかすった程度だった。

続けざまに一撃が放たれた。

「っ!!」

バキッ。剣は匣で、素手での一撃が文の腹部に打ち込まれた。なんとか痛みをこらえ、文はザツと距離をとった。

口の中に血がたまる。胃の中からこみあげてきて気持ちが悪い。

「そんな細腕で、よくも……」

「女性強いものなのよ　おバカさん」

につこりと微笑み、マリアは剣を投げ捨てた。

そうして両手を頭上に上げ

「　　美しく散りなさい、A君？」

「っ…………!!」

【吸血鬼】の苦手とするモノ　『流水』
それを召喚しようとし、マリアは笑んでいた。

ヤバイ

!!!!

「文っ…………!!」

「来るなっ、バカ!!」

放たれる流水。こちらへと駆けてくる狼の青年。

ドシヤリと、文は地面に倒れた。

訪問者は侵入者 ? (後書き)

誤字訂正しました

訪問者は侵入者 ？

地面に一齐に流水が溢れた。それは地面を削り、大きく湾曲して脇の道へと反れていった。

ケラケラと、マリアが声をあげて笑いだした。

「あーっはっはっはっはあっ……！！ああ、かわいい。そしてなんておバカさんなのかしら」

「っ！アホかつ、何やってんだよ！」

地面に体をこすりつけ、ヴァニッシュはぐったりと伏していた。体の至る個所から血を流し、特に右腕を大きくすりむいていた。

なんとか起き上がって、文はヴァニッシュを起こした。

「おい、ちゃんと立て！これくらいでへばるな！」

「ダメじゃない？私の攻撃、少し当たってたみたいだし」

「うるっせえ！！黙ってる！」

傷だらけ。水といっても攻撃用に魔力で強化されたものだから、威力は半端じゃないほどに高い。それをもろに受ければ、意識だつて飛ぶし　ヘタすれば死ぬ

ごふつと血反吐を吐き、ヴァニッシュはフードをさらに深くかぶり直した。

「　まだ……バレてない……？」

「はぁ……！！んなこと言ってる場合か！」

「ダイジョーブ……俺、案外丈夫だから……」

案外丈夫？んなわけあるか、意地張るな　と、言ってやれたらよかったのに。

静かに微笑するヴァニッシュを見て、文は言葉を詰まらせた。

「　何考えてんだよ」

「別に……？ただ　あんたが無事だったのでよかったって。でなきや、意味がない」

「……壊れたか？」

「傍にいてくれるんだろ……？ここで死なれたら、俺が怖いんだよ」

『怖い』　なんて。こいつがそんなことを言うのか。
ふらふらと立ちあがり、ヴァニツシュはマリアに向かった。

「あんた、強いんだろ？【吸血鬼】の中でもとびきり」

「ええ。んー……あなた、人じゃないのよね？けれど、仲間でもない」

「違うよ……唯一、勝てる種族なんだ」

落ちたナイフを拾い、ヴァニツシュは体勢を低く構えた。
少し嫌そうに表情を曇らせ、マリアは手を真上に向けた。
雲がさらに厚くなり、マリアの口がゆっくりと動いた。

「遥かなる霊峰の海よ、夜の闇に美しい月を昇らせよ。青の中に映る太陽を隠し、我が視界に映る全ての害を壊せたもう」

ゆっくりと紡がれていく言葉　それは、時間がたつにつれて不穏な空気を伴った。

何も言わずにナイフをくるりと回し、ヴァニツシュは微かに笑んだ。

「　ねえ、俺　生きてられる　？」

「　っ、なら、行くな！！」

「それはダメ。あんたを苛めたやつは、全員ぶつ殺すから」

苛められた？何か勘違いをしてやいないだろうか。

くすりと、マリアが口端を静かに歪ませた。

「　その子、孤独なのよ。それが罰であり、解いてはならないもの　B君も、罰に入ってるのよ？お互いに通じ合うことはない」

「　ああ、そう。　だから何」

「　あなたは目障り。孤独という罰をわかっていない」

「　孤独？そんなの知るか、馬鹿げてる」

馬鹿げてる　確かにそうだろう。けれど、それはお前だから言

えることなんだよ

強い力で、文はヴァニツシュの腕をつかんだ。

「命令だ。あの人に齒向かうな」

「はあ！？何、言われたこと気にしてんのか！？」

「余所者が口出ししていいことじゃない。だから、退け」

何も言われたくない。何も触れられたくない　だから、せめて傷つかないで

腕を振りほどこき、ヴァニツシュは文に言った。

「俺は余所者だけど、あんたのことが大切なんだよ！リリースがっ……あんたを信用してる意味もわかってない癖につ……！」

「リリース？」

ふと、マリアの表情が一転した。少女のようなあどけないものになったのだ。

文が再びヴァニツシュの腕をつかんだ。

「リリースが、なんです」

「……私の友達を知っているようね。どおりで不機嫌なわけだ……」

「関係ない。あの人は、もういない」

「今すぐに跪いて泣いて懇願するなら許してあげる。あの子の知り合いなら、できれば穏便に済ませたい」

「断る。あんたを許したくない」

血まみれでよく言う。こっちの方が心配になる。

あくまでニコニコと笑い、ヴァニツシュはナイフを構えた。

「孤独……？俺を差し置いて、よくそんなこと言うよな」

「ん……？何か？」

「俺なんて　何も『覚えてない』のに　……！！」

ひどく悲痛に、咆えるような声が辺りに響き渡った。

だが、マリアはそれを鼻で嗤った。

「はっ。そんなくだらしない　孤独なんて、忘れてしまうものよ」
その刹那　カシャンと、時計の針が堕ちるような音がした。

「『冥界の月　クレイジィ・フルムーン』　発動　」

「っ……!!」

その一言で地面が割れ始め、その割れ目から何かがゆっくりと覗いた。

表は笑い、裏は泣く　そんな顔のある満月は、逆さ月となっていた。はるかに大きく、マリアの背後でテラテラと輝いていた。

発光しだしたその月が、大きく口を開けた。

「さア　終わりよ　」

「ヴァニツシュ、退け!!」

言葉は届かない。そんなこと、わかっている。けれど、届けなければいけない

ヴァニツシュを追って駆けだし、文は腕を伸ばした。

刹那、声が反響した。

「　「停止　ストップ」だ。動くな」

低い声であった。地を震わせる、魔王のような

声と同時に、月はくるりとひっくり返って泣き顔になった。

まっすぐな長い髪。それを掻き上げたノアが、文の後ろに立っていた。

「何やってるんだ、バカ。マリアも、来たのなら俺を起こせ。こいつらの馬鹿が加速する」

「あらあら、止められちゃった。泣かないでね、お月さん？」

「マリア、話くらい聞け。朝から騒々しい……」

「上級なのになえ……まあ、いいわよ。まだ底辺だもの。あなたの力はここじゃ発揮できないものねえ、怒られちゃうもの」

「……はあ。もういい。とにかく、お前たちも部屋に　」

文とヴァニツシュに視線を移し、ノアは言葉を失った。

くったりと倒れたヴァニツシュを文がしっかりと抱きとめていた。離すまいと、足に力を入れて。

give me you

*

守れなかった？

大切な、自分が受け負ったヒトを。

自分を身体を張って守ってくれたヒトを

死ねないのに、どうして生きているの？

誰が言ったのか　ひどく心に刺さっている。まるで甘ったるく
ベタつく砂糖水のように、離れてはくれないのだ。

死ねないなら　生きる資格すらない

*

カチャ　ボタン

淡く反響するドアの開閉音。それが、眠った自分に低く響いた。
ゆっくりと目を開け、文は半身を起した。

自分の部屋に自分以外の誰かがいるのを確認して、文は尋ねた。

「……誰」

「ああ、起きたのか。俺だ」

ノアだった　自分とヴァニッシュを助けてくれた、命の恩人。
はつとようやく覚醒し、文はノアに言った。

「ヴァニッシュは！？あいつどこ行った！？」

「どこにも行ってない。　てめえも傷だらけなんだ、じっとして
ろ」

「はあ！？俺は怪我なんてしてない！」

「してる。流水は、てめエといえどもダメージはすごいんだよ。それくらいわかってるだろう」

「けど、当たってないっ……」

「いいや、傷になっていた。爛れていたから、少しは治したがまだ、安静にしている」

ズキリと胸部が痛んだ。本当に怪我をしたらしい。

腕にもぐりと包帯が巻かれており、文は小さく舌打った。

「マリアは」

「あの人なら、もう帰った。また来るとか言って、てめエよろしくと」

「……そっか」

脅威は去った。これで、安心できる。

そつと、ノアが文の頬を撫でた。手の甲で、拭うように。

「っ？何……？」

「……無事でよかったな。あの人になら、殺されても仕方ない」

「そんなの、お前が来てくれなかったら……死んでたとおもうよ。ヴァニツシュも俺も」

「だろうな。俺でも、対等には渡り合えない」

怖い人なのだ。そんなことは、前からわかっていたのだが。じつとノアを見上げていた文だが、やがて静かにうつむいた。

「……あのさ」

「？どうした」

「……守ってやるって言ったのに守れなくて……逆に傷つけて俺って最低だなんて……」

「……そう、だな。てめエは最低かもしれないな」

ザクツ。案外痛い。自分でもわかっていたのに、予想以上にダメージが来た。

と　ノアが静かに優しい声色で言った。

「弱い方が俺としては助かる。てめエは俺を守ろうとするが、

それだと俺の立つ瀬がない」

「……何それ」

「……いや、別に。柄にもなくこんなことを言ったが、特に意味はない」

「意味……ありまくりじゃないの？」

「ふふっ……はははっ……！ そうだな、あると思う」

珍しく笑っている。かなり珍しい。

珍しすぎて逆に怖くなってきた。

「あ、え……何、怒ってんの……？」

「いや、怒ってなどいないよ。ただ……笑いたくなった」

「……うわ、怒らせた……！」

「文」

不意に名前を呼ばれた。これはもう、確実に怒ってらっしゃるとしか思えない。

恐れつつも、文はノアの方を向いた。

「……え、と……？」

「……孤独がどうと、言われただろう」

冷たい声であつた。さっきとは一転しているのは、すぐに分かつた。

目をそむけようとした文をノアは捕えていた。

「マリアは恐ろしい人だ。だが、それに吞まれかけたためエはただの馬鹿だ」

「っ……吞まれてない！」

「いや、吞まれた。あいつがいなけりや、今頃殺されていた。俺を連れ戻しに」

「……けど……」

ノアは能力も強いし頭もいいから。他の種族と戦うに当たっては重要な人であつた。だから、禁忌を犯している俺なんかについてき

たのを連れ戻そうとしている者も多いのだ。

文の手首をつかんで、ノアは声音を低くして言った。

「俺は、永遠にためエの傍にいる。それが嫌なら、今すぐにでも向こうへ帰ってやる」

「っ、帰るな！」

「ああ　ためエが望むなら　ここにいます」

そう言っようやく、ノアは微笑んだ。

掴まれた手首がじつとりと汗をかいて熱くなってくる。心臓がうるさく音を立てている。

渴いた喉がひりひりと痛くなっている。水が飲みたい

ノアの髪を静かに掻き上げ、文は苦しそうに言葉を吐いた。

「飲ませて。痛くしたりしないから……」

「痛みは生きている証拠だ。だから、かまわない」

「……ノアはどうすんの」

「……飲めと？最近、本当に甘えすぎだ」

「ダメ……なのか……？」

我が侂なのはわかつている。前も、我が侂だった。

じつと文に見つめられ、ノアは大きく溜息を吐いた。

「飲んでやるよ」

「おお、珍しい」

「最近はためエの血液ばかり飲んでる気がするがな」

「いいよ、その方が。って……ホントに喉かわいた……」

「はいはい……なら、飲ませてやるよ」

にいつと、ニヒルで妖艶な笑み　大好きな、【吸血鬼】の笑みだ

クチュ

「っ……ノア……？」

「いいから。黙ってろ」

気の遠くなるような声　一瞬でも離れてしまった自分に腹が立つ。

互いに血を飲みあう、ひどいキスだ　ノアの口端から流れる血は、俺がへたな所為だ。もっと綺麗に飲めれば、普通のキスに見えるのに。

昔誰かが、チョコレートのようなと言った。けれど、それはかなり違う。

もっと苦く、ほんの少しだけ甘い　今の味はそんなところだ。感情や色々によって味は変わり、いつ飲んでも何物にも比喻しがた

い。

「……っ……」

「……っ、ははっ……真赤じゃないか」

「ノアだって、おんなじようなもんだろ……っ？」

何度も何度も、飲みただけ貪る。真っ赤に染まるうとも、キスをやめたいと思えない。

このまま狂ってしまえ

囁く悪魔。流れる血が理性を壊していく。これが、【吸血鬼】の悲しい性なのだ

ほたりとベッドに血が垂れた刹那　ちろりと、舌が文の唇を舐めた。

give me you ?

「っ……何……？」

ほんのりとノアの頬が赤い。いつものあのクール……というか顔色の悪さが無い。むしろ、顔色は良くいつもより美しい。

クールなノアも、こんな子供のようなノアも 初めて見た全ての表情が好きすぎる。こんな自分を見ていてくれるノアも

「 前の、『遊び』だ。馬鹿らしい あのを続きをやるっ」

「へ……っ？けど、あんなのただの暇つぶしとか……」

「 嫌、か ？」

ほんの少し表情が曇る。ドクリと心臓が跳ね、ひどく罪悪感が残った。

慌てて首を振り、文はノアに強く抱きついた。

「嫌じゃない！だからっ……」

「……だろうな。俺以外はてめエの傍にいられない」

「何それ……偉そう」

「偉いからな。てめエの『初めて』も全ていただいている」

「っ、言っなよ。は……恥ずい……」

「二人きりだろう。もっと、声を聞かせてくれるか ？」

変なスイッチを入れてしまったらしい。それでも、何かいつものことのような気もする。

くいつと顎を上げられ、文はたまった息をほとんど吐いた。

「く、苦し……」

「 てめエの全てが欲しい。永遠に俺から離れられないように」

「離れないって……言っただろ……？」

「足りない。体で示せ」

ノアなのに、ノアじゃない いつものノアは、もっと恐ろしい

ちゅ、と。首筋にノアの唇が触れた。

「……汗臭いぞ」

「し、仕方ないだろ！？ノアは汗かかないけど……！」

「そうだな。そんな　人間らしいてめエにどうして傍にいていいと思っただのか」

「……ノアこそ、嫌なんじゃないのか。俺みたいなのと一緒にいて……伯母様だつて、戻った方がいいからこそ迎えに来たんだろ？　だったら、ちゃんとあつちに帰って」

「　何度も言わせるな」

熱く、熱っぽく　真剣に文を眼光が刺した。

ぶんぶんと文は再び首を振った。

「いや、わかつてるけど……！」

「わかつてないな。俺の忠誠は、そんな簡単に揺るがない。てめエは、放っておいたら死にかねんからな」

「……母性本能つてやつ？」

「まあ、近いな。てめエの傍にすぎで、アホらしくなる時もあるが」

「言うな、アホじゃない。傍に　居てくれるんだろ　？」

「　永遠に、忠誠を」

そう言つて、今更格好つけたように手の甲にキスを。昔　遙か昔にされたつきり、かなり久しぶりだ。

何故か畏まり、文はぺこりと頭を下げた。

「ど、どうも……」

「……くだらんな。そんなてめエはてめエじゃねえ」

「んなの、ノアだつて……」

「俺は、『遊び』には本気だ。でなきゃ、本気になる時がない」

「他のことにも本気になれよ……まあ、家事全般は分担だからいいけど……」

「洗い物一つできない癖に何を言ってるんだ」

「流水はダメなんだつてわかつてるだろ……！」

勿論、ノアだつて大量の流水を浴びれば体が溶けて消えてしまう。

俺よりも耐性はあるが。

酒を浴びたような陶然とした表情を見せ、ノアは静かに微笑んだ。
「つまらないこと言ってるんで、キスしてくれるか？ 拗ねられ
たくはないだろう？」

「拗ねるノア……怖いな」

「拗ねるさ。腹いせに、あの狼でも苛めてやる。もしくは　こう
してやる」

パチンツ。軽い音がして、ノアの指先がはじかれた。

ポカーンとしていた文の両手首に、冷たく重い何かが掛った。

「……うん？」

「手錠させてもらった。ああ、気持ちいいだろう？」

「え……はあ……？ 何これっ……！？」

両手にずっしり。「何だこれ」と聞いても、どうせ簡単に答えら
れるしかない。

後ろ手に手錠で拘束されて身動きのとれない文の腹部をすりりと
ノアの手が滑った。

「っ……何すんだよっ……！」

「『遊び』だ。まだ感じないのか？」

「か、感じる……？ 何を……」

「脱がす」

そう低く呟き、ノアは文の腰に手を滑らせた。

紅く血のシミが広がるベッドに、はだけた白い肌が映えた。

ガチャガチャと、手錠が鳴った。

「……っ……！？」

「てめエを我が物にしたい　欲ばかりを言えば、きっと終わ
らない。俺が、もつとまともな奴だとも思ってたか？」

「まとも……？ いつ、そんなことを思ったって……？」

「……口の減らない主人だ。そんなことばかり言っていると、穢す
ぞ」

「ノアになら、何されたっていい。穢されたって……壊された

って……」

「壊す、な。『愛』故だ。理解しろ」

好きだなんて、思っていない癖に。愛なんて偽りだと、わかっていくくせに。

愛なんて、そんなもの存在しない。目に見えないものは信じない。

ただ信じるのは、眼の前の自分に対する行為だけだ

ニヒルに笑い、ノアは文の口を無理に開けさせた。

「深く　俺を熔かせ」

黙って頷く。それで、ノアが満足してくれるのなら　何だってやるだろう。

舌をからめ、おかしくなるようなキスを何十秒間も。きっとノアなら何だって受け入れてしまう自分だから、このままでいたいと切に願っていた。

文の服の中に手を滑り込ませ、ノアは文をベッドに押しつけた。

「っ……前と、おなじ……っ？」

「だったら、全部脱ぐか……？俺の前でだけかわいこぶってればいいが」

「ノアの前だけ……じゃ、脱いでくれる……？」

「……からかいには乗らない。されるのを待つのは嫌いなんだ」

「　そっか」

甘く、淡く　夢のような笑顔。そんなに優しくはないのに、ひどく心が潤される。

ただの『遊び』の領域は、決して出ない。永遠として出るつもりはない。

だから

クモリソラにて

おぼろげな姿、何もかもが蕩けて消えていく。消えてほしくはないから、必死で手を伸ばすのに。

音もなく、唇が軽く触れた。

「俺の、傍にいてくれるって言ったよね……」

「……それが何だ」

「死ぬ時は、俺に殺させて」

生きているから言えること。死んでしまえば、その権利はなくなってしまう。

少しも驚くこともなく、ノアは文の頭を撫でた。

「その時にならねばわからない。少なくとも 今はいよう」

「今は当然。遊び相手が欲しいだろ」

「不死とは暇ということだからな。今はいるだろう」

だからと言って、こんな危なっかしい『遊び』はしたことがない。こんなこと、誰とだってしたいとは思わなかった。ノアだからこそなのだ。

けれど、言葉にはできない。してはいけないと、そんな気がする。

これは『遊び』なのだから。

ふつと体を起こし、ノアは文を起こした。

「もう、飽きた。今日はいいい」

「何それ……嫌いになったとか？」

「はっ、戯言だな。わかって言ってるだろう」

「当たり前だろ。けど……本当はなんで？」

「耳を貸せ」

顔にハテナマークを浮かべつつ、文はノアの口元に耳を寄せた。はだけた服のボタンを留めながら、ノアは半分笑いながら言った。

「外に 傷だらけの狼がいる」

「！？は……………何それ……………」

「外だ。傷口が開くから、今すぐに止めて来い」

何やってんだ。俺よりも重傷負ってんのに、どうして外なんかに

ひよいと窓の外を指し、ノアはくすりと笑んだ。

「今すぐだ。ためエも動けはしないだろうが、止めるだけなら問題ない」

「嘘だろ……………ちょっと行ってくる！」

「ああ 逝ってこい」

不穏発言。だが、気にしない。

窓に手と足をかけ、文ははるか下へと向いてその中へと一気に飛び込んだ。

はだけた服がはためく。風に包まれたまま、どこまでも真つ逆さまに

グシャリ 嫌な音がした。

「っ……………！いつ……………！！」

ひどい痛みが、文の身体を突き抜けた。はるか数十メートルより落ち、しかも岩に強く頭を打ち付けたのだから。

包帯の上からも血をダラダラと流し、文はどうにか起き上がった。

ゴウ……………と、強く風が吹いた。

それは何もかもを包み込み、流して、通り過ぎ。

まるで死んでいるかのような世界さえも、静かに破壊していくようだった。

「っ……ヴァニツシュ……？」

空を仰ぐ、黒い影。全身に包帯を巻いてあるその姿は、見覚えのある姿であった。

前にはなかった尾が、柔らかく揺れていた。風に凪いではいるが自分で無意識に揺らしているようだった。

体についた土を払い、文はヴァニツシュに駆けよった。

「おい、何やってんだよ。傷が開くだろ」

「死にたいんだ」

「はあ……！？何言っただよ！」

死にたい？この狼、気でも触れたのか？

空を仰いで動かず、ヴァニツシュはひくひくと耳を動かしていた。

「……死なせてよ。あんたなら、殺せるだろ？」

「馬鹿言っな。殺さない」

「……へえ。落ちついてるじゃん。もつと感情的かと思ってた」

感情を無理に抑え、文はヴァニツシュの肩をつかんだ。

パンツと、あつという間にその手は払われた。

「触らないで。血の臭いがする」

「そんなの、お前の方がひどい。ほら、部屋に戻ろう」

ヴァニツシュの体に巻かれた包帯からは血が滲み続けていた。止まらずに、ずっと。

フードを深くかぶったまま、ヴァニツシュは文に尋ねた。声を震わせて。

「……同情って言っただろ、そういうの」

「同情？生憎、そんなものは持ってない」

「じゃあ、何。嗤いに来た？」

「……訳わかんねえ。いいから、戻れ。体痛いだろ？」

「平気。こんなの慣れてる」

「慣れていい筈ないだろ。痛いなら、はっきりそう言え」

自分を助けてくれたヒトが、痛みに慣れていい筈がない。いくら【狼】が怪我や病気に強いと言っても、痛みは感覚として同じなの

に。

何とも頑固な【狼】 それにしびれを切らし、文はフードを引っぺがした。

「っ、こんなのかぶってるから暗くなるんだろ？笑っててよ」

「……馬鹿じゃねーの」

風が、ひときわ強く吹いた。

ボロボロと、みつともなく。頬を伝って、涙がヴァニッシュを濡らしていた。

再び曇った空を見上げ、ヴァニッシュは袖で顔を拭った。

「 嗤ってーよ。馬鹿だろ」

「 ……なんで泣いてんの」

「わかってくれたら嬉しいんだけど。あんた、俺よりも馬鹿だから」

「……ま、そうだよな」

このまま、笑っていてくれないか そんな、無茶な願いもしてみるのが。

自虐めいてそう言い、ヴァニッシュは不意に文の方を向いた。
無表情にも近い、まっすぐな表情。唇はきりつと真横に結ばれており、瞳は文を射抜くように真っ直ぐであった。

「……怒ってるのかそうじゃないのか、俺には分からないんだけど」

「 死ねばいいのに」

低く呟かれた言葉。尾が、やんわりと揺れる。

手を伸ばし、笑うことはなく。ただただ、ヴァニッシュは文を文だけを見ていた。

ドンツと、文の胸にヴァニッシュがぶつかった。

「 ……血なまぐさい」

「お相子だろ？お前も血の匂いしかない」

「それが好きな癖に」

ああ、そうだよ　大好きだから、困るんだ。

ふらついているヴァニッシュを文は両腕で抱きしめた。離さないように、けれど少し緩めに。

べつとりと　赤黒い血液が、文の四肢に絡みついた。

あなたにキスを

*

*

*

静かな、朝もやの中に溶けてしまうような吐息。まだ日は昇っておらず、ただただその光景は微笑ましいものであった。

そっと、文は自分の隣で眠る青年の頭を撫でた。

「こうしてたら……可愛いのに……」

眠っていれば、おとなしいいい子なのに。どうして起きている時はあんなにも苦しそうなんだろうか。全てとまではいかずとも、苦しければ話してくればいいのに。

自分の傍にいてくれるこの子を愛おしく思いつつ、文はその頬を手の甲で撫でた。ノアにしてもらったように。

「……な、ノア」

「ああ、どうかしたか」

窓辺に腰掛けた、宵闇の麗人。それはいつもと同じように、表情もなく読書をしていた。厚い本を黙って読むその姿は、どうにも憂鬱気で儚げだった。

ちよいちよいとヴァニツシュの包帯を引き、文は楽しそうにくすくすと笑った。

「かわいいよなあ……こいつ、俺の腕ずつと掴んでるけど」

「嫌なら、突き離せ。てめエは優しくすぎる」

「優しくなんてねえよ。甘いんだ、自分にも誰にも」

もそもそと、包帯を引いたせいでヴァニツシュが動いた。それもまた、愛嬌と言うやつなのだろう。

ぴくぴくと動く獣耳を触りたいのを何とかこらえ、文は自虐的に笑った。

本を閉じ、ノアは文の隣に腰掛けた。

「見たのか？」

「うん 見た。けど、ノアも知ってたんだろ？」

「こいつの傷に手当を最初にしたのは俺だからな。それくらい、わかってない方がおかしい」

「記憶がないことも見抜くんだもん、ノアはすごいよ」

文がそう言つて褒めてみても、ノアは何も反応せずにヴァニッシュを見ていた。

傷だらけ それは、今に始まったことではなかった。ヴァニッシュの手当てをしたノアだけがわかることは、今は文もわかった。

やわらかな髪を撫でてやり、文は言った。

「背中も、胸も、腹も、脚も 全部、絵と字で埋まってた」

「ああ、そくだよ。傷も、生半可なものでもないのに治っている」

「【吸血鬼】並の再生力つてことだよな。【狼】はこんなに強いもんか？」

「獣だから、一応はな。それでも 強すぎる」

わかつているのだ ヴァニッシュがただの【狼】でないことくらい。そこまで落ちぶれたわけじゃあない。

につこりと笑んで、文は言葉を吐き出すように言った。

「ずっと……見えてないだけだったんだよな……見てやれたらよかったのに……っ」

「今更遅い。それに、いずれこいつの傷も治る」

「わかつてるよ……けど、見てられないじゃんか……」

「知ってしまったからな。だから、同情か？」

「っ、違っっ！」

食ってかかった ノアにこんなことをするのは初めてだ。

ふつと鼻で嗤い、ノアは文にくつと迫った。

「今更 遅すぎるんだよ！ てめェはいつだって」

「っ……わかつてる……っ！」

「いいや、わかってなどいないな。わかっているのなら
どうして今更泣く？」

ボロボロボロボロ、みつともない。昨日のヴァニッシュよりも
つと、醜く馬鹿らしい。

固く唇を噛み、まるで文は子供のようだった。ノアを呆れさせる
ほどに。

むくりと、不意にヴァニッシュが起き上がった。

「んー……ああ……おはよ……」

「っ……ひぐっ……」

「！？え、何……なんで泣いてんの……？」

「てめエが心配をかけさせるからだ。さっさと、止めてくれ」

「はあ！？ちよ、文……おなかでも痛いのか？」

ベタだ。そんなわけないと言いたいの、どうにも涙のせいで言
えなくなっている。

袖で頬をこすって、文はヴァニッシュにがばりと抱きついた。

びくつと、ヴァニッシュが跳ねた。

「うおわあっ！？だ……大丈夫か……？」

「ヴァニッシュ、ごめんっ……！」

「え……？文、何言ってるんだよ？おかしいぞお前」

「痛いなら痛いって言うてくれればいいのに……何で強がって……」

見破ってやれない俺が悪いんだけど……っ、俺を殴って！

「はああああああああ！？」

急に、「俺を殴れ」と。誰だって驚く。

ポカーンとしているヴァニッシュを見て、ノアはくすくすと笑っ
た。

「あ……何、笑うなよ」

「ずつと張りつめていただろう。てめエも笑うのかと、安心し
た」

「こっちのセリフ。あんたこそ、笑うんだ？」

「笑わないはずがない。こんなにもかわいい主人がいるのだからな」

「……主人……」

複雑そうな表情で、ヴァニッシュは文の顔を覗き込んだ。
涙やら鼻水でぐしょぐしょになった顔に、【吸血鬼】としての面
は見当たらなかった。ただ、一方的に泣いているどこにでもいる青
年の姿であった。

しばらくその顔を見ていたヴァニッシュは、ティッシュでぐしぐ
しと涙と鼻水を拭き取ってやった。

「……これじゃ、どっちが年上かわかんないな。けど、あんたは笑
っててよ。泣いたら、せつかくかつこいいのに台無しだろ。鼻水流
すなんて子供だぞ」

「だって……勝手に手当てして、怪我見ちゃって……」

「もう、いいから。過去の話だろ、そんなもん」

本当は　わかってほしいんだよ。

気付いてくれる人なんていなかったから　嬉しいんだよ。

けど、何もかもを言っちゃあ　終わるだろう　？

文に笑いかけ、ヴァニッシュは安心したように未だ流れ続ける涙
をペロリと舐めた。

「ん、しょっぱい……ま、仕方ないよな」

「……はえ？」

「泣いてたら、元気づけんの。当たり前だろ？あんたみたいな馬鹿
にわかるとは思わないけど」

「……元気づけてくれてんの？」

「っ、仕方ないだろ……ノアが睨むんだし……」

「誰も睨んじやいないが」

「いいんだよ、そんなことはっ！こいつには、泣いてほしくないん
だから　」

言った。言ってしまった。

ふ……と、文がヴァニッシュに強くしがみついた。

「んなっ……！？」

「そっか……そんなに、俺のこと心配してくれてたのか……」

「っ、何言ってんだよ、変態バカ野郎っ！離せ！」

「さっきまで俺の腕つかんできたのはお前だろ？さっきもほっぺ舐め
たし、昨日だつてあんなに」

「うるっさいな！どうだつていいだろ！？笑うな！」

怒っているのか　それでも、優しい怒りであった。楽しいから
こそ、照れているように。

それをわかっていて意地悪をし、文はノアの方を向いて言った。

「　ノア、だーい好き」

「は？何故……俺に言う？」

「　　ヴァニツシュと違って、表情が硬いから。嫌ってほしく
ないだろ？」

「　　さあな。嫌われようと、どうでもいい」

「　そんなこと言うなよな。俺がさみしいのに」

大好きな大好きなノア。何度『遊んだつて』足りないくらいに楽
しい。

大好きな大好きなヴァニツシュ。何度いろんな表情を見ても足り
ない。

だから、好きつてのは何度言っても足りるはずがない。足りてほ
しくない。

ぼかんとしている二人を見て、文はただ笑っていた。いつの間に
か涙は止まり、笑みが陽のない部屋でもよく映えていた。

ニコニコと笑んだまま、文は二人の頬にキスをした

祭典の始まり

*

*

*

自分は、何をしている？

グウンっ……体がねじれ、はるか後方まで吹き飛んだ。

目だけは、絶対に離すまいと相手を睨みつけていた。離せば頭と体がバラバラになってしまう。

口端を歪めて、嗤う。その顔が憎らしくて、憎らしくて。体を起して無理にでも駆ける。口に溜まった血は飲み込んだら体が壊れていくようだった。

へえ、弱いな。

嗤うな、嗤うなっ……！！

無理に走っても、すぐに心が折れそうになる。

遠い　この手も、何もかもが届かない。

お前には、無理だよ。諦めろ。

馬鹿にするな！嗤うな！！

だから　殺してやる

紅を流させる　絶対に許さない。

尖った爪、牙が月光をそり返す。反射した光は、全てただに目くらましにしかならなかった。

一閃　そして、鮮血が散った

*

*

*

「っ……………」

その朝、布団をはねのけてヴァニッシュは起き上がった。全身に汗をひどくかいて。

動悸がひどく、吐き気がしていた。胸がムカつき、口の中がカラカラに乾いていた。

目をこすって、ヴァニッシュは隣で眠る文を見た。

スヤスヤと　まるで子供だ。涎まで垂らしているのに　これ

が、【吸血鬼】

「……………文っ……………」

「……………ん……………何い……………？呼んだ……………？」

「……………大好きだよ……………」

何とはなく出た言葉。無理をして、笑顔も作って。

寝ぼけた目をこすって、文はにぱつと笑んだ。

「俺も　好き……………」

「ありがと……………だ……………いい好き……………」

今のうちなのだ　きつと、今言っておかないともう言えなくなる。

文の頭を撫でながら、ヴァニッシュはその額に軽くキスをした。

「……………何？ヴァニッシュ、怖い夢でも見た？」

「……………別に。今日は特別な日だから……………早起きしただけだよ……………」

「そっか……………お祭りだもんな……………」

特別というほどではないけれど。とにかく、不安にさせたくない。怖い夢　何を視たのかは覚えていない。だから、余計なことは

言わなくてもいい。

朝日の昇った眩しい世界で、ヴァニッシュは文に軽く口づけた。

*

*

*

今日から、年に一回の『お祭り』が始まるらしい。祭り自体は何度があるが、それぞれによって名前が違うらしい。

昼過ぎに、ようやくノアが目を覚まして降りてきた。

「……ん……うちの馬鹿、今度は何を騒いでいるんだ……？」

「あ、おはよう、ノア。……怒ってる？」

「馬鹿はどこだ？てめエには怒ってないよ」

「そっか……って、俺にはってどういうこと……？」

「意味くらい理解しろ。低脳だと、嗤われるぞ」

不機嫌、低血圧。それらが重なっていて、ノアはいつにも増していらいらしていた。

祭りに浮かれて、当の本人はいつもよりもさらに浮かっていた。はあ、と。ヴァニッシュとノアの口から同時にため息が吐き出された。

「……本当に【吸血鬼】なんだよな？」

「ああ、一応は。最近、俺も疑い始めたところだ」

「信じてやれよ、お前は。仲間だろ」

「それ以上だから」

そう言って言葉を止め、ノアは外で浮かれてはしゃぐ文の下へと駆けて行った。

まばゆいばかりの昼の日差し。溶けたり灰になったりはしないが、【吸血鬼】にとっては結構なダメージであった。ガシツと、文の首根っこが掴まれる。

「くおらあっ！うるっさいんだよっ、てめエは！」

「ぐえっ！？の、ノアあー？」

「部屋に戻れ！てめエ、自分が何やってんのかわかってんのか！？」「ぐらぐらと、首が取れるかと思うほどにノアは文を前後に揺らし

た。

陸に上げられた魚のようにぴちぴちと跳ね、文はノアに弁解を圖った。

「わ、わかつてるから！怒らないで！」

「……どうせ、その調子じゃ止めても祭りに行くんだろっ」

「お、わかつてるじゃん。けど、祭りは楽しいけど……一人じゃ切ないって」

「知るか」

仲睦まじい、いつもの光景であった。ただの、他愛もない戯れ地面に落され、文は強く尻もちをついた。

「……何でそんなに怒ってるの」

「……てめエは、自分が何を言ってるのかわかってないから」

「えー？お祭り行こうって」

「そうじゃない。そろそろ あの【狼】を見限れ」

「……は……？」

突然、ノアは文にそう言った。何を思うのか、小声でささやくように。

目に剣呑な光を宿し、文はノアの胸ぐらをつかんだ。

「お前、何言ってるの」

「そのままの意味だ。理解できたみたいだな？」

「からかうな！真面目な話してんのにつ……！」

「ちよっ、ちよっ二人とも！やめろって！」

口喧嘩の元凶であるヴァニッシュが、二人を止めに入った。やはり、ただならぬ空気を察したのだろう。

にいつと笑み、ノアは言った。

「俺は、てめエの言葉を忘れない。何かがあれば守ってやる。だから 考えろよ」

「うるさい！ノア……おかしいよ……っ！」

「禁忌を犯しておいて、今更そんなことを言うな」

冷たい いつもよりも、ずつとずつと。

部屋に戻ろうとし、ノアは懷から小さな薄い冊子を取り出した。

「これでも読んでおけ。そして 忘れるな」

「はぁ……！？何それっ……！」

それだけ言い、ノアは一人で部屋に戻っていった。おかしくて仕方がないかのように静かに笑いながら。

むっとし、文は渡された冊子を開いた。

丁寧で達筆な字がっらつらと。ノアの字だと、すぐに分かった。

『能力について』 その字が、文の目を引いた。

「何これ……ヴァニッシュ、読む？」

「え……それじゃ、ちよつと……」

【吸血鬼】の能力 何を知ってどうしろというのか。

パラパラと頁をめくっていると はたと、ヴァニッシュの目に一つの項目が映りこんだ。

『他人の夢への無意識での介入』

何かを思いノアを追おうとするも、ヴァニッシュはその場でとどまった。

言っのが怖いから ？

きつと あの人は見透かしているから ？

何を？どうして？

知らないよ、お前のことなんて、誰も。

祭典の始まり（後書き）

中睦まじい＝仲睦まじいに改編しました

綿あめ

*

涼しげな、夏の風。これがいつもと同じ夏であり、空気がからりと乾いている。

それが当然だから、何も変に感じることはなかったのに。

「こんなに眩しかったっけ？」

「へ……？何が」

「いや、外。何か渴いてるし……陽が眩しい」

眩しい　こんなこと、感じたことなかったのに。夕日が眩しいなんて、どうかしてる。

手で日差しを遮り、文はクローゼットの中から着物の帯を取り出した。

「……ま、いいけど。んじゃ、これが帯」

「腰のどこだよ……合ってる？」

「ん、合ってる。結ぶから動くなよ……」

ノアを置いて行くのは心が痛むが、ヴァニッシュだけでも一緒に行ってくれたら。本当は三人で行きたかったんだが。

帯をしっかりと結び、文はヴァニッシュの頭を撫でた。

「んー、似合ってるかな……ノアのだから、ちよつとでかいかな？」

「ちよつと背丈の問題……」

「あいつ高いからなー。まあ、似合ってるからいいんじゃないか？」
チャコールグレーの着流しに濃緑の帯。着せたのが文だけに少し崩れているが、綺麗に着ることができていた。ノアと比べるとずっと幼い感じがしていたが。

少し離れてその容貌を眺め、文はニツと笑った。

「じゃ、行くか。ノアにもお土産買ってやんないとなー」

「……ん」

「……行かないのか？」

藍色の地に白の細いストライプの着流し。その袖を捲し上げ、文はヴァニッシュの顔を覗き込んだ。

首を横に振り、ヴァニッシュは微かに笑った。

「行く。ノア、本当に来ないのになって……」

「根が暗めだし、いつつもあるから。大丈夫だって」

「……そっか」

能天気と言う文をよそに、ヴァニッシュはノアの自室を見上げて口をつぐんだ。

異様にぬるく気持ちの悪い風が、部屋の中まで吹き抜けていった。

*

皆が一樣に浮かれる、夏の二度目の祭り。まだ夏の終わりには遠いが、名を“ひぐらし祭り”と言った。

静みかけの夕日の中を並んで歩きながら、文は空を見上げた。

「今日も花火が上がるんだよ。知ってるよな？花火」

「そりゃ、しばらく街で暮らしてたから……知ってるけど」

「綺麗だよな……なのに、ノアは嫌いみたいでさー……」

「……そう」

そう言ったきり、沈黙。ヴァニッシュの表情に陰りが見えていた。何も言葉のない、静寂しきった空間。いつもなら、考えられないような

やがて、二人は街の入口へと着いた。

浮かれている人々や露店を見つつ、文は黙りこくったままのヴァニッシュに声をかけた。

「ヴァニッシュ」

「っ、何……」

「……ちよつと、ここで待つて」

何を思ったか、文はいきなり走り始めた。ヴァニッシュをその場に放置して。

ぽつんと突然とり残され、ヴァニッシュは口を半開きにして呆然としていた。

。

ペタペタペタペタペタ

遠くから駆けてくる草履をはいた足音。子供のようで、なんだか速く茶目つけのある音

「っ　　ヴァニッシュっ！悪い、遅くなった！」

「……文……っ」

額に汗を流し、文が帰ってきた。何故か頭にお面をのせて。

膝を抱えて座り込んでいたヴァニッシュは、脚についた土を払って立ち上がった。

「お、お帰り……」

「ただいま。んじゃ　早速だけど、目え閉じて」

「……は？」

ヴァニッシュの顔には明らかにハテナマークが浮かんでいた。突然帰ってきたかと思うと「目を閉じろ」と言われたのだから。

言われるがままに目を閉じ、ヴァニッシュは文に尋ねた。

「あのさ、何」

「はい、口開けてー」

「っ……んぐっ……!？」

ヴァニッシュの口を開けさせ、文は後ろに隠していた何かを口の中に入れた。「押し込んだ」と言った方が良いだろう。

甘く、すぐに溶けてしまったそれ　懐かしい味に、ヴァニッシュは目を開けた。

「……綿あめだよね」

「そつ。　元気になったか？」

「……どうして？」

「暗かったから。んー、甘いもんって元気になるだろ？ 飴にしようかとも思っただけけど、俺の好みで決めちまったから……嫌いだったのか？」

「　そんなことないよ」

静かに、言葉が吐かれた。

まだ納得していないかのようにくすぶる文と反対にヴァニッシュがさもおかしそくに笑った。

「　　ありがとう。嬉しいよ」

「そ、そうか？ならよかった……」

「あんたは、優しいから　」

「……そんなことはない」

「少なくとも、俺には優しいよ。いつもいつも　」

何を言いたいのかわからないまま、文はヴァニッシュから残りの綿あめをもらった。

再び沈黙　そして、二人は人ごみの中を歩き始めた。

ふと、ヴァニッシュが文の袖を強く引いた。

「　文」

「ん……何？」

「　　俺さ、あんたのこと好きなんだ」

さらりと、何のためらいもなくヴァニッシュは言った。

しばらく言われた意味もわからず軽く流していた文であったが、かなり歩いたところでようやく気がついたようだった。

「す……え、はぁ!？」

「遅いな……気付くのに時間かかりすぎ」

「けど、だって……好きって、なんで!？」

「好きだからだよ。　　文は　　ノアの方が好き？」

浮かれる街、空は暗くなっており、もう日は落ちていた。
答えず、文は言葉に詰まった。

「どっちも好きなんだけど」

「何それ……俺じゃ、ダメかな……」

「そついう問題じゃない。俺は」

言えない。言いたいのに。

煮え切らない文に少タイラつき、ヴァニッシュは文の首に腕をからめて抱き寄せた。

「好きでいてよ。好きになってよ」

「っ……おかしいぞ、お前……」

「おかしくないよ。ただ、好きになっちゃったんだよ」

嫌いじゃない　けれど、引つかかるのは何なんだろう

辺りをちろりと見やり、文はヴァニッシュの腕をどけさせた。

「……嫌、なの？」

「俺だって、好きだよ」

苦しい　ひどく、動いてもいないのに心臓が痛い

その言葉に喜ぼうとしたヴァニッシュをとらえ、文はほとんど強引に唇を奪った。

甘い　綿あめの味がした。

夜に邂逅

つかえて、呼吸がしにくい。目の前にいるこの存在が、心につかえる。

そつと手を離し、文はヴァニッシュの頭を雑に撫でた。

「……お前は、苦しくないか？」

「っ、どうして」

「俺なんかといて……キスまでされて……」

「文だからいいんだよ。何されても、きつと許せる」

ならば 壊してやろうか。

心にもないことを思ってみるも、何も変わることはない。そんなこと、無理に決まっている。

ちゅ、と。ヴァニッシュは、文の頬に軽く唇を寄せた。

「……祭りの日まで、こんなのかぶっててごめん」

「っ……まあ、場違いっちゃあそうだけど……」

「怒んないの？」

「見られたくないんだろ？ だったら仕方ないだろ」

着物にフード。ミスマツチもいいところなのだが、それでも納得できる理由だから仕方ない。

綿あめを口に含み、ヴァニッシュは楽しそうに笑んだ。

「今日は 一緒にいてよ。今日だけでいいから」

「……そんなこと言うなんて、珍しいな」

「……お祭りの日だから」

特別な日 それは、一人のためにあらず。二人でいられることも、こんな日だからこそ咎められずに許される。

下駄を鳴らして文に抱きつき、ヴァニッシュは楽しげに笑った。陰る空に、楽しげな祭囃子が木霊した。

「んー……おいしい」

りんご飴をもう5つ目になる。もぐもぐと、さも嬉しそうに次々と胃袋へと納めていく。

呆れたように笑い、文も姫りんご飴を一つくわえた。

「ん、うまい」

「あの店のはおいしいって、リリースと来た時食べたから。文は食べるのに……」

「……ノアは本当に純粋な【吸血鬼】だから。責められないし、責めるなら俺の方だろ。【吸血鬼】らしくなさすぎる」

純粋な、混ざり気のない【和製吸血鬼】　そんなノアだからこそ、大好きなのだ。

ガリツと、ヴァニツシウの口元で水飴が弾けて溶けた。

「俺は、ノア嫌い」

「っ、は……？」

「怖いだろ……それに、狂ってる」

「……狂ってる？俺にはあんなに冷たいのに？」

「わかってないあんたは幸せ者だよ。鈍い」

「えー？……ノアは冷たいし怖いけど、それでも好きだよ。やっぱり離れられない」

「へえ……ノアじゃないとダメなのか？」

「そう……かな。ノアがいないと　考えただけでも俺が狂いそう」
離れてほしくない。あの人には、永遠に一緒にいてほしい。たとえそれが叶わない願いだとしても、神様を殺してでも　ノアには離れてほしくない。居なくなっただけでほしくない。

人ごみの中を歩きながら、ヴァニツシウはフードを深くかぶった。

「今日は、月が綺麗だね」

「へ……あ、ああ、そうだな」

「いつまで　ここにいてるつもり　？」

「んー……疲れたなら、帰ろうか？」

そんなに長い時間いたわけじゃない。ただ、人が多いので疲れてしまうのも理解できる。

静かに首を振り、ヴァニッシュは文の腕を強く掴んだ。

「……もう少し、ここにいて。いて……お願い……っ！」

「まあ、いいけど……ヴァニッシュ、お前、手が……」

震えていた。何が怖いのかは分からないが、とにかく何かに脅えているらしい。

訳もわからないまま少々混乱しつつも、文は小さい子をあやすかのようにヴァニッシュに言った。

「……ここにいようなー。もうちょっと、時間がたつまで」

「……っ……っ！」

表情は確認できなかった。何を思っているのか、何を感じているのか文に見えないように、頬を涙が滑り落ちた。

小さく　「ごめん」とつぶやいて。

*

まったく、いつまであいつは浮かれているつもりなんだ。

何を考え、どうしたいのか　俺には永遠として謎のままだろう。

永遠などに、興味はないから

古城に月光が射す。てらてらと明るく、ただ眩しくはなかった。

闇に生きるものとしては、これは必要なものだった。

深く息を吐いて目を閉じ、ノアは読書を止めた。

手の中に残る体温はもうすっかり消えている。美しいあの姿や笑みにやられてしまっていては、一人に戻れなくなってしまふ。

いないだけで不安だなんて　どうかしてしまったらしい。

一人がさみしい そんなこと、感じたことなどなかったのに。
綺麗な満月。これをよく二人で見て、月見酒と洒落込むのが楽しかった。「夜は眠い」なんて、【吸血鬼】の言葉じゃない。けれど、そんな他愛のない会話が好きだった
知らない間に……心が侵されていた。

不意に、窓の外に影が映った。

「……ああ、そうか……」

理解も何もしたくない。要するにアレは、不法侵入者だ。
そんな簡単な言葉で済めばいいのだが。

窓を開け、ノアはするりと二階から地面へと降り立った。

「こないいい日に何の用だ。用件を言え」

二人組であつた。二人とも長いローブをまとい、かなり不穏な空気を醸していた。

夏だというのに嫌に涼しい風 それが、ノアの機嫌を悪くした。

獣の臭い

「……【狼】の次は なんて、愚問か。てめエたちも、愚かな獣の類だろう」

「ノア・ジョーカーだな」

「……うちの主人なら、出払っているが。気色の悪い獣とともに」
化け物のオーラが漂っている。この狂気は、やはり獣だ。

月に手のひらをかざし、ノアは言葉を紡いだ。

「「夢と現の邂逅 ボーダーライン」 どうせ、俺を殺しにでも来たのだろう。全てを知る権利は、てめエらにはないからなあ？」

「……がああああああッッッッッッッ！！」

壊れた獣の咆哮。うるさく、耳をつんざいた。

ノアの手の中に光が集まっていた。それは弧を描き、逆刃の大鎌

へと変わった。

静かに光を落とす月が、ノアの背後でひととき大きく輝いた。

っ、キーンッ。

「っ……はっ、流石獣。パワーしか脳がないのか」

「があああああああッッッッッッッ！」

パワーで攻めてくる攻撃を鎌の柄や刃で防ぎ、そのまま跳ね返すかのように何度も攻撃。逆刃のそれは、ふるうたびに攻撃と防御の両方を兼ね備えていた。

笑うこともなく、ノアは嗤って応戦していた。

「てめエじゃあ、うちのアホには敵わん。とっとと諦めて帰れ」

「……時間の無駄です。クアトロ、「覚醒」」

それまで黙っていたもう一人の男が、ついに口を開いた。

その言葉で、さらに強く咆哮が響き渡った。

「うおおおおおおおおおおお！！！！」

「……何なんだ、薄汚い」

咆哮とともに、バキバキと骨のきしむ音がした。それは、男の身体が壊れる音であった。

クアトロと呼ばれた男は、目だけをぎらつかせて猛スピードでノアに迫った。

犬のように曲がり、壊れた体。もはやそれを人間と思うものはいなかった。

「くっ……！！」

「我々は、あなたともう一人の【吸血鬼】そして、裏切り者を殺しに来た。裏切り者を差し出せば、助けてあげてもいいんですが」

「やはり、あの獣か。差し出してやってもいいが、生憎俺は獣そのものが嫌いなんだ」

「……つまり？」

ガアンッ。

柄を握り直し、ノアは不敵に言った。

「たとえなんであろうとも　てめえらには渡さねえって言うてんだよ」

「……殺れ」

一閃　図体は巨大なのに、ひどく重い一撃がノアに響いた。

鎌で受け止め、ノアは刃を振るった。

ブシュ……ッ

「っ……ああ、化け物……っ！」

確かに斬った　だが、傷はあるものの無傷に等しいくらいに動じていない。

反撃のように、不気味な笑みを浮かべてクアトロは腕でノアを大きくなぎ払った。

慌てて受け止めたものの、さっきよりもさらに威力は増していた。ピシッと、刃に小さく亀裂が走った。

「があああああああッッッッッ！！」

「っ……！！」

威力がおかしい　何なんだ、この化物はっ……！！

なんとかバックステップでよけたものの、ノアは風圧だけで少々傷を負っていた。

渾身の力を込め、反動を使って鎌が振り上げられた

ギンッ

！！！！

鈍くひどく　肉を裂いた音が、金属音と交じって辺りに反響した。

夜に邂逅（後書き）

辞めた 止めた にしました

夜に邂逅 ？（前書き）

ちよいと今回短めです

夜に邂逅？

＊

「んー……眠い……」

いつまでここにいたのだろうか。月もてらてらと輝いていて、何とも気分の良い夜であった

すっかりなくなってしまうたリンゴ飴の棒を口にくわえ、文はあくびをした。

「なー、ヴァニツシュー……もう帰らねえ？ノアも待ってるだろうし……」

「……」

「ヴァニツシュー？」

無言 さつきからずつと、ヴァニツシューは黙ったままであった。すっかり興も醒め、文はヴァニツシューの顔を覗き込んだ。

「……おなかでも痛いのかー？」

「……あの、さ……」

「ん？話してみ？」

何を思うのか、唐突に。ひどく、ヴァニツシューは苦しそうであった。

拳を固く握り、ヴァニツシューは口を開いた。

「
帰らないと」

突然、ヴァニツシューは文にそう言った。はつきりと、確信めいて面喰ったように、文はぽかんとその顔を見ていた。

「帰るって……そりゃ、帰るけど……」

「帰ろうよ。早くっ……早く帰らないと！」

「何で」

ただ事ではない　それは、文にも伝わった。
強く文の腕をつかみ、ヴァニッシュは月を仰いだ。

「何が……あっても……絶対に……っ」

「……帰るぞ」

ノアに悪いことが　？　そんなの、感じなかった。だったら、ヴァニッシュは何を感じてこんなに帰ろうなんて　苦しそうに言うんだよ

舌打って、文はすぐにその場から駆けだした。

月はただ　静かに光の影を落としている場ばかりであった。

*

綺麗な月だ。

昔、一人でこの月をぼーっと眺めていた……誰もいない、血濡れの世界で。

誰も　自分以外は誰もいなかった。

俺が殺してしまったから　誰もいなかった。

ただ一人つきり……永遠を生きるために一人でいたかった。

ねえ……何してるの？

綺麗な、紅い月の眼。それに見つめられて、イラついていた。

どうして俺を見る。

てめエのような満たされた奴には、わからない癖に。

笑うな　俺を見るな　！

「っ……ノアあああああああ……!!」
声が　　する　　？

＊

なんて気分のいい、夜だったんだろう。月は綺麗で人は浮かれていて　　何もかもがよかったのに。

伏している黒い影　　もう、嫌な予感しかない。

血の広がる草原で倒れ伏すノアを見つけ、文はすぐに駆けよった。

「ノアっ！お前、何やってんだよ……っ！」

「……ああ、てめエか……」

「ははっ……悪い、油断した」

腹部に右腕から右肩に怪我を負っていた。ダラダラと血を流しているのは、目に見えてわかった。

ノアを肩に担ぎ上げ、文は城に向かって歩き始めた。

点々と続く血痕の後に、文は目を背けた。

「……ごめん」

「何故っ……謝るんだ……？」

「……守るって、言っただじゃん。忘れないでよ」

守れなかった。もう、こんなことは嫌だったのに

後から付いてきたヴァニッシュが、黙って文の服の端を引いた。

「……気付くの遅くて、ごめん」

「は……？お前のせいじゃない」

「けど……もっと早く気付けたらっ……!!」

「……その必要はないだろう」

血を吐きながら、ノアがヴァニッシュを見やった。

びくつと、ヴァニッシュが跳ねる。

「……あいつらは、てめエを探しに来たらしいぞ。知らなかったの

か」

「え……俺……？」

「【狼】の一族だろう。そんなこともわからなかったのか」

「なんで……今更……」

「知るか。じ……自分で……考えろ……っ！」

そう言いきつて、ノアは多量に血を吐きだした。内臓への負担も大きかったであろう。

しっかりとノアを抱え、文はヴァニッシュに言った。

「とにかく、話は後だ。ノアが治るまで、絶対に一人で動くな。わかったな」

「……うん」

「よし。んじゃ、帰るぞ」

怖い怖い、目をしていた。あまりにも見ていられなくて、目を背けた。

にこりともせず　いつもよりも、月は冷えた輝きをしていた。

シエスタ

*

*

*

眩しい

存在が、眩しすぎる

俺を溶かしてしまうほどに、どこまでも暑く眩しく

「……ん……」

何とまあ……眩しい筈だ。陽が、思いっきり自分に射している。自室のベッドで寝かされていたノアは、ゆっくりと体を起こした。ふわりと　ベッドの脚の方で、何かがうごめいた。

「っ……なんだ、てめエらか……」

それ以外にいるはずはないのだが。なんだか、安心してしまった。ここまで堕ちた自分は、もうおかしいのかもしれない。

ヴァニツシュに文。二人が、子供のように寄り添って眠っていた。くすりと微笑んで、ノアは二人を起こした。

「おい。いつまで寝てるつもりだ？」

*

声　愛しい愛しい、あのヒトの声

はっと覚醒し、文はがばりと起き上がった。

「の、ノアっ……！」

「もう、昼になるぞ。大丈夫か？」

「体つ……えと、傷だらけで、手当てして、ヴァニツシュが包帯巻いて……！」

慌てて伝えていたのだが、どうにも慌てすぎて伝わっていなかった。それどころか、余計に困惑していた。

はあと溜息を吐き、ノアは文に言った。

「わかった、わかったから。てめエが伝えようとしてるのはわかってるから」

「っ……生きてる……よな……？」

「死人に見えるのか、バカ」

死人になんて見えない。死んでたら、もうこうして話せない。

死なせて、たまるか。

包帯だらけのノアに抱きつき、文は声を殺すように言葉を吐いた。

「大好きっ……大好き、大好き……っ！」

「はいはい……わかった。痛むから離れろ」

「嫌」

「我が仮言つな。俺が死んでもかまわんのか」

「そうじゃない……昨日、何があっただよ。何で、ノアが傷だらけなんだよ……」

「それは……」

言っていいものか……もし、悪い方に転んだらどうする？

じつと文の眼を見つめ、ノアは舌打った。

「……おい、狼。てめエも聞いてろ。っーか、起きやがれ」

「んぐっ……！？な、何っ……？」

「話だよ。ちゃんと聞いてろ」

にまりと意地悪く、ノアは笑んでいた。

寝起きでよくわかっていないヴァニツシュをよそに、ノアは窓の外を見ながら話し始めた。

。

「は……っ……化けモンどもめっ……！」

「お互いさまでしょう。さて　そろそろかたを付けます。じつとしていたら、楽に逝かせてあげますよ。邪魔なので、さっさと消えてもらいたいのです」

出血量が半端じゃない。このままだと、確実に死ぬ　！

さっと、男がクアトロに腕を払って命じた。

負傷のせいで動けないノアに、クアトロが猛スピードで迫った。銀の毛を揺らし、目をライトのように輝かせて。

と　強い光が刹那に閃いた。

「　　ずいぶん手こずってるじゃない、B君？」

「仕方がないから、手伝いに来てあげたわよ。感謝なさい」

孤高の魔女　その一人と、見知らぬ少女がノアの前に現れた。

呆然としているノアの前で、クアトロはあっけなく二人の杖によつてはじかれた。

「……リリスちゃん、もう魔法使ったの？」

「そっちこそ、卑怯よ。まだスタートって言ってないのに」

「合図なんて待たないわ。人生って、過ぎていくのが速いの。待つてたらおばあさんになっちゃう」

「もうなってるじゃない」

「何か言ったかしら？おばあさんになんてまだなっていないわよ」

口喧嘩しつつも、かなり恐ろしい要素の残る二人であった。わかることとしては、ノアを助けに来たということだけであった。

キャンツと声をあげて地面に転がったクアトロは、すぐに体勢を立て直して唸った。

「あらあら、あれじゃあ犬ね。狼の誇りなんてものは、どこへ行ったのかしら」

「狼キライ。だって、獣臭いんだもの」

「仕方ないでしょう、犬なんだから」

「……どうして、ここにいますか」

「怪我人は黙ってなさい。でないと、そのまま息の根止めるわよ」

ノアの表情も見ずにそう言って、マリアはニツと笑んだ。

ぶおん……と、リリースの両手の手中に火の玉が浮かんた。

「さあてえ……焼き払っちゃうから」

「あ、待ちなさい。私だって」

リリースに負けじと、例の「笑う月」召喚。何を思ったか、悲しんでいる方の面を向けて。

ちつと、男が舌打った。

「……最凶の魔女に、最狂の魔女ですか。勝ち目、ありませんね」

「蒼髪の狼さん。逃げるなら、今のうちよ。その化け物みたいな銀狼も連れて行ってね」

「……では、そうさせてもらいましょう。あなた方にはかなわない」「ふふっ……賢明ね。そんな暗い格好してるから、奇妙さが増すのよ」

フードを翻し、男はクアトロを呼び戻して闇の中へと風に紛れて消えた。クアトロに乗っていったのだと、微かに目に映った。

倒れたままのノアを見下ろし、二人は口々に言った。

「A君は元気なの？」

「ヴァニツシュ苛めてないでしょうね」

ほぼ同時。かぶっていた。

むっとしつつも、二人はノアに尋ね続けた。

「苛めてたら承知しないから。あなたを八つ裂きにして、さっきの狼にくれてやる」

「A君の体調って、結構崩れやすいの。管理してあげてね？」

「ヴァニツシュは野菜も好きだから適度に食べさせてあげてね」

「A君って外に出歩くでしょう？いい加減に陽を浴びるのはやめてほしいんだけど……」

もう駄目だ。

意識が　ぶつつりと切れた。

*

「　まあ、こういうわけなんだが」

説明は長く、少々時間がたっていた。それこそ、数時間はゆうにふとノアが振り返った。

「……やはりな」

「んー……っ、うん、聞いてたからっ！」

完全に文は眠っていた。ヴァニツシュに至っては起きてもいなかった。

慌てて眼をこすってノアを見て、文は笑った。

「……伯母様とリリスが来たんだろ？うん、聞いてた」

「……情けないな、俺は」

「んなことないって！だって……二対一とか……」

「……言い訳はしないが。てめェに心配されると、体がかゆくなる」

「え？……何で！？」

「知るか。……ああ、そうだ」

笑いながら話し、ノアはふと文の髪を撫でた。

ぽかんとしつつ、文は段々と笑顔になった。

「……何？珍しい」

「　俺を癒してくれないか？【吸血鬼】」

「っ……何言って」

「じつとしている。俺が撫でているんだから」

何はなくとも、とにかくなでなで。ノアは至極嬉しそうだった。

傾いた陽の射す、うららかな午後。睡魔が襲いかかってきていて、もう耐えられない。

ふらりと倒れたノアは、文の手を強く握った。

「　眠い……」

「　へー！？……大丈夫か？」

「……てめエも、寝ないか？その【狼】だって眠っている」

「っ……何それ。どういう意味で言ってるの」

「俺は眠いんだ。あまり焦らすな。気が狂う」

怖い。確か、前々から低血圧がどうのこうのと……。

しびれをあっという間に切らし、ノアは手を引いて文をベッドの上に押し倒した。

「っ、ノア！？」

「……おやすみ、文……」

ちゅ、と。軽く、文の頬にノアの唇がふれた。

かなり慌てたものの、文はすぐに静かになった。

そして、もう寝てしまった隣人の髪をそつと撫でた。

「
大好き」

近い　くっついて寝るの何で、小さいころ以来意識しなかった。
と言ってもノアはずっと俺よりも大きいままだ。身長だって、もう少し届かない。

静かに笑んで、文はノアの胸に顔を埋めた。

空気が抜けるように、やがて文も眠りに堕ちた。

景観を見るに

*

*

*

「……んー……あー……」

いつの間にか いや、わかっていたのだが 眠っていた。
何故か朝陽。一晩眠って、朝になってしまったらしい。
隣にも、どこにも。もう人はいなかった。

「……ヴァニツシュー」

「んあ？……何ー？」

ひよっこりと、タイミングよくドアの陰からヴァニツシュが顔を
出した。

にぱつと笑んで、文はヴァニツシュの肩に両腕をかけ、飛び乗っ
た。

「うわ、重いつ……降りてよ」

「え、嫌。ヴァニツシュだーい好きい……」

「っ……だから何！？重いから降りて！」

「……何怒ってんの。笑ってないと、ヴァニツシュらしくないー」
「うるさいな……っ」

いやに不機嫌。こんなの、ヴァニツシュじゃない。何があつたか
は知らないが、とにかくくだめた方がいい気がする。

無言で文をおろし、ヴァニツシュはふいとそっぽを向いてしまっ
た。

ぐにと、文がヴァニツシュの両頬をつまんで引いた。

「いつ……いだだだだだだ！？」

「なあ、機嫌直せて。かわいいのに台無しだぞ」

「っ、うるさいって言ってるんだろ！？あんた本当にうざいよ。だか
らノアにも嫌われるんだろ！？」

「……んー……嫌われてはいないから。少なくとも、まだ遊んでくれるし」

「……あんた、本当に馬鹿だよ」

蔑むような、そんな目だった。口調も冷たく、表情も硬かった。当初出会った時よりも、ずっと。

流石に堪え、文もそのまま黙ってしまった。

「……その態度、本気でやってたら嫌になるよ」

「もういい」

「は？何言って」

「ヴァニツシュ　大っ嫌い」

子供っぽい　そんな言い分だ。でも、そんなことを本気でのたまっていた。

一瞬ぽかんとし、やがて、ヴァニツシュは文の腕を強く掴んだ。

「バツカじゃないの。あんた、何にもわかってない癖に」

「何がだよ！説明も何にもなしにっ……！」

「説明しなきゃいけないなんて、それでも【吸血鬼】かよ！ほんっ
とにお前は……っ！」

「いい加減にしないかっ！」

ゴンツ、ゴンツ。

二人の脳天に同時に拳が落ちた。それもかなりのダメージを与えて。

一瞬くらくらし、文は壁にもたれかかった。

「な、何するんだよ、ノア……」

「人が怪我で眠っているんだ。少しは気を使え」

「ごめん……」

お怒りなのは見て取れた。包帯も少しほどけており、どうやら巻いている途中だったらしい。

ぷくつと頬を膨らませ、文はノアにじゃれついた。

「ノーアー。血い飲ませてー」

「甘えるな、バカ。それと」

ギロリと、ノアはヴァニッシュを睨んだ。

顔を伏せ、ヴァニッシュはノアを見ようとはしなかった。

「……何を焦っている」

「さあね……あんたは賢いよ」

「こいつが馬鹿なんだ。てめえ、自分ひとりでしょいこんだりはするなよ。俺にはお見通し　とまでは行かないが、大体はわかるつもりだ」

「わかって……わかってるなら……何も言わないでよ」

それだけ言くと、ヴァニッシュはただ黙ってその場から消えた。まるで、逃げるかのように。

ノアの首に腕をからませて、文はさっきと打って変わって真面目な風に言った。

「　何か、あるんだろうな。話さないけど」

「わかってるのなら、何か言ってやれ。馬鹿じゃなく」

「馬鹿だよ、俺は。　血を飲めば、ヴァニッシュの考えがわかるけど……あんまりしたくない」

「てめえだけの特殊能力だろう。何が嫌なんだ」

「……ノアの心も当ててやろうか」

答えはいらない。やると言ったらやる。

唇を寄せ、言葉が聞こえる前に文はノアの首筋に噛みついた。嬉しそくに笑みながら。

痛みに耐えつつ、ノアは文をどうにか引き離れた。

「離れるっ！バカか!？」

「……もっとくっつかせてよ。消毒薬の匂い好きー」

「知るか。で？喉でも渴いたのか？」

「　ノア」

小首をかしげて、文はノアを見ていた。

じつと固まったまま、ノアはふいと文から目を背けた。

「……俺のこと、好きなの？」

「……嫌いだとして。何故、今一緒にいる？」

「あ……え、好きなの!？」

「嫌いでも、好きでもない。というか、そんなバカなことってないであいつを追え」

「っ、わかってるって!」

追うに決まってる。一人じゃ、何をしだすかわからない。

駆けだし、一瞬ノアを見やって 文はすぐにその場から離れた。

*

ヴァニツシュ 大っ嫌い。

あんな子供みたいなセリフに。そんなのに、反応するのはおかしい。

なのに 心が壊れるかと思った

あんなの、いつものことじゃないか。文にあんなこと言われるのも、冗談なのかとわかってるのに。

昨日の あの目が怖い。

俺は、何なのだろう。

頭の中で霞み、ぼやけ、残っている残像。夢なのか現なのかさえ分からない。

“記憶”だと そう、なんだろう。わかっているはずなのに。

「っ ヴァニツシュ!」

城から出ようとしていたヴァニツシュの手首を、追ってきた文が強く掴んだ。

驚いて、ヴァニツシュはぽかんと文を見つめていた。

荒く呼吸をしつつ、文は汗を手の甲で拭った。

「ヴァニツシュっ……………！ごめんっ！」

「……………何で謝んの」

「へ……………？え、と……………その、えーとだな……………」

理由？確か、そんなもんはない気がする。

そつと手を離し、文はヴァニツシュのフードの中に手を伸ばした。

「っ！」

「……………理由、ないんだよ。なんか、俺が悪いから……………許してよ」

ふにふにふにふに。謝罪はしている。が、態度が悪かった。

ヴァニツシュの耳をふにふにと触りながら、文はニツと笑った。

「ごめんなあ……………嫌いとか言って……………」

「……………訳わかんねえ」

「いつつも、俺はこんなのだよ。……………嫌じゃないの？耳触られるの」

嫌だったはずなのだが。何も反応しない。

八重歯を見せ、ヴァニツシュは言った。

「……………あんただから、許されるんだよ。本っ当に馬鹿だよな、

あんた」

「……………うわ、恥ずいからやめて。そんなこと言っな」

「今更何言ってるの。呆れるほど大馬鹿。死ねばいい」

罵詈雑言を並べてイラつくヴァニツシュに、文はやっぱりと笑んでいた。

？つと、ほんの少しヴァニツシュが引いた。

「ひどいな……………んじゃ、どうしたら許してくれる？」

「もういいから。付きまとうな」

「それはダメ。ヴァニツシュ、一人でどうにかするタイプだろ？リスが心配するし、俺が怒られる」

「はあ……………？そんなの知らない」

「……………ほんつと、素直じゃないよね……………」

はあと息を吐き、文はヴァニツシュの頬に手を滑らせた。

殺気に近い何か　それを感じ、ヴァニッシュは瞬時にその手を
払った。

「っ、何するつもり……っ！」

「　　こうするつもり」

ひょいと、軽々しく。

まるでぬいぐるみでも抱くかのように、文はヴァニッシュを両腕
で抱きあげた。

一気に赤面し、ヴァニッシュはじたばたとその場で暴れた。

「なっ、何すっ……！？」

「いいからいいから。じっとしてなよ」

「じっとして……っ、降ろせ！」

その姿はさながら赤頭巾のようであった。紅いフードは白い肌
によく映え、瞳は潤んで星屑をちらしたようであった。

数メートルヴァニッシュの抵抗に抵抗して歩き、文は街を見下ろ
せる場所まで歩きついた。

「んー……晴れてんなあ……」

「晴れてるって……」

「　　綺麗なんだよ」

そう言っ、文はじつと遠くの世界を見つめていた。飽きもせず、
じつと

そこから見える世界はどこまでも美しく　どこまでも醜悪
であった

あなたに愛を

*

*

*

夕……ス……ケ……テ……

手が 手が、真っ赤に染まってしまった。
何なんだろう、この『アカ』は。

綺麗で、綺麗で。どんなに拭っても取れてくれない。
三日月がてらてらと。なんて、この空は綺麗なんだろう。

心が壊れる。もう、バラバラになってしまった。

手の中にある、鈍色の刃。紅に濡れ、月光に輝いていた。

自分が、してしまった？
どうして？俺が、何故？

足元に散らばる肉片に骨。武器も転がり、殺伐とした戦場であつた。

ただ、空だけが 美しく、月を煌めかせていた。

誰かが、自分に嗤いかける。辛辣に、楽しそうに。

お前八……永遠二人だヨ！

*

*

*

「っ……………！」

ひどい汗の量。陽の暑さではなく、夢のせいなんだと即座に理解した。

苦しい　胸が締め付けられるような

隣で眠る、そのヒトは。安らかに寝息を立てて眠ったままだった。

「……文」

そつと名前を呼んで、髪を一房軽く引いてみた。

すぴーというやわらかな音が、ヴァニツシュの耳を軽くくすぐった。

「……うわぁ、のんき」

「……んぁ……………？ヴァニツシュ……………何い……………？」

「っ、あ……………ごめん」

少し強く引きすぎてしまったらしい。抜けてはいないが、気付いたのだろう。

ヴァニツシュを見つめて、文はにいつと微笑んだ。

「おはよぉ……………んー、眠い……………」

「ごめん、起こした……………」

「いや、いいよ。んー……………あのさ、ノアは？」

「まだ寝てると思うけど……………どうしたの？」

「いやぁ……………今日はいい天気だなあって……………」

のんきにもほごがある。いい天気だが、はつきり言ってそれがどうしたという感じた。

わしゃわしゃとヴァニツシュの頭を撫で、文は嬉しそうに言った。

「今日は出かけない？どこか、ピクニックに」
「……へ？」

「ノア、呼びに行こっ？んでー、お弁当持ってピクニック」
「はぁ……？」

のんきの極み。どうしてこんなに楽しそうなんだ。

ニコニコと子供のように微笑み、文はベッドから飛び降りた。

*

この『古城』 もう、かなりの年月を経ているらしい。
止まらない負の連鎖。その全ての元凶は、この城の秘密をめぐつてかららしい。

はるか昔の、止まらない連鎖。
それは、ここであつた抗争のことらしい。

【ムーンエッジ】 能力を持った、とある【吸血鬼】の呼び名
それが、この城に住んでいた

月の刃。それは、あのマリアでさえかなわなかったとされる化物の中の化け物。

この目で確かめたわけではないが、本当にいたとすればかなりの厄介者だ。

「ノアーっ？起きてるー？」
不意に、のんきな声が下の階から聞こえてきた。声であの馬鹿だとすぐに分かった。

本を閉じ、ノアは黙って部屋から出た。

「……何の用だ？」

「おはよー！あのさ、ピクニック行こう！」

「……あの犬と行ってこい。俺は調べものがある」

「何それ……行ってくれないなら、ノアの部屋で遊ぶからいいよ。ヴァニツシュも連れて行くし」

「はあ！？来るなっ！来るとしても二人で来るな！埃が舞うだろう！？」

潔癖症。だが、そんなことお見通しだ。

勢いよく階段を上り、文はぱつとノアの手をつかんだ。

「ねえ、行こう？ヴァニツシュも待ってるんだよ？」

「っ……行かない！行くかつ、外なんて……」

「ノア」

チュツ

ノアの頬に唇を寄せ、文はニツと笑んだ。

「……ダメ？」

「……行かない」

「えー、ケチ。行こうよ、楽しいって！俺、もうお弁当作っただぜー？」

「知るか。大体、【吸血鬼】なのだから血液さえ飲んでいればいいものを……」

「いいじゃん、別に。」

じゃ、特別」

ノアの首に腕をからめ、文はそのまま後ろに体重をかけた。

白い壁が、妙に綺麗に見えた

ぐらりと体勢が傾き、二人はまっさかさまに階段を落ちて行った。
「っ！？」

「うおつと……ちよつと、落ちすぎた？」

ガンガラガツシャーンと激しく。一番下まで落ちてしまった。

痛みもなくぽかんとしているノアとは正反対に、文はけらけらと笑っていた。

「うん、楽しかった！」

「……はあ？」

「頑丈でよかったなー。骨一本折れてない」

「……ちよつと歯あくいしばれ」

痛みは感じないものの、かなりノアはイラついていた。文にもわかつてるように。

流石にヤバいと感じ、文は固く目を閉じた。
振り上げられた拳が、まっすぐに落ちた。

どバキッ ！！

「つ~~~~~！！」

「バーカ。人を落とすからこうなるんだ」

「いったいよ……！階段落ちたよりも痛い……」

「だからなんだ。いい加減、学習しろ」

ぷくつと頬を膨らませるものの、文は笑っていた。

呆れたように、くすりとノアも笑んだ。

「……本っ当、馬鹿だな」

「言わないでよ。ノア」

「……惚気ないでくれる？そこのお二人さん」

イラつく声がもう一つ。それが、文の首を背後から絞めた。

「ぐえっ!？」

「見ててイラつく。イチャつくな」

「誰がイチャついて……っ」

「ノアも、反論できないでしょ。イチャイチャイチャ、それ

でも【吸血鬼】か!？」

「何怒ってんの……こんなの、いつもやってるじゃん」

ベタベタと、まあ暑苦しく。わかっているのだが、やめようなんて思わない。

さらにイライラし、ヴァニッシュは文の頬を強くつねった。

「ピクニク、行くんだろ!? さつさと用意しろ!」

「い、いだだだだだ!？」

「ノアも!……俺だって、手伝ったんだから。食べてよ」

「……はあ。行かなければならない空気を作るな……」

落ちた。完璧に落とした。

にっと笑んで、ヴァニッシュは二人に抱きついた。

「っ!？」

「ヴァニツシュ!？」

「……傍にいてよ?ずっと」

どこかさみしげな声だった。さっきまでの喜びようとは一転して、
びくびくと動くヴァニツシュの耳を撫でて、文は微笑んだ。

「……行くわけないだろー」

「俺たちの居場所は、ここにしかない。てめえさえどこにも行かないのなら、どこにも行くところなんてない」

「そう」

「あれ……?まだ、不満？」

「大好きだよ」

にぱっと、明るくにつこり。いつもの笑顔であった。

ヴァニツシュにはこれが一番似合うのに どうしてもっと
笑ってくれないのか

お返しにと、文もニツと笑み返した。

「俺も、大好きだよ」

「……当然。嫌いななんて言いやがったら、その口引き裂いてやる」

「引き裂く……うん、いいよ。心臓抉ってくれてもいい」

「あ、そんなこと言う?それじゃ、嫌いって言ったら本当にそれやるから。覚悟して」

「するする。心でもなんでも、抉っていいよ」

グロテスクだろうがなんだろうが、ヴァニツシュが笑ってくれる
のなら。何でもしようと思ってしまう。

チツと、二人の耳にノアの舌打ちの音が反響した。

「……見てられないな。俺以外と、笑ってくれるな」

「へ……?ノア、何言って」

「文は 文の全ては、俺のモノだ。てめえには渡さない」

「へえ?じゃ、どうするわけ」

「図々しくなったな、てめえも。別にかまわんが」

軽々と、ノアの両腕が文を抱きかかえた。俗に言う『お姫様だっ

こ』で。

慌ててノアにしがみつき、文は頬を一気に赤く染めた。

「……の、ノア？」

「……言わせるなよ。言葉は苦手なんだ。態度で全て示してやるよ」

「い、いや……びつくりして……」

「獣にくれてやるくらいなら、俺がもらってやる。愛しているからな？」

「……イチャつくなくて、聞こえなかった？」

板挟み？修羅場？四面楚歌？なんか、全部違う気がするがそんな感じのような気がする。

静かに微笑み、ノアは片腕に文を乗せた。そうして、もう片方の腕でヴァニッシュを乗せた。

「！？」

「おー、力持ち」

「……これで文句はないな。これ以上言うなら、今すぐに文を俺のモノに」

「ないないっ！ないからっ！」

「そうか。ならいいが」

力持ちにも程がある。というか、このインドア何なんだ。こんな力あったのか。

楽しそうに微笑んで、二人はノアに強くしがみついた。

吸血鬼の写真

＊

風が心地良い、うらかな昼下がり。【吸血鬼】には毒なのだが、そんなことでもよくなってくる。それほどにいい天気だった。見晴らしの良い丘の上。わざわざそこまで出かけて、これこそピクニックだろう。本音を言うなら夜がよかったのに　　夜は眠くなるから。

バスケットを地面に下ろし、文はノアの手を引いた。

「本っ当にお日様ダメなの？こんなに綺麗なのに」

「嫌いなものは嫌いなんだ。悪いか」

「……人生損してるよ、きつと。こんなに綺麗で　魅力的　」

仰いだ空はどうにも青く　目が眩んでしまった。

真っ黒な蝙蝠傘を差し、ノアは丘の上からはるか後方を見下ろした。

「……ピクニック、な」

「え？ああ、本当に嫌だったの？」

「別に。ここまで来ればどうでもいい」

木陰に腰をおろし、ノアは少し疲れたような表情を見せてそう言った。

その隣に座って、文はバスケットを開けた。

「ヴァニツシュー、昼飯はー？」

「っあ、ちよつと待ってっ……！」

「……なんだあれは」

両手に抱えた袋のようなもの。ヴァニツシューはそのせいで遅れを取っていた。

薄汚れた麻袋。ほこりをかぶっていたそれは、ヴァニツシューが到

達すると同時に地面の上に投げ出された。

「……これは？」

「『撮影機』だつて。サツエイキつて何？」

「俗に言う、カメラだよ。これはかなり古いものだけど」

袋から出されたそれは、古びていて使えるのかさえ分からないようなものだつた。

ヴァニツシュも座らせて、文はニツと笑んだ。

「とにかく、先に昼飯！んで、みんなで写真撮ソの」

「……【吸血鬼】は」

「ノア。言わないですよ？」

ノアの口元に箸で卵焼きを持っていき、文は笑顔のままそう言った。

少々黒く焦げついているその卵焼きを、ヴァニツシュはおいしそうに食べ始めた。

「ん、おいしい」

「当然。はい、ノアあーんして」

「……は？」

「これは当たり前なんだぜー？儀式みたいなもんだよ」

「違つたろう。何なんだ、一体……」

「いいからいいから。でないと　噛むよ」

笑顔でそういうものの、文は決して箸を離そうとはしなかった。傘を差したまま、ノアは眉をひそめた。

そして、小さくそれをかじつた。

「……まずい」

「えー？何で？おいしいじゃん」

「そもそも、人の食い物が嫌いなんだ。知っているだろう」

「……俺の作ったものでもダメつて……んじゃ、俺でも食べる？」

おにぎりの一つをむしゃむしゃと子供のように食べながら、文はそう言った。

ぶしゅつと、ヴァニツシュがお茶を吹いた。

「ん？あれ……変なこと言ったか？」

「別に……変な【吸血鬼】だなと……」

「ふん。てめエだっておかしなものだ。こんなやつがいいなんて

」

「それはあんたも同じだろ。文のこと、好きで好きでたまらな

「黙っている、獣が」

ギロリとヴァニッシュを睨みつけ、ノアは文の身体を抱き寄せた。箸から滑り落ちた卵焼きは、宙を華麗に舞ってヴァニッシュの口の中に収まった。犬がフリスビーを取る、あの要領で。

もぐもぐと口を動かして、ヴァニッシュは箸でノアの頬を刺しにかかった。それも無言で。

「なんだ？」

「俺に喧嘩売ってんの？文のこと、独占するのはズルじゃない？」

「昔からこうだからな。それに、てめエの好きな文は別だろう？」

「っ……どういう意味」

「たとえば 家族として」

ヒュッ。箸がノアの目の前の空を刺した。

構わずにおにぎりを食べている文は、うりうりと空いている手でヴァニッシュの頭を撫でた。

「あんまり物騒なことするなって。ノアのこと、嫌いじゃないだろう？」

「好きではないよ。今みたいなのは大っ嫌い」

「そうか。なら 文」

「んー？……あー、うん。その顔は何かまた余計なこと考えてるだろ……」

笑顔が怖い。どう言うことなんだ。

二つ目のおにぎりもぺろりと平らげた文は、カットリングゴを一つ食べながら振り返った。

二人の間に、再び箸が刺さった。

「……手が滑った」

「……嘘つけえええええええ！」

「ホントだって。文には刺さないよ」

「だそうだ。首、いいな？」

「っ……いい、けど……っ!？」

刺さる牙 ピリツと、ほんの一瞬だけ痛みを伴った。

サラサラの髪が肌を滑る。腕にも、胸元にもその髪が心地よく撫でる。

快楽に溶けてしまいそうな そんな感覚

長い長い数十秒感。この為に感覚という概念があると言っても過言ではない。

「っ……何……?空腹？」

「いや、違う。嫉妬だよ」

「……あてつけか。冗談抜いて、刺すよ」

「勝手にしろ。とにかく、俺の食事は終わったんだ」

そう言って、ノアは持ってきた本を開いて読み始めた。他には特に干渉もせずに。

むっとしているヴァニッシュに、文は笑って言った。

「ほら、あーん」

「っ!？え、何で……」

「不公平は嫌いなんだよ。ほら、早く口あけて……」

といつても箸でつかんでいるのはリンゴなのだが。予想以上に持つてきた量と食べるスピードが合わなかった。

躊躇うこともなくパクリとそれを食べ、ヴァニッシュはノアを鼻で嗤った。

「……ふん」

「わざわざガキの挑発には乗らんぞ」

「返す時点で乗ってるよ。おっさんのくせに……」

「年をとることは悪いことではない。むしろ、知識を蓄えてどんな魅力を増せる。その分、文を落とせる確立も過ごした年月によっ

て高くなる」

「っ……文っ！」

「は、はい!?」

「っ　　チューしよう!」

脳内フリーズ。

真赤に赤面して、ヴァニツシュは叫ぶように言った。

ゴンッ!!

「……何ぬかしとるんだ、青二才が」

「いったあっ……!何すんだよ!」

「幼さが滲み出てる。これだから、ガキは」

「あー、もう!喧嘩するな!」

とりあえずノアを抑えて、文はヴァニツシュの頭を何度もなでてやった。拳が堕ちたところを、しつこいくらいに。

傘を差したまま、ノアは二人を木陰に並べた。

「　　写真、撮るぞ」

「は……何でこのタイミングで……」

「陽が強くなってきた。夕刻に近づいてるからな」

「で……どうやって……」

「シャッターは押してやる。だから　　」

「あ!俺が押すからっ!だから、俺真ん中で、ノアが左でヴァニツシュが右な!」

急に嬉しそうにそう言っつて、文はカメラに向かって走っていった。傘を閉じて置き、ノアは渋々それに同意した。

三脚の上の、古いカメラ　それは、光を淡く反射させ、三人を調度映せるようになっていた。

レンズを覗いてピントを合わせ、文は二人に向かって駆けだした。
「あと十秒っ!」

じーっという、独特の歯車が回るような音。心地よいその音と、

足音が混じった。

なんとか並んだ七秒前。

ポーズがわからなくて戸惑った四秒前。

文の頬にキスをした一秒前

カシャッ。乾いた音が、カメラから弾けた。

「……は」

「両手に花だな。よかったな、文」

「い、いや……何が……」

「ごちそう様っ。現像どうしょっか」

「いい、俺がやる。てめえらは遊んで来い、ガキども」

「ガキって言うな」

頬が熱を帯びて アツい

呆然としていた文の手を強くヴァニッシュが引いた。

「ほら、遊びに来たんだろ。遊ばないと」

「……ヴァニッシュ」

「へ……何？」

「ごめん……アツい……」

陽の熱りのせいならいいのだが。ノアの言っていた通り、少し雲に隠れていた陽が始めていた。

ヴァニッシュの手を握り返し、文は震える体のまま空気が抜けたようにドサリと草原に倒れこんだ。

笑いながら 嬉しそうに

*

……【吸血鬼】は

続きを言えなかった。苦しむのがわかっていてやっているとしたか
思えない。

【吸血鬼】はカメラに映らない

わかっているはずなのに　どうしてこんなもの持ち出した？
ヴァニッシュを苦しめたいのか？

あいつは　何を考えている　？

現像した写真　それに映るのは。

愛おしそうに誰かの頬に唇を寄せているヴァニッシュと。

泣きながら笑っていた、文の姿であった

狼月

*

*

*

暗い世界 何もない、暗闇の世界だった。

魔法で作られた月光を浴び、影がいくつか幻のように揺らめいていた。

机の上に乗った厚い本をめくり、一つの影が静かに微笑した。

「そうですか あなた方も、同じことを考えていたとは」

「同じ種族だろう！第一、お前たちは負けたんだぞ」

「戦略的撤退ですよ。そんな言葉も知らないのですか、そちらの野蛮な種族は」

ガンツと音を立てて机が叩かれた。

にいつと笑み、男の傍にいた獣が椅子の上に乗った。

「クアトロ、静かになさい。私の機嫌を損ねるつもりですか」

「……カルヴォ、こいつ、食べていい？」

「いけません。あなたは食い意地が張りすぎです。そんなあなたも好きですが」

「……おたくのその獣も、こっちの種族なんだ。頭よりも体での実力行使。あなたの一族は理屈っぽくていけねえ」

カルヴォにそう言い、その男はけらけらと笑った。

本を閉じ、カルヴォはフードを脱いで困ったように頭を掻いた。

「理屈だからこそ、クアトロを生み出せた。この、美しき化物を」

「っ、趣味がわかんねえ。こんなにされちまってよオ……気高い狼の血はどうした」

「そんなもの、血筋の問題ですよ。私は研究のために、あの狼を捕えたい」

「……ヴァニツシュか」

無精髭を撫でながら、男は机の上にどかりと座った。

束ねたこげ茶色の髪に煙草の匂いをまとわせ、男は雑に羽織った土埃によって汚れた上着を翻した。

「こんな暗い所にいないで、この月光を浴びればいい。あのヴァニッシュも、“覚醒”できるんだろ？」

「さア、どうでしょう。“覚醒”は、者により様々ですよ。それに アレは」

「つべこべ言うな。お前の一族の汚点だろ。こっちにとつ

ても、血族という点では大差ねえけどな」

「 零 v a n i s h ですからね」

そう言つて、カルヴォは空を仰いだ。

ふ っと、月は闇の中で光を失った。

*

*

*

「えーっ！？何、あの写真撮れてなかったの！？」

「仕方ないだろう。フィルムに入ってなかったんだ」

晴れた日、文はノアにそう叫んでいた。カメラを手にとって。

文を自分から離し、ノアは面倒くさそうに言った。

「だから、言っているだろう。わかれ」

「だって、あんなに楽しかったのに……！何してんだよっ！」

「仕方ないと言ってるんだ。いい加減にしないと、ここから追い出すぞ」

「何それ！？っ、ノアが悪いんだろ！？」

「違う。カメラが悪い」

写真くらい、あつてもいいじゃないか。三人で写った、大切な証拠なのに。

深く溜息を吐き、ノアはチツと舌打った。

「もついいだろ。ほら、下がれ」

「……ひっでえ」

「ふん。ああ　なんだ？何か言いたげだな」

「だって……ノアは、もう俺と一緒に写真撮れないだろ……」

「ああ、したくない。あんなもの、ない方がいい」

やはり、文は知らなかった。あの写真に写る『姿』を。

溜息を吐き、文は諦めて空を仰いだ。

青空　綺麗な、雲ひとつない空であつた。

「……ねえ」

「は？……何だ」

「もつと言つてもいい？何回も、ずっとずっと一緒にいられるときは」

「……何を」

わかつていくくせに、と文は微かに笑んだ。

青い空は、いつも温かく　けれど無情で。自分を嗤っているように見えるのだ。

愛してるなんて、そんなこと言わないでよつて。古い古い、言い回しの文句だ。何を思ふのか、そんなことを言うなんて馬鹿げている。

振り向いて、文はノアにニツと笑みかけた。

「愛しいよ……ノアのこと、愛しくて愛しくて仕方ない」

「っ……何だそれは」

「愛しいんだ。愛しい　愛しいんだよ」

「……古い言い方だな」

「古い？好きなのに？」

「古い。愛しいなんて、そんなもの」

狂おしいほどに愛おしい。そんなこと、わかっているのだろう。好きなことに境界はない。

外で洗濯物を干しているヴァニッシュを見やり、ノアは言った。

「　そろそろ　来るころじゃないか？」

「ん　何が？結婚式の準備さん？」

「アホ言つな。　化け物ども　だよ」

あの【狼】　その何かを感じ、ノアはヴァニッシュを見ていた。
んーと唸って少し考え、文はヴァニッシュを同じように見ていた。
「……来る、かな？」

「ああ。そろそろ、月のある日だろう」

「へ？月なんて、毎日出てるだろ」

「俺たちの言う『月』の満月とは違い、あいつらは三日月だ。月の光を完全には必要としないのに、月がなければ力も出せない」

「……ヴァニッシュも？」

「知らん。ただ、マリア達もいない　いたとしても、手伝つかどうかは不明だろう」

そう言って、ノアは部屋を出た。あの厚い本を一冊抱えて。
呆然とヴァニッシュを見続け、そして文はノアの後を追った。
空は青いのに　　パラリと、雨が数滴振りそそいだ。

*

*

*

暗い暗い、陽の射しこまない世界。闇色の、月の綺麗な悪夢　ナ
イトメア

「さあ！　今宵は宴だ　」

「踊り狂い、壊してしまおう　！」

クルリクルリ、狂い狂い。綺麗な綺麗な美しい世界　美しいの
に、欠けた世界

杯を片手に酒をあおり、男はカルヴォにもそれを差し出した。

「飲めよ。俺たちの種族は、これを好む」

「あなたの血族だけでしよう。私はそんなもの飲まない」

「そうかい。なら、勝手に騒がせてもらうぜ」

そう言って一気にそれを飲み干し、男は笑った。

黙って本を読み続け、カルヴォはその騒々しさを無視した。
騒ぐ狼の中化から、一人の狼が男の前へと出た。

「　ヴァン様　　そろそろ、陽の落ちる時間となりますが」

「そうか。なら 行くぞ」

杯を投げ捨て、ヴァンはマントを翻した。

人工的な魔法の月は、その色を変え 紅く染まった。

宵闇とともに

*

*

*

「おい、ヴァニッシュ」

からりと乾いた空気。洗濯物を干すのには絶好の天気であった。
くるりと振り向き、ヴァニッシュは籠を地面に置いた。

「何？もう少しかかるんだけど……」

「……何も感じないなのか、ためエ」

「？感じる……雨なら降らないよ」

「そうじゃない……」

わかってない。まあ、そこはわかっていたが。

はあと溜息を吐き、ノアは腕を組んだ。

「陽が落ちるぞ。全て取り込むのだろう？」

「あ、うん。まだ終わってないけどって言っただろ」

「……守ってやる、な……」

ふと空を見やると、文が駆けて来るのが目の端に映った。

いや 落ちてくる

二階から地面に飛び降り、文はニツと笑んだ。

「やつ。遠くを見てただけだよ」

「……何が見えた？」

「空が真っ暗になって 闇が来るよ」

熱く熱を帯びた世界から灯が消え始め それはやがて一閃の光

を残して沈んだ。

紫雲の残る空に、月がひときわ美しく映えた。

三日月の一步手前 まだ、完全な月ではなかった。

「あ……何……？」

「もう遅いな。日が暮れるまでに対処しようと思ったのだが」

「うーん……対象する気なかったくせに」

風に乗って香る、獣の匂い。それが遠く、近く　すぐそばにあった。

【狼】特有の、あの　嫌な匂いが。

宵闇の中、静かに蒼が現れ始めていた。三人を囲むように、ぐるりと。

じりじりと中心によってただその場に立ったまま　ノアは、文に囁いた。

「……勝つつもりか？」

「ん？……んー、どうだろう。勝てたら勝ちたいけど」

「戦力的に負けてはいるが。雑魚ならどうにかなるだろうな」

「へえ。　ヴァニツシュ、聞いた？」

「……うん、まあ……どうするの？それで」

あの匂いだ　どんどん近付いて来るのは、もうわかっている。黙って着流しの襟を正し、ノアは腕の組を解いた。

ぽかんとしているヴァニツシュの前で、片手が月にかざされた。

「『夢と現の邂逅　ボーダーライン』。前の仕返しをさせてもらっ」

「　んじゃ、俺も。ノア傷つけたんだから、許せないじゃん？」

「……俺も……」

「同族だぞ。それでも構わないなら、勝手にしな」

にぱつと文が笑ってそう言った。

召喚した逆刃の大鎌を肩にのせ、ノアは月を仰いだ。

綺麗な綺麗な蒼い月　ブルームーン

同じように手をかざし、文はすぐに手を降ろした。

「使いにくいなー……さすが俺の武器。『ヴァンパイア・ブラッド

「」

「……魔法？」

「うん、そう。伯母様に仕込まれたのが結構昔だし……覚えてるのかわかんないけど」

手中へと現れた、形を持たない“何か” それは紅く鈍く輝き、

ふよふよと文の手の中に収まっていた。

わかっているかのように二人同時に身構え、そして

刹那、二人の姿は消えていた。

呆然とはしているが、ヴァニッシュの眼にははつきりとその姿が見えていた。

周囲の全てを裂く、ヴァンパイアの姿が。

「ああー、狼だ。やっぱりこんなの……」

「さつさと 殺せ」

犬のような声をあげてはじかれていく狼の山。その死骸は卑しくも血なまぐさく、足元に血を流して横たわっていた。

悪鬼羅刹の如く 次々と鮮血が散った。

あの【狼】が現れるまでは。

「おー……先陣切ってたやつらは全滅か」

「もったいない……まあ、弱者に用はありません」

「 やつと来たのか、化け物ども」

顔に付いた血を袖で拭い、ノアは目の前を睨んだ。

まだまだ残っている、敵の勢力 そして、先日の化け物。それが群れをなし、三人を見ていた。

にっと笑み、ヴァンが前へと出た。

「 久しぶりだな？ヴァニッシュ。俺のこと覚えてるか？」

「……嫌だ……」

「邪険にすんなよ。同志なのに、かわいそうに」

「嫌だ……嫌だっ、来るな！何で今更来たんだよっ……！」

ひどく怯え、ヴァニツシュは何度も震えながら首を振った。

とっさに、文はヴァニツシュの手首をつかんだ。

「待て。知り合いか？」

「……兄さん……だよ……」

「はあ！？」

「驚いてるのか？俺がヴァニツシュの兄だということに」

そう言いながら、ヴァンは背負っていた大剣を振りあげた。

文を一瞬だけ見やり、ノアはヴァンと同時に駆け始めたクアトロを防いだ。

強い反動で、手が痺れるように痛んだ。

「ぐっ……！ 文！そいつを離すな！」

「けどっ……！」

「離してよ……逃げないとな……！」

あのヴァニツシュがここまで恐れるなんて

文に、月光の影が掛った。

「残念 逃がすかよ」

「なっ……」

いつの間にか目の前には狼の頭領が
風を切り、大剣が文に襲いかかった。

ギンッ……！！

「ぐあっ……！！」

「おわ……なるほど、硬質化の魔術か。自分の血を使うなんて、
【ヴァンパイア】も落ちたな」

「うるっせえよ、おっさん……俺は【ヴァンパイア】じゃねえ！」

吸血鬼】だ!!」

腕で受けた大剣をはじ返し、文は傷口を押さえた。

あの紅い塊は、空中から漂い降りてきてその傷口を包んだ。

「……お前、らしくないな」

「だからなんだ。そんなもの、関係ねえだろ」

「はっ。血は偉大だ。お前の身体にだって、化け物の血が流れてる。違うか？」

「……だったら、嗤えばいいよ。俺なんて、それを裏切った馬鹿だから」

血の衝動に負けたのだ。そんなこと、今更言うまでもない。血を舐め、文は腕にまとわりついたそれを引き剥がした。

「……ヴァニツシュ」

「……言わないでよ……言いたいことわかってるから……っ」

「……守るよ」

にこつと、いつも通りに。あの笑みは崩さず、文はヴァンを睨んだ。

キーンツと、ノアがクアトロをはじめた。

「……さあ 殺るぞ」

「生きていられるなんて 思うなよ？」

「……ばかばかしい。さっさと回収して帰りますよ」
バサリと、カルヴオは本を開いた。

殺伐とした戦場をただ 明るく静かに月は眺めていた。

アイシテル

さて どうするか。

敵に有利なこの状況。数では圧倒的にこちらが不利だ。勝てるなんて保証もない。

ヴァニッシュを渡すわけにはいかない。この身に変えても守りきる。

ノアはクアトロを抑えるのに必死だろう。あのもう一人をどうにか止めないといけない。

しかし こっちにも、でかい狼がいる。どうしようもなく、ピンチに変わりなし。

逃げたいのにつて 体が叫ぶ

「ヴァニッシュ、下がってる。絶対に捕まるなよ」

「……無理」

「は？ うん、それは無理」

「ヴァンは 怖いんだ 昔から、ずっとずっと」

ああ、もう。可愛い なんて、そんなこと思っている場合ではないのに。ついつい体がそう思っている。

ヴァニッシュの手を掴み、文はヴァンに言った。

「兄弟に、何で怯えられるようなことしてるんだよ」

「お前にわかる話ではない。だから、言うつもりはねえよ」

「はあ？ 馬鹿にすんな、今の今まで放っていたくせに……！」

「責められるのは、俺ではない。そいつの行いだ」

ギンツ 再び、大剣が文の腕で止められた。

“覚醒”したクアトロを相手にするノアは、逆刃でクアトロをはじき返した。

「っ、文っ！」

「 ダイジョーブ。守るから」

「 そんなことは当然だ！っ

能力くらい、発動させてみる

！」

化け物じみた力のクアトロ一人を相手にしながら、ノアは文に叫んだ。

刃をはじき返し、文はヴァニッシュの腕をつかんだまま、ヴァンと距離を取った。

「 無理だよ。体が……動かない……」

「 っ……ああ、馬鹿野郎……っ！」

「 ……能力？」

不思議そうに、ヴァンがちろりとカルヴォを見やった。

周りの狼を退かせていたカルヴォは、本を閉じて静かに言葉を紡いだ。

「 さあ、知りません。【吸血鬼】は、私の興味の対象外だ」

「 そうかい。で 殺しちまっつていいのか」

「 勝手になさい。私の目標は、あくまで その『化け物』だ」

ゾクリとするような低い声。狂気を孕んだその瞳は、じつとヴァニッシュを見つめていた。

ふよふよと漂う浮遊物をボールのように手の中で跳ねさせ、文はヴァンの隙を窺っていた。

そして 刹那。

「 っ はあああああああ！！」

「 へえ 攻めてくるのか……受けて立つ！」

刃に対し、武器は武器とは言えないようなコレのみ。それでも文は、まっすぐに駆けた。

髪をなびかせて剣を構え、ヴァンは楽しそうに笑った。

地面をジグザグに駆けつつ、文は浮遊物を手放した。

文に従って忠実に地面に何かを描くそれは ヴァンと文を囲む

巨大な円を作り上げた。

古い古い　魔方阵を。

一瞬にしてそれを感じし、カルヴオは叫んだ。

「っ！ヴァン、避けなさい！」

「は
」

「ヴァンパイア・ブラッド」

剣が振り下ろされる前に、文は浮遊物に手を触れそう呟いた。

闇の中で明々と輝きだした魔方阵は、カーテンのように別の『闇』をその場に出現させた。

避ける間もなく、闇は三人を包みこんだ。

「っ　文っ　！」

「クアトロ、殺つておしまいなさい！」

文の方を懸念したもののくだされた手を見過ごさず、ノアはすぐに回避行動をとった。

ほんの少しノアの腕をかすめ、クアトロはニッと笑んだ。

「っ……言葉さえなくしたか、化け物……っ」

「私の傑作ですよ。哀れな哀れな、失敗作　」

「失敗作を何故大切に扱う？化け物どうし、馴れあっているのか」

「私は……自分の愛した人を　この手にかけてたんですよ。愛し続けた、一人の優しい狼人を　」

自虐的に笑み、カルヴオは本を開いた。

ぐつと体勢を低く構え、ノアはクアトロを睨んだ。

「……私は、あなたと同じですよ。ノア・ジョーカー」

「同じ　？馬鹿を言うな、化け物」

「ふ……はははっ……！同じ化け物のくせに！何を偉ぶって

お前たち【吸血鬼】は！！」

カルヴオの感情の高ぶりとともに、本から文字が螺旋を描いて溢れだした。

背後では、闇が球体と化して三人を包んだままだった。その姿は

おろか、音さえしなかった。

回る回る文字　それは、風のようにクアトロを包み込んだ。

「私は……あなたが憎いです。だから、殺したい」

「……初めてあったようなやつに、何を言う」

「素性を知っていますからね　一族を裏切って愛を貫いたあなたを。私には叶わなかった、それを成し遂げたあなたを　！！」

嫉妬。妬ましい妬ましい　妬ましい　！

眉をひそめ、ノアは鎌の柄を強く握った。

「妬み　？」

「“第二覚醒”」

文字が脱皮をするかのように剥がれ落ち、やがてクアトロの姿を見せ始めた。

全身を覆う銀色の毛並み。目は爛々と蒼く輝き、服の切れ端がところどころに残っていた。表情だけは、まだ人の姿を保っていたが、牙をむいて笑うその狼に、ノアはひどい嫌悪感を覚えていた。その姿形が気色悪いと言うだけでなく

「　堕ちたな」

「何とでもほざきなさい。　殺す」

グウン　と、空気が重力に震えた。

駆けてくる、化け物と呼ぶにふさわしい銀狼。それは段々と加速し、雑草を散らしてノアに強く体当たりを繰り返した。

それを避けることなく鎌で止め、ノアは苦しそうに言葉を吐いた。
「っ……うちの馬鹿な研究員と同じだ　苦しむ癖に　やめよう
としない」

「があああああああああああ！！！！」

痛烈にして鮮烈。その慟哭に似た咆哮は、ノアの耳をつんざいた。耐えるのにも限界が生じる　前とは似ても似つかないほどの馬鹿力に、ノアは知らず知らず後ずさっていた。

にやりと不敵に、それでも苦しそうに笑むクアトロは静かに空を仰いだ。

不意に、ノアの背に大量の液体が散った。

生ぬるい、気持ち悪くまとわりつくその液体　闇の中でも、血なのだと、すぐに分かった。

クアトロの顔にも散ったそれを見て、ノアは無言でその顔を斬りつけた。

「があああああああつ………！？」

「っ……文っ………！！」

嫌だ　嫌だ嫌だ！俺を一人にするな！もう二度と、俺を離すなっ
！！！！

振り向いたその先に立っていたシルエット。

溢れだす血液に、鼓動が速くなっていた。

ドシャリと地面に落ちた　紅に染まった愛しい人

「　手こずらせやがって。腕が折れちまった……」

「……は……っ………」

びくびくと痙攣しているようだった。つまり、まだ生きている。髪も肌も、何もかもを真っ赤に　どうなっているかは知らないが、肉塊と化したような姿は、見るに耐えられないようなものだった。

左腕をだらりと下げ、ヴァンは血に濡れたヴァニッシュを軽々と担ぎあげた。

「……意識がとんでるのか。こいつも……馬鹿だな」

「　文」

「お前、どうする？俺たちに攻撃を続けるのか？」

ヴァンは、そう言って文の腹部を強く蹴った。

まだ血を吐き、文はぐったりと動かなくなっていた。

顔を斬られ動けなくなっているクアトロを見やり、ノアは舌打った。

「……そいつを連れていけ。もともと、そっちの者だろう」

「話の分かるやつでよかった。これで、何も心配事はなくなった」

ふんと鼻で嗤い、ヴァンはマントを翻した。

クアトロを気遣いつつ、カルヴォもそのあとに続いた。

宵闇も終わる世界をただ 狼は去っていった。紅には目もくれず。

「文」

再度、静かに呼びかけた。

「文」

返事がない。

「文」

どうして？

「文」

動かない心臓。

そっと抱きあげても、何も言葉はなかった。

ムーンエッジ

*

*

*

苦しい。

闇の中、刃に身を引き裂かれた。

それそのものの痛みよりも、後悔だけが痛みを残した。

狂ってしまったら　心をなくしてしまうのさえも厭わなければ。
そうしたら、きつとこんなにも苦しくなかっただろう。

「それは　違うねえ」

ノア？

「いいや　私は、ノアではないよ」

誰　　何で、俺に話しかけんの？

「さあ、何故だろうね？私に聞いちゃいけない。私はあくまで
君を見ているだけだから」

何言ってるの？俺に、何が言いたいわけ？

「いや、別に　君を見ていると、哀れで面白いんだよ。誰にも必
要とされないのに、ただただ空回りして逃げている君が　バカら
しくて好きだよ」

ふわりと 浮くような感覚が、自分を覚醒させた。

「目が覚めたかい？アヤ」

「……誰……？」

綺麗なヒト 真っ白な長い髪、白い肌。目は、澄んだ綺麗な紅色をしていた。

ペテン師のようなペイントが、その右頬にあった。蒼く、涙のような形で。

燕尾服を身にまとったその男は、艶っぽくにこりと笑んだ。

「私？さあ……誰だろうね？」

「……俺を知ってんの？」

「知ってるよ。何もかもを 君の全ては」

「俺の全て……？何で……？」

「愛しているからね」

笑んでそういう、綺麗なそのヒト。どことなくノアに似ていて、不覚にも安心していた。

何もない、空間なのだ 自分はきつと今、どこか別のところにいる。直感的に、そう感じた。

くるりくるりと、その男は文の目の前で回って見せた。

果てのない 真っ白な空間。それに、柔らかな桃色の雲のような霧のようなものが漂っていた。上下左右、何も分らない。

「愛している……？どうして……」

「ずっと、一緒にいたじゃないか。私のことを君は知らなくても、私はよく知っている。ずっとずっと、楽しく見させてもらっていた。ノアのこと、君のこと、あの、狼のこと、全て」

「……は……」

「愛してるって、言ってるだろう？いつまでもいつまでも、私はお前たちを見ているよ」

優しく、諭すように。この人が誰なのかわからない。

不意に、空間がブレた。

「何やってんの。その吸血鬼は、私の獲物だよ」

「んー？……ああ、何言ってるの？勝手に人の“領域”に入ってたくせに、今更そんなこと言う？」

増えた　今度は、かなり派手な格好をしている。

同じようなタキシードなのだが、まったく違っていた。確かにこちらもペテン師のような風貌ではあるが、もっと　狂気のような危険性を孕んでいた。

愛想良くにつと笑い、現れた男は尾を揺らした。

「君、文だね？君の噂は聞いているよ」

「噂……？」

「そう。　この男と同類。けど、君の方が面白い」

「　あんたも、誰」

頭がぼんやりする。思考がうまく働いてくれない。

頭頂部に生えている、ネコの耳　髪は鮮やかなライトグリーン

翠玉に近い色をしていたが　で、尾も同じ色をしていた。

「俺は　杯猫^{さかすきびょう}。俗に言われる、『ハイネコ』だよ」

「ハイネコ……？何それ……」

「『存在しない存在』だよ。まあ、知ることはないさ。それよりも今は」

ヒュツと　猫は男を持っていた杖で指した。

にまりと笑み、男は言った。

「そう怖い顔するな。私は悪くない」

「だから困るんだよ。君は死んでも生きてても邪魔。強すぎる能力は邪魔にしかないよ」

「あんたがそれを言う？」

ああ、ノアがいてくれたら　そうすれば、ここまで解釈に困ら

ないだろうに。

くすくすと笑いながら、猫は男に言った。

「名前くらい教えてあげなよ。俺と友達だろう？」

「後者は関係ないな。けど　名前くらいなら」

「……え」

静かに笑んだまま、男は文の手をそつと取った。

その刹那、ひどい悪寒が文の背筋を抜けた。

「　月の刃　ムーンエッジ　」　わかるかい？」

ああ　悪寒の正体はコレなのか

にこにこ笑む男。それが、あの城に住んでいた『最狂』の【吸血鬼】

呆然としている文を見て、ムーンエッジはよろしいとも言つように頷いた。

「　ずっと君を見ていたという意味、わかったかい？ノアのこと、狼のこともずっとずっと　」

「……まあ、あんたじゃなけりや変質者だね」

「黙れ。私は長い間、この変異の吸血鬼が来るのを待っていた。【和製吸血鬼】とは、そもそも東国の【吸血鬼】との混血だ。あつてはいけないその組み合わせが、この化け物を生み出した」

「化け物、ね。間違っちゃいけないけど　むしろ、俺のいる『世界』に来てほしいくらい。アヤがいればきつと、あつちも明るくなる」

『世界』　『化け物』　何のことなのか、もうさっぱりわからない。思考が働かないのだから、仕方ないということにしてほしい。

猫もかまわず、不意にムーンエッジは文の手を強く引き、彼を抱きしめた。

「っ！？」

「あー、何……ノアって恐ろしいのに恨まれるよ」

「知るか。ノアは恐ろしいが、文は可愛いから。それに、あいつでは役不足だ」

「役不足……？」

「そう　君だからこそ、叶うことがあるんだよ」

甘く囁く言葉　まるで毒のように、自分の全てを蝕んだ。
文の耳元に口を寄せ、含めるようにムーンエッジは言った。

「私の　能力を殺して　」

殺して　そればかりが、ただただ頭の中で反響した。
髪を撫でる手が、妙に優しくさらに思考を鈍らせた。
ただ静かに　ムーンエッジは笑っていた。

ムーンエッジ（後書き）

猫の髪の色を桃色から緑色にしました。
ミスしてたの気付かなくてすみません。

醒めた夢

「能力　？」

殺す　『能力』という概念を殺すなんて、そんなことありえない。

しばらくその光景を見ていた猫だったが、やがて呆れたように溜息を吐いた。

「うちの馬鹿どもと同じように見えるから、やめてくれる？」

「……ああ、お前のところにも狼がいたな。しかし、【吸血鬼】とは違う」

「知ってるよ。……で？いつになったらここから出て行ってくれる？そのアヤつての、もうこここの空気に耐えられてないよ。殺すどころか　廃人になるよ」

「わかってている。しかし　私の姿が維持できるとすれば、ここくらいしかないだろう。城にあるのは、ただの文字だ。私であって私でない」

声が頭の中で反響する。視界には姿は映るが、他には何もないように見える。

チツと舌打ち、ムーンエッジは文に強く言った。

「聞こえるか、文。君はあの狼と一緒に居たいんだろう」

「ヴァニッシュ……？」

「そう、あの狼だ。平穩を願っても、そんなものは存在しない。だからこそ、君は全てを敵に回して戦わなくてはならない」

「戦う……」

オウム返しに答えるしかなかった。神経が全て麻痺しているような　体の感覚がもうない。

耳をぴくぴくと動かし、猫は言った。

「早く。俺、今日はお茶会の約束あるんだよねー……可愛い妹とか」

「うるさいな、シスコン。　ムードが台無しだ」

「へえ、そんなものあったんだ？食べられないものに興味はない」
そう言いながら、猫はそつと文の唇を指先でなぞった。

ぱちりと、文は瞬きをして猫を見ていた。

「　　さあ、出て行くんだ」

「　……あんたは……」

「俺の全てを知ろうとしちゃいけない。でないと　俺と同じにな
ってしまうよ」

「勝手に話を進めるな。私の用が終わっていない」

「そうなの？要するに、ノアの持っている本を燃やせばいいんでし
ようが。そんな簡単な説明もできないのかい？」

「っ……黙れ。あれには理由がある。何もなしに納得なんてできる
はずもない。わかつているのか、ハイネコ」

「わかつているよ。けど　アヤなら理解する。もうわかつている
だろう？」

にいつと、意地悪く猫が微笑んでいた。

答え　そう、わかつている。わかつているのだ。

俺は、本を燃やさなければいけない。

なぜなら、そこにムーンエッジの全てが存在しているから。

壊さなければいけない　何もかもを二人のために

少しさみしそうな表情をしたものの、ムーンエッジはわかったと
でも言うように頷いた。

「　……では、これでお別れだ。いいね」

「　……お別れ？」

「そつだよ。私は、君に壊されるのを待っている。それがいつにな
ってもかまわない。だから、君の手で壊すんだ」

「了解」

にこりと、文は返事とともに笑んだ。

パチンと、何かの弾ける音が文の耳に木霊した。

「それじゃ 帰って。今すぐに」

「っ……！」

淡かったその空間に、突如として光が強く差し込んだ。

そしてそれは文を攫うように、ムーンエッジの手から彼を離して
いた。

体を浸食する光の束。それはまるで、文を殺そうとしているかの
ように強い光だった。

さらに薄れていく意識の中、文ははっきりと目に映るものを見た。

こちらを見て笑っている、ノアの姿を。

*

*

*

途方もなく 眩しい。

手を伸ばせば届く距離に、あのヒトは笑っていた。
伸ばしたら、きっと 届いたのであろう。

「……………文」

ああ 自分を誰かが呼んでいる 綺麗な、あの声で。

目覚めたいのに、体が言うことを聞かない。

それでも起きなければ 自分を待っていてくれるのだから。

「ノア……………」

「……………起きたか？」

ひっそりと、紡がれる声。それが空間に反響し、淡い色を付けた。
覚醒はしない。ただぼんやりと 目の前に映る世界を見つめた。
体中が痛む。ずきずきと、疼くように。

「ノア……………居るんだろ……………」

「ずっと傍に　いるよ」

「そう……よかった……」

そうだ　俺は、負けたんだ

体中を砕かれて、壊されて　そして、ヴァニッシュを失った。

悔しいのに、言葉が出ない。何も言う資格はない。

包帯だらけの半身を起し、文はノアの方を向いた。

「　血が足りない」

「ああ、だろうな　どうすればいい？何か取ってこようか」

「……ノアが欲しい」

答えはいらない。言ったのだから、有言実行だ。

いつかのように　貪って貪って、ノアを失くしてしまえばいい

ノアを半ば強引に抱き寄せ、文は言った。

「　貰っていいんだろ。そんな目をしてる。泣き腫らした　紅い目だ」

「……てめエごときに、泣くかよ」

「泣いた、だろ。血と一緒に、舐めてやるよ」

ああ　しょっぱい　優しい【吸血鬼】の涙の味だ。

ノアの眼の淵を舐め、文は憂い気のある眼差しでその眼を見つめた。

「……責めないのか」

「どうして　？」

「全ての責任は……俺の……」

「　俺のせいだ」

互いに傷をつけあって、それを舐め合って　意味のない、覚醒のしない自分の裏側だ。

静かにノアを見つめ続け、文は躊躇うことなく唇を落とした。

流れ込む血液、崇高なる愛情　手の中で跳ねる鼓動に、脈は零に近い。

好きだよ　　大好きなんだ　　けど、そんなお前が怖いよ

「……っは……」

「……へたくそ」

わかってるくせに　　痛いことも、嫌いじゃない癖に
舌を絡め、血を飲み干して。貪って貪って貪って、呼吸なんても
とよりしていやしないから

何度も錆の味のするキスを繰り返し、文は静かに微笑んだ。

「　　大っ嫌い」

「……気が合うな。俺もそうだ」

「大っ嫌い、大っ嫌い　　嫌いだよ、嫌い嫌い嫌い」

「……そう……だな……」

ほら　　言つてよ。俺が「嫌い」だつて言ってるんだから、早く。
ほんの少し表情を曇らせて、ノアは息を吐いた。

「……それ以上、責めないでくれ」

「どうして　　俺は、ノアが大っ嫌いなんだよ　　」

「……好きだと言わないのは、俺が悪いのか」

「　　負けたのが悔しいから　　子供みたいなんだけどさ……悲しくて仕方がないんだよ」

答えにならない答え。ノアが何を求めているのかわからない。だけど、自分の言いたいことは先に言ってしまったと言えなくなる。

文の頬に唇を寄せ、ノアは言った。

「　　永遠に、ためエの傍にいる。嫌われようとも、何があるとも　　」

「……うざいよ」

「だから、何だ。俺が不満でも、離れる気はない」

「離れてよ。ずっとずっと　　遠くに」

「断る。愛しているんだ　　離れたく、ない」

きつぱりと、馬鹿らしい。そんなこと言われても、心を動かそう

なんて

傍にいて

俺を見捨てないでー

愛して

「……………大っ嫌い」

「大好きだ。てめエのためなら 死ぬ覚悟もできている。とつくの昔に」

「……………大っ嫌いだ。ノアのこと、心底嫌い」

「構わない。永遠に、居続けてやる」

好き、好き、大好き 口に出す言葉をわかっているから、ノアは微笑む。

固く唇を噛み、文はノアの胸に顔を埋めた。

好きだよ 通じてる？

このコエが、聞こえてる？

いつでも俺は、ノアを愛してるんだ

キスして 愛して 見捨てないで

もっともっと、近くにいて

優しく文の髪を撫でるノアは、文の何が聞こえたわけでもないのに静かに微笑んでいた。

「好きだよ　ずっと、ずっと」

返事なんて　そんなの、必要ないよ

狂ってしまうほどに　ノアが想うほどに

俺は壊れてるんだよ

あなたのために

「で てめエは、何を見たんだ？」

「んー……何か、綺麗なこと……よく覚えてないけど」

血も止まり、ようやく話せるような状態になってきた。さっきまでの自分はどうかしていたらしい。

にこりともせず、ノアは腕を組んだ。

「……どれほど、綺麗だった？てめエが戻ってこなくなるくらいにか？」

「それはない。こうして、ノアに会いに戻ってきた」

「ほざけ。俺なんかのために、戻ってくるか」

「文句言わない。俺 ノアのこと、嫌いなんだぜ？」

刹那として無言に。ノアは、案外こういうところがわかりやすい。にはっと笑んで、文はノアの唇をぺろりと舐めた。

「……ダイジョーブ。俺は、ノアを愛してるよ」

「っ……もういい、馬鹿らしいっ……言われずとも、俺は」

「……そういうことも、好きだよ。傍にいてくれて、ありがと」

「馬鹿にしてるのが、てめエ……」

純粹に好きなのに。どうして怒るんだ。

ずっとその場から立ち上がり、ノアは不意に文に尋ねた。

「で？あの狼、どうするつもりだ」

「ヴァニツシュ そんなの、決まってんじゃん」

守れなかった。それも、二度も

誰かが囁く、頭の中に。それがひどくざわついて、ぐるぐると回っている。

頭が痛い。いつもよりも、何か違う。意味とわけのわからない痛さなのだ。

そうかと軽く相槌を打ち、ノアは窓の外を眺めた。

「綺麗な朝だな」

「何それ……らしくないと言わないでよ」

「らしくないも何も、事実だ。そんなこと言い始めたら、てめエだつてらしくない」

「は？俺？」

何かしでかしただろうか。さっきのことは過ちだ。そんなことわかつていくくせに。

部屋の本棚を片っ端から調べ始め、ノアは聞こえるくらいの音量で舌打った。

「俺の本だと……？ふざけやがって、何を考えてやがる」

「は……？ノア、どうしたんだよ」

「てめエの能力 血を吸った相手の情報を読む能力は、別にてめエだけのものじゃねえ。俺だって、少しはわかるんだ」

「へえ……って、はあ！？」

何のこともなくそう言い、ノアは何冊か本を抜き取った。

慌ててノアの傍へと行き、文は尋ねた。

「何で……打算か！？」

「そう、打算だ。その為に血を飲ませてやった」

「何だよそれ……」

「少ししかわからない。だから、あまり深いことまではわからないが……」

静かに、ノアは文を見やった。

ドクリと、文の心臓が跳ねる。

「少しでも、てめエの力になりたいんだ」

「っ……だああああっ！卑怯！！んなこと言っな！」

こんなにも甘く ああ、俺の馬鹿野郎。

一緒に本を探し始め、文は真っ赤に染まった顔をぐしぐしと手の甲で擦った。

*

*

*

コツ……コツ……。

冷たく暗い鉄の世界。その外を、足音を響かせながら誰かがやってくる。

ガシャンと音を立て、目の前の長いいくつもの鉄塊の間に誰かが顔をのぞかせた。

「よオ。心の準備はできてるか？」

「……何……馬鹿じゃないの」

「ふん。馬鹿とは聞きがたいな」

ニツと笑んだ、その男。自分を見つめては、その醜さに嗤っている。

檻の中で繋がれたヴァニツシュをヴァンが嗤っていた。楽しそうに、嘲笑って。

傷だらけの身体を引きずり、ヴァニツシュは言葉を吐いた。

「……あんたなんて、死ねばいい。さんざん俺を放っておいたくせに……」

「力に気がつかなかった。最近になってようやく、お前が必要になったんだ」

「下衆だ。兄貴は昔っから……！」

「兄弟喧嘩は嫌いだ。なあ？」

檻の間から手を伸ばし、ヴァンはヴァニツシュの頬を撫でた。

噛みつくように首を強く降ってそれを拒否し、ヴァニツシュは叫んだ。

「俺を化け物にするつもりなんだろ！？あのクアトロって奴みたいにつ……！」

「何を言っている？」

「その通りだろ！？俺を改造するつもりで」

「違うな。何を言っているんだ、お前は」

茶化されているのかと思えば、そうではなかった。

至極真剣に、ヴァンはヴァニツシュに言った。

「お前　本当に記憶が抜けてるんだな」

「はあ！？何言っただよ！」

光も差し込まない暗い牢屋。眼の前には血を分けた兄がいるが、それはもう大嫌いな存在と化している。

腕を組んで火の点いていない煙草をくわえ、ヴァンは再び嗤った。

「お前は 元から『化け物』だろうが」

化け物 化け物 化け物 ！？

わなわなと震えるヴァニッシュに、ヴァンは追い打ちをかけるかのように言った。

「俺よりも化け物じみてやがる。三日月の日にしか能力を発揮できないのは難点だが」

「……ふざけんなよ……あんたなんかと一緒にすんな！」

「【魔女】の力を借りて能力を抑え込んだり、月の日は雲でそれを隠したり 流石に月そのものを消し去ることはできないらしいが、それが今までお前が狂わなかった理由だ」

「っ……化け物なんかじゃ……ない！！」

嫌だ 嫌だ もう思い出したくない

古い記憶の中でみんなが嗤う。自分を嗤って、嗤って それがやまない。

怖い 好きな人も遠ざかる

俺を見ないで

文 ！！

「……明後日になれば、お前は“覚醒”する。それまで、記憶を思い出しておけ」

「は」

「もう壊れたか？脆弱者め」

憎しみをこめて言い放ち、ヴァンはマントを翻してその場から去った。

ぐったりとうなだれて、ヴァニツシュは膝を抱えた。
大切な、大好きなヒト
それに「来ないで」と願いながら。

訪問者は侵入者 ？

昔から ずっと化け物なんだ。

馬鹿にされて、蔑まれて。それはすべて、この身体に中に流れる濁った血のせいだ。

どんなに愛しても、近づいてみても。

肉親ですら、自分を避けた。

それでも殺されなかったのは、兄さんがいたからだろう。
誰からかばってくれて、必死で自分を守ってくれた。

やっと、思い出したんだ。

自分を捨てたのは、兄さんだ。あの街に置き去りにしたのは、その愛情の裏返しだ。

それしか方法がなかった でなければ今頃俺は身内に殺されていただろう。

愛してはいた けれど、納得なんて。

もう、何時間過ぎたのか。

逃げることは不可能 伝える手段もない。もしかしたら、全然進んでいないかもしれない。

どうすればいい

どうすれば

*

*

*

ガッタンバタンと音を立て、本が崩れ埃が舞う。

日が落ち それでもまだ、見つけれられない。どれほど探しても、

お目当ての物は手に入らない。

どうして 欲しいもののなに。

「おい。本当に本なんだろうな」

「え ? 何、今更」

「真実を知るのはてめエだけだ。さっさと全部吐け」

「吐けって……わかってるのは本ってことくらい。あと、持ってるのはノア」

「俺がいつも持っている本は大したことが書かれていない。大体てめエ、誰に会ったんだ」

「……ノア」

そうだ 俺は、夢の中でノアによく似たヒトを見た とても綺麗な、美しいヒト

怪訝そうに小首を傾げ、ノアは文の胸ぐらをつかんだ。

「……俺と会った、だと？」

「そ、そう……ちょ、苦しい……」

「俺に似たやつだろう、それは。他に特徴は」

「涙みたいなのがほっぺたあつて、礼服着てて……あと、喋り方が変」

「 化け物じゃないか、本物の……」

突然表情を暗くし、ノアは文の首をさらに絞め上げた。
ぐえっと、文の喉から声が漏れた。

「あの、離してくらさい……」

「……そいつ、てめエにその本を頼んだんだな？」

「そ、そう。それが何？」

「 そいつか よし、さっさと探せ」

「へ……？」

「そいつの思うどおりに、ぶっ壊してやればいい。てめエが壊れても、この俺が止めてやる」

「……ノア、誰かわかったのか？」

「一応は。何となくだが」

確信めいてそう言うのと、ノアはようやく文を離した。

ドスンと床に落ちると、文はゲホゲホと咳込んだ。

「な、何となくって……ホントかよ」

「俺がためエに嘘なんて吐くか？信じる」

「信じてるけど……訳わかんねえ……」

「問題は、そこへ行くまでの時間稼ぎだな。そろそろ本気でヤバイ」
一方的にすべてを把握しているようで、ノアは文に語って聞かせていた。

一人クエスチオンマークを顔に浮かべ、文はノアに尋ねようとした。

がっしやああああん！！

「っ！？え、何！？」

「こーんにーちはあ。って、もう昼だけどね」

「……はあ。何の用だ」

ひらりとスカートをなびかせ、黒の魔女が窓をぶち割って侵入してきた。

呆れたように、ノアが窓ガラスを手で拾い集め始めた。

「毎度毎度面倒な……わかってるのか、ためエ」

「あら、レディの始末は愚鈍な男がつけるものよ？私って罪な女よねえ」

「……ああ、そうですか」

ニコニコと微笑む懐かしくも会いたくない【魔女】、マリア。それが仁王立ちで二人を見下ろしていた。

黒い影が、ぽかんと口を開けたままの文に近づいた。

「……B君とベタベタベタ……見てられないわ。こっちまで赤面しちゃっ」

「ふえ……？何それ、そんなにベタベタしてる感じはないけど……」
「十分してるわよ。あの子ともベタついて……どれだけ気が多いの

よ。というか、いい加減色々気付きなさい」

「もういい、それくらいにしてやれ。で、何の用だ」

ガラスの破片をゴミ箱に収め、ノアはマリアを睨んだ。

ふんと鼻を鳴らし、マリアはノアに向けて溜息を吐いた。

「何の用ですって？理解力に欠けてるわね、珍しく」

「……暇なのか、としか思い浮かばない。今は急いでいて、相手なんかできないぞ」

「子供扱いしないで頂戴。それに、知ってるわよ。あの狼君、連れ戻されたんですって？」

「……だから、どうした」

剣呑な空気を醸し出し、ノアはマリアを睨んだ。

にこりと笑み、マリアは静かに窓の外を指さした。

「向こうの谷の奥、そこが住処よ。行くんでしよう？」

「……どうして教えるんだ。何が狙いだ？」

「別に。本音を言うなら、リリスに悲しまれるのは嫌なのよ。あの子は私の親友だから」

「それ以外の理由は」

「ないわ。もしも理由があるのなら、あなた方への愛情かしら」

嘘臭くのたまひ、マリアはふふつと声をあげて笑っていた。

と、不意に文ががしつとマリアの胸に抱きついた。

「ありがとうつ、伯母様！行って、助けてくるから！」

「……可愛いわねえ、犬みたい。B君よりも愛想がいいわ」

「俺と比べるな。で、文。策はあるんだろうな」

「……そんなのあるとも思ってたんの？」

策なんてそんなもの。必要なのだろうか。

呆れたように、ノアは足元に散らばっている本を拾い上げた。

「……では、本を見つけ次第行くぞ。わかってるな」

「うん、了解。伯母様は？」

「行かないわよ。他にすることがあるの」

「そうか」

目で会話を終え、ノアは本を片付け始めた。
明るく輝く陽を仰ぎ、マリアは剣呑に唇を噛んだ。

あと二日

思い出

* * *

時間が足りない ああ、足りない足りない。これ以上引き延ばすことができなくて、ジレンマに苛まれていく
苦しい、苦しい。だから何かを求めるのだが、きっと叶うことはない。

もう、何時間たったのか 何度も何度も頭の中を低回するその謎が、今はただただ苦しいだけ。

ぐるぐるぐるぐる もう、何も考えたくない。

「吐き気がする」

壁を蹴ってみても、鈍い音が戻ってくるだけ。他には何も無い。

あと一日

* * *

ガッゴンドッゴン。バサバサドサドサ。

上から右から左から。次々と本の飛び交う中に、二人はため息を吐いた。

見つからない 目当ての本は、この城の中にある本の中から探し出すにも百万冊分の一の確立なのだ。いちいちばらめくっている時間はないし、しかしそうしないと求める物へのヒントが少なすぎる。

次々と本を漁って本棚をひっくり返す文を眺めて、マリアは口を開いた。

「……昨日あれだけ探してもダメだったのに、見つかるかしら」

「うるっさいな！伯母様は黙って見てればいいでしょう！」

「はいはい、わかってるわよ。B君まで真剣になっちゃって……ああ、嫌なこと」

暇そうにのたまい、マリアは二人を交互に見やった。

どれほど探しても見つからない　本当にここにあるのかと、心配になるほど。

ふわぁとあくびを一つし、マリアは足元に落ちていた本を一冊拾い上げた。

「　本当は違うんじゃないかしら」

「は……？」

「ここにはないんじゃないかってこと。わかる？」

「……何でそんなこと……！」

せっかく探してたのに、やる気を削ぐようなことを今。そんなこと、何を考えて言っているのかわからない。

にこりともせず、マリアはジュースを飲みながら立ちあがった。
「だって、そうじゃないかしら？これだけ探してもないんだもの、ありはしないわ」

「　その根拠は」

先に口を開いたのはノアだった。

食いついたか、と確信めいて、マリアは言った。

「あなたが持ってきた本じゃないかしら？これだけ探しても見つからない、つまり、A君の夢の中の人物はあなた達を昔から知っている　この解釈はおかしいかしら」

「……何が言いたいのかは分かるが。その解釈の真意は？」

「賢いと助かるわ。つまりね　」

箒を手に取り、マリアは再びとんがり帽子をかぶった。

カーテンをはためかせ、風が強く吹き抜けた。

「　近くにあるわよ。すぐ近くに、きっと」

「……言われるまでもない」

「あら、そうかしら？　ん、もう時間だから行くわね。『地味に』」

あなた達の後援をしてあげるわ」

「ああ、了解した。いいな、文」

そこに、文はもういなかった。

吹き出して声をあげて笑い始め、マリアはノアに言った。

「行つてらっしゃいな、あなたも。あの子が心配でしょう？」

「……帰ってくるまでに失せとけ」

そう言い残し、ノアは急いで文を追った。

窓からひらりと外に出、マリアは簾に座った。きつちりと服の乱れも直して。

そうして 遠方より吹いてきた風と共に、その身をそれと同化させた。

*

階段の上、まさかの自室

「文！てめエっ……！」

「ぐえっ!？」

背後から首を絞められ、文は濁った声をあげた。

短時間でえらく荒らされた部屋を見て、ノアは呆れたように息を吐いた。

「……仕方がない。手伝うが、いきなり消えやがって……」

「ご、ごめん……けど、思い当たるのつてもうアレしかない気がする……」

「……あの本は、本とは言えんぞ」

「そう思うってことは、ノアも思い当たるんじゃないのか？」

古い古い昔のことだ。あんなものは言われるまで忘れていた。少々悲しそうな眼をして、文は天井を仰いだ。

木目を睨み、ノアは音が聞こえる程度に舌打った。

ガンツという音とともに、天井に穴が空いた。

「……穴開けるまでする必要あるのか？」

「ある。　これが」

ずると、低く何かを引きずる音。ビニールの袋のようだが、そんなものはない。

音を立てて床に落ちたのは、十冊近い本の束であった。

色あせたその一つ一つを愛おしそうに眺めて、文は言った。

「全部、燃やそつか。さつさとやつちやおう」

「……いいのか？」

「ダメだと思ってるのか。こんなもん、気付かなかったのがおかしい」

あせた記憶だ。記憶をわざわざ掘り返すなんて、夢の中の人はいかにひどいことをしてくれる。

一冊一冊の中に書いてあるのは、大したことじゃない。何冊もあるが、全てまとめても数年分にしかない。

『日記』なのだ。幼いころに二人で書き連ねた、記憶の断片

しかし、文はふとあることに気がついた。

「……うん？」

「おい、どうかしたか。焼くんだろっ」

「……いや、何でもないよ」

埃が全くと言ってもいいほどに積っていない。頁も、ところどころは破れているがそこまでひどくない。

ノアが持っている本。

つまり、あの猫が行っていた通りにこれがノアの持っていた本なら。

ずっと　俺に隠れて読んでいたのか。思い出にふけるために？

「あー……ノアらしいよな」

独り言をつぶやき、文は先に行ってしまったノアを追った。本を両腕で嬉しそうに抱えて。

思い出？

思い出の数だけ辛い数。思い出の数だけ嬉しさの数。

どんなに書いても書いても、止まることのなかった欲望。楽しかった残像のような思い出。

思い出はそこに留めてしまえば穢れない。それ以上に美しく、頭の中で美化されていくのだ。

『春。ノアはいつも遊んでくれる。忙しいのにつて、字を教えてくれた。今日は三つ覚えたよ』

『春。今日は絵本を買ってもらった。面白いけど、ノアに読んでも読えないとつまらない。字は読めるけど、読めないふりをして読んでもらった。』

『春二日。丘の向こうの花畑には文の好きなチューリップが咲いていた。季節も始まったばかりいうのに、ここの花は美しいが故に枯れる。誤って文が食べかけたのもあるが、それもまあよししよう。』

『夏。お父様がカメラを見つけてきた。僕は写ったけど、ノアは写らない。一緒に撮りたいのに、ノアは写ろうとしてくれない。ノアの写真がないのが嫌だ。』

『夏五日。文は血を飲むのが下手だ。それはわかっていたことなのだが、人間を見境なしに殺してしまうのは血統書付きの“雑種”だからだろうか。俺にはわからない。伝統的な【吸血鬼】はそのままですて血を食らない。人を殺すほどには飲めないからだ。』

『秋。最近ノアがなくてつまらない。どうして帰ってこないの？
僕が嫌いになったのかな』

『冬。ノアがお父様と働いているのは知ってるよ。けど、お父様は
死んじゃった。惨めに戦って負けたんだって。ノアはどこ？』

『秋。

ノア

大好き』

*

*

*

何ともひどい内容だ　自分はこんなことを書いた覚えがない。
ぱらぱらとめくりながら、文はさらに一冊を手にとった。

「……なんか、すごいな……」

「そうか。最初から最後まで俺の名が途絶えないんだが。どうなっ
ているんだ」

「恥ずいからそれ以上言わないでくれる……」

相変わらずひどい内容だ。今と大して変わってないじゃないか。

最後の一冊をめくり、文はそのページを撫でた。

真っ白の頁　色あせることもなく、ただ綺麗なまま。虫食いの
痕さえない。

何も書かれていないのだ。文字一つも

探し続け、最後の言葉は一番最後に見えた。

『季節がわかんないよ　ノア、大好き。一緒なら怖くないよ。だ
から　』

「……感傷に浸っているとこ悪いが」

「ああ　うん。時間、もつないよね」

「わかってるなら行動しろ。どうする、燃やすのを待つ時間はない
ぞ」

時間なんてない。教えられたところへ行くには半日以上かかる。人間の脚なら三日はかかるだろう。

本の束を担ぎあげ、文はノアの手をつかんだ。

「どうにかするから。ついてこい」

「了解。我が忠誠は君のために」

背を破って広がっていく一対の黒き翼。それは蝙蝠のそれと類似しており、冷たい血が通っていた。

ノアの手を離すまいとし、文はまだ明るい朝の空に飛び立った。

*

晴れているらしい。

自分は安心できない。外の天気なんて確かめるすべがない。

手に触れるのは、冷徹に表情もない鎖と石の壁のみ。自分の身体は鉛のように重く、鎖と同化している。

ふと、目の前に影が被った。

「……カルヴォか」

「意識はしっかりしているようだな、化け物。とっくにぶっ飛んだと思っていた」

「んなわけあるかよ……迎えが来るのに」

「……どんどん口が悪くなってるな」

呆れた風もなく、それでもつまらなさそうに。カルヴォはヴァニツシユの顎を杖であげた。

鋭くそれを睨みつけ、ヴァニツシユはつばを吐いた。

「……好きな癖に、なんであんたはそうなったんだよ」

「自分のことは、他人が一番知っているんだ。私は」

「嘘は吐くなよ。クアトロを誰よりも愛したくせに……！」

「失うのが怖いなんて、そんな、人間のようなことを　くだらない」

ぼそぼそと言葉を吐き、カルヴォは厚いあの本を開いた。

何とか身構えるものの、容赦なく杖がその体を打った。

「もっ、三日月は出ているんだ。お前は今宵、その姿を変える」

「っ……知ってるよ。昔っから、わかってた」

「そうだな。昔から　ずうっと、わかっていて、運命づけられていたんだ」

何度も視た夢の世界。あれは、夢でなく現実。自分はただ、過去の忘れていたことを視ていただけなのだ。それがわかっているから、ここまで落ちついていられる。

俺に、勇気を頂戴。文、あんたの　　明るい笑顔を。

*

牢から出た先は、草原であつた。谷のはるか目下に流れている川はさらさらと、嗤っているように過ぎていった。

カルヴォとクアトロ、そして　ヴァン兄さん。

枷と鎖の絡む、この肢体。狼のその血をひく自分は、この忌々しい血を何度も呪った。

兄さんとは違う。

兄さんと違って、自分は災厄の元なんだ。そんなの、周りがずっとそう言っていた。

引きずってこられたヴァニッシュは、草原の上へと鎖で繋がれたまま投げ出された。どんよりと曇った空を睨んで。

ずっと、ヴァンがヴァニッシュに歩み寄った。

「……覚悟はいいな」

「俺は助かるよ。大好きなヒトのところへ帰るから」

「勝手に思っておけ。どうせお前は、この日のための贄なのだから」

「ああ、悲しそうにしないでよ。あんたが、俺を捨ててくれたからこそして生きている。それをとやかく言うつもりはない　だから

こそ、ここから逃げて見せる。

もうすぐ、月が出るだろう。そうすれば、そこからは昔と同じだ。

見境なく襲いかかり、血に濡れて泣きわめく。

本物の、理性をぶつ飛ばした“獣”となる。

追ってこなかった父さんも、母さんも。追ってこなかったわけじゃないんだ。

この手で、俺が壊してしまったんだ。

雲が風に流れていく。全ての念を流すように、ゆっくりと

この日まで俺を守ってくれたリリース、ありがとう。遊んでもらったのは俺の方だった。大好きだよ、今も。

もう、何も言えないよ。

ひととき強く、風が吹き抜けた。

それは、いつか文に向かって涙を流した日と同じように

「.....!!!!」

三日月が目に入つた途端、体が震えた。いや、それ以上に感じたことのない恐怖が体の機能を刹那として停止させた。

小さかったころと同じだ。

このまま、誰も止めてはくれないだろう。命を賭して止めに来る

三日月の下で

「死んでいるようだな」

「いや、生きている。これくらいでへばるような命なら、とつくにこの世にはいない」

倒れ伏すその肉塊に、ヴァニッシュの原型はとどめられてはいなかった。もはや他人と言えるほどに、その姿は変わってしまった。た。

美しく、醜く 黒と白の両方を兼ね備えたような、そんな風に。ぴくりと、クアトロが耳を動かした。

「……どうした？クアトロ」

「ああ……どうやら、来客らしい。手厚く迎えようか」

「了解」

クアトロの意思を理解し、ヴァンはマントを翻してもと来た道を戻っていった。

それについて歩きはじめ、カルヴォとクアトロも闇にその姿を消した。

*

風を切り、速く 速く行かなければいけないのに
翼をはためかせ、文は宵空を滑空していた。ただ一つ、大切なヒトを求めて。

ノアの手を離すまいとし、文はその彼に尋ねた。

「この辺だよな……」

「ああ、そうだな。谷の下と聞いたが、違うか」

「時間ないのにつ……！もう、月が」

「慌てるな。焦りは余計に思考を狂わす。よく見回せ」

いやに落ちついている。いつだってノアはそうなのだが、今回は

かりは落ちつけない。

焦りを表に出し、文は必死で周りを見回した。

岩肌がごつごつとむき出しになっている。やわらかなせせらぎに、草原に

はつと息をのみ、文はその草原へと急降下した。

「っ、ヴァニツシュっ……！」

「待て！結果を急ぐな、どう見ても罠だ！」

ノアの声が頭に入らなかった。それほどに、切羽詰まっていた。草原に人が倒れている。こんな場所で倒れているのだから、ヴァニツシュに違いない。

ひらりと地面に降り立ち、文は慌ててそのヒトの元へと駆けた。

「大丈夫か！？お前、一体何がっ……！」

「文！戻れ！！」

怒鳴り声に反応することはなかった。目の前の人心配で、それどころではなかったのだ。

文の呼びかけに、彼はゆっくりと半身を起こした。

真っ白な長い髪はボサついて千切れた草が絡み、服はところどころが破れて肌がむき出しになっていた。爪は尖り鋭利に輝き、靴は谷底までの岩に引っかかっていた。

文に目を向けると、彼は静かに笑んだ。

その眼は 【吸血鬼】の紅だった。

「っ、同類かっ……！？」

「……いい匂いがするね、お兄さん 血の香りだ」

芳しい、その香り。隠していても何よりもばれやすい香りなのだ。ノアに腕を引かれて後退し、文はその影をただただ呆然と見つめていた。

月光に暗く影を落とす、なおかつ微笑を浮かべているその青年。自分は間違いない、その青年を知っている。

そつと手を伸ばし、青年は自身の耳をふにふにと撫でた。

「……ねエ」

「っ……何？」

「俺は誰？わかるでしょ、お兄さんなら」

「……ああ、うん。よく知ってるよ」

「本当！？じゃ、教えてよっ」

会ったばかりの時と同じようなやり取りだ。この話し方で、何とはなく壁を感じていた。

腕を振りほどき、文は応えるように手を伸ばした。

「お前は 俺の愛した大切なヒトだよ」

その答えに、青年はにこりと笑んだ。

そうして 放たれた弾丸のようなスピードで、文に迫ってきていた。

避けられず、文は草原の背の高い草の中へと体を吹き飛ばしていた。

「愛した、だって？俺にはねえ、そんなものないんだよ」

「っ、何それ……」

「知りたい？ 俺は、殺人鬼なんだ。ぜえんぶ、この手の中で真赤にっ……！」

高く笑いながら、青年は文に笑いかけていた。それは、楽しそうに嬉しそうに。

再び文の腕をつかみ、ノアは口を開いた。

「俺は、別行動をとっているであろうあの三人を追う。そいつを てめエを救ってやる」

「……無理しない程度に、頼む。ごめん」

「了解。無理はして当然」

「それは許さない。無事に、また三人で笑えるのなら いつかみたいにご褒美を頂戴」

「……できにもよる。てめエが無事なら、それで」
そこまで言って、言葉は中断された。

二発目の攻撃が、文とノアの間に入っていた。

「一人にしないでよ。俺、足だけは速いんだ」

「……ノア」

「わかってる。必ず」

そう、絶対だ。誰かが欠けるなんて、あってはならない。

二人の間を抜けて駆けていくノアを眺め、文はニツと笑んだ。

「な、ヴァニツシュ。お前も欠けさせる気はないから」

「余裕じゃん、お兄さん。ぜんっぜん面白くない」

「そう？俺はずっと二人に一途だよ」

頭上には三日月。満月でなければ威力は少々減ってしまうのだが、いたしかたない。

ふぉん……と、文の手中にあのふよふよとした何かが現れた。

「ヴァンパイア・ブラッド」

「へえ、殺る気？俺を？愛してるとか言ったくせに」

「だから 正気に戻す」

破れた服の下には、あの痛々しい文字と絵が。魔方陣に十字架に、意味のないような羅列した言の葉。その全てを、見てしまっている自分。それが憎らしくて、悔しくて。

傍にいてほしいのに、居てくれない。そんなこと、わかっているのに

ふよふよを手中に戻し、文は静かにヴァニツシュを見つめていた。

刹那。止まったような時が、動き出した。

どこから取り出したのか、ヴァニツシュの右手には剣の柄が握られていた。

素早く先攻を取ったヴァニツシュは、なぎ払うように剣を振った。ヒュツと空を切った音がしたものの、文はとっさにヴァニツシュ

の懐へと入った。

ふよふよが、剣を形作る。

「っ！」

「何やってんの。当たるわけないじゃん」

かすめたが、それは服の端を切っただけだった。体には刃の先端さえも触れていない。

再び距離を取り、ヴァンツシュは言った。

「……あは、お兄さんっておんなじ匂いがする」

「どういうことか……説明は」

「たくさん　たくさんたくさん、雨が降るくらいに　殺したんだね」

なんと返していいのか　返せるのか

俺は、何と答えを返したか。自分、固まってしまえば終わってしまっぞ。

ぼうっとする頭をゆっくりと左右に振り、文は剣をヴァニツシュに向けた。

「

」

「……そう。俺と同じだね」

同じ　それだけで満たされていく。人間のような浅はかな感情が体の中で渦巻いている。

『すくって』やりたいと思うのは、間違いでないことを　どうして否定ができるんだ。

巢食って、救うのが。それが俺の役目であるように

灰になる前に

「お兄さん　面白いくせに、つまんないね」

にやにやと笑っている、自分の愛したそのヒト。こんなにも姿は変わっても、記憶だけは変わっていないのだろうと期待してしまう。そうでなければ悲しすぎる。

剣の柄をきつく握り締め、文は言葉を吐いた。

「お前なんてっ……殺してしまえば楽なのにな」

「ん　そう。じゃあ、殺ってもいいよ」

「無理無理。今は、言ってみたかっただけ」

言ったからといって、何が変わるわけではない。自分の物事の決められなさは昔から知っている。優柔不断で馬鹿なんだって。

二コリと微笑んで、ヴァニツシュは文に尋ねた。

「ねえ　俺って、お兄さんに愛されたんだよね？どんなふうだった？つまらないやつじゃなかった？」

「何で……そんなこと聞くわけ」

「だって、お兄さん、さっきのお兄さんと楽しそうだったもん。俺だけ混ざってなかったのになって思ったら楽しくない」

「……“覚醒”したくせに、そんなことが気になるの」

「気になるよ。俺は、アイツとは違って『成功した化け物』だもん。感情だつてはつきりしてるし、楽しいことが好き。アイツは惜しかったけど　何が足りなかったのか、俺とは別物なんだ」

アイツとは、クアトロのことだろうか。アレは成功とはいえないが、それでも愛されていた　そして、その愛情に答えていた。

答えることもなく、文は剣を振りあげて駆けだした。

キンツと、金属の打ちつけられあう音が響いた。

「っ……何で……？答えてよ、お兄さん！」

「うるさい」

「え……？何で？俺のこと、好きって言ったじゃん。なのに、何で

答えてくれないの」

ずっと、わかっていたんだ。

君と会ったときから、このままが続かないことなんて。

それでも、今を求めた。このままの『永遠』をただ一人、信じて
もいない神様に。

都合がよすぎた。代償もないのにそんなことを望むなんて。

反撃を受け流し、文は表情もなく言った。

「好きなんだ。大好き」

「は……？つまらない、何それ。そんなの無表情で言って、楽しい
わけ」

「さア、知らない。君の血の味は病みつきだし、その全ても愛おし
かった。二人でいたのに孤独なんて、おかしかった。君はずっと一
人だったのにね」

「……お兄さんは二人ぼっちじゃん」

一人じゃないだけ救われる。そんなことをいちいち説明せずとも、
ヴァニツシュならわかるだろう。そんなこと、言われるまでもない
と。

剣を振りあげ、文はヴァニツシュの脇腹をめがけて突き刺した。

それを読んでいたのか軽くはじき、ヴァニツシュは嗤った。

「お兄さん、時間がないんだね。焦ってる」

「っ……それほどでもないさ」

焦っている。確かに、そうかもしれない。

あの本を燃やされてしまえば、きっと自分は愛したこの狼を殺し
てしまう。しかし、導火線の火は消えることを許さない。

もう、本は燃え始めている。良識が壊れかけて、ロクに話もでき
なくなってきたのがその証拠だ。気付かれたくはなかったのだ
けど。

剣を構え直して、文はため息のように息を深く速く吐いた。

早く、終わらせないと。

*

月光も差し込まない暗い廊下。牢へと続く岩肌むき出しのその場所をノアは駆けていた。両手に本を抱えて。

さあ どこへ行きやがった、あの狼ども。

こんな獣臭い場所はさつさとおさらばしたい。文だってそう思っているのなら簡単なのだが。

何を企んでやがる？俺と文をどうするつもりだ。

「……いい加減、でて来い。いつまで監視してるつもりだ」

「ふうん……残念。まだばれてない自信があつたのに」

「俺を誰だと思ってやがる。見抜けなきゃ、生きていけない環境にいたんだぞ」

「知ってる。だから、余計に悔しい」

明かりもないのに、声だけはどこから聞こえてくるのかわからないほどに反響していた。

本を足元に置き、ノアは懷から一本のフルーツナイフを取り出した。

それを構え 彼はそのまま斜め上の天井へとそれを投げた。

「っ！？」

「馬鹿が。見抜いていると言っただろう」

闇の中に、ナイフを避けてカルヴォが下りてきた。

もう一本を構え、ノアは辺りを確認した。

「……あの化物も、そこにいるのか」

「だから？どうした」

「敬語でもないということは、ずいぶんと前から余裕はなくなっているんだな。哀れだ」

「うるさい。 その手に持ったものを片づければどうだ」

本の束。 あれば邪魔だが、文は大丈夫なのだろうか。このまま燃

やしてしまうと、あいつはどうなってしまう？

少しの考える暇もなく、ノアの腕を尖った何かがかすめた。

「っ……」

「余裕なんて、そっちにも渡さない。さあ　早く死ね」

「……許せよ、文」

紐で束ねていたそれをノアは片手で持ち上げて、掲げて見せた。
厚い束。燃えるのには少々時間がかかるだろう。

ギリツと齒をきませ、ノアは静かに笑んだ。

「
イクスプロージョン
「爆発」」

言葉が吐かれた刹那に、本をつかんでいたノアの腕と本を凄まじい炎が纏った。

その明りで煌々とした道で、カルヴォは冷めた表情のノアを視た。

「……はん。下らない」

「やってみなければわからん。だが　文が壊れてしまう前に方を
つけさせてもらうぞ。あいつを連れて帰り、褒美をやらなきゃいか
ん」

「っ……そういうの、ムカつく。叶わないことを言うな。お前は鬼
だ」

「あああ、知っているさ。お前に叶わないことを俺は叶える」

そう、叶えてみせる。こいつの二の舞はごめんだ。

あんなに壊れてしまっても愛せるなんて。できるだろうか、それ
を俺には。

クアトロの姿を確認して、ノアはため息をひとつ吐いた。
燃え続ける本は、一冊目を灰に変えた。

覚醒

＊

明るく、眩しく　ひどく、苦しく。

痛いところが多すぎる。心の右と、片隅と、中心と　……。

不思議そうにもなく、唐突に猫は尋ねた。

「……何か不満でも」

「あア　そう、だな。不満というか……」

唇を噛んでみるものの、何が悪いとは一概に言えない。自分が頼んだのだが、心が痛く苦しい。

尾をふわりふわりと揺らし、猫は和んだように微笑んだ。

「心配しなくてもいいよ。運命は　俺の手の中だ」

「そんなことは知っている。だが　」

「何それ。馬鹿にでもしてる？」

「　少しは、な。お前の存在が絶対なのは知っているが、それでも面倒なほどに　」

「……あの子が心配なんだ。どうして？」

「お前には関係ない。黙って傍観している」

心配だと……？ああ、心配だ。壊してもかまわないが、あの子にはひどい癖がある。それを制御できるものがあるかどうか　いな　いところで、何も変わりはないが。この世界が壊れるだけだ。

ただ考えにふけているだけで、自分は動けない。本当なら、あの子に手を貸してやりたかったのだが、それも叶えてはいけない。叶えた時点で自分はまた違う次元の化け物になってしまう。それは面倒で嫌だ。

「……黙って傍観、ね。あんたこそ、それ守ってよ」

「わかつている。必ず　」

必ず叶えてくれると。今はただ、それを信じよう。

＊

キンッ、カンッ

刃が打ち合い、金属音が鳴り響いた。草原には月光がめいっぱい差し込み、静かに自分達を照らしていた。

ああ、もう　理性が壊れかけている。頭が締め付けられるように痛く、吐き気までしていた。いつ、ノアは本に火をつけたのか
まだ、あれは燃え続けているのか
血を吐き、文は柄を握り締めた。

「いい加減っ……くたばれ」

「そっちこそ。邪魔……」

言葉が乱雑なのはお互い様。刃が血に濡れているのも。
ぺろりと刃を舐め、ヴァニッシュは文に斬りかかった。
反射的にそれを受け止め、文は歯をきしませた。

「っ……」

「お兄さん、匂いが変わってる　ひどい匂い」

「はッ……黙ってな、餓鬼のくせに」

止めてほしい　けど、そんなことも考えられなくなっている。
狂気めいたヴァニッシュの眼を睨みつけ、文はその足を払った。
軽々とそれをかわし、ヴァニッシュは拳で文の腹部に一撃を繰り出した。

「何で……？　っつまんない、お兄さんってそれくらいでへばるような身体じゃないよね？」

「……は　」

「っ……と。体……えらく侵されてるね。これって、チャンス？」
にたりと、ヴァニッシュは楽しそうに笑んだ。いっぱいに狂気を孕んで。

ドサリと音を立てて、文はそのまま背の高い草の中に倒れた。剣

も離し、完全に無防備な状態で

剣を掲げ 降り注ぐ月光の中をその鈍色は真っ直ぐに落ちた。

*

「っ、文!？」

胸騒ぎがした。何かがあつたのか ?

振り向いたノアの脇を鋭利な刃がかすめた。

「くっ……」

「こつちにはクアトロがいる。油断するな」

目を爛々と光らせて自分を狙っている獣の姿。それはわかって
いるのだが、体が勝手に反応した。

煌々と燃え盛る本の束。二冊目も三冊目も焼け落ちた。

早く文のもとへ戻りたい。あの化物、尋常じゃないほどに強い

もしも、万が一のことがあれば、俺は

血の滲む脇腹を手で払い、ノアは舌打った。

「片付ける」

「クアトロ、迎撃」

「グアアアアアアアアアアアア!」

狂っている。だが、獣には慈悲の心さえも無駄。

素早く相手の懐に入り込み、ノアは数本の隠し持っていたナイフ
をその胸に突き刺した。

返り血で頬が朱に染まる。

「クアトロ!？」

「俺を見くびるなよ。こんなやつごときに」
ズブ、と。

刺したはずのナイフが、乾いた音を立てて地面に落ちた。

地面に伝う紅い液体が、靴を濡らし、脚を濡らした。

「は……」

「不死の肉体でも、痛みはあるでしょう？」

クアトロに刺したはずのナイフは、真っ直ぐにノアの右ももに刺さっていた。それが、地面に落ちていたのであった。

自分でもう一本のナイフを引き抜き、ノアは膝をついた。

「二本も刺しやがって……痛い」

「知っている。私を舐めるなよ、【吸血鬼】」

「ダメージを相手にも与える魔法だろう、わかっている　面倒くさいものを……」

傷はそこまで大きくはない。しかし　血が足りない。

と、ノアはたとえ耳をそばだてた。静かに、息をのんで。何かが近づいて来る。こちらへ、ゆっくりと。

背後ということは、来るものは限られてくる。それに、その方角には文がいたじゃないか

「っ……！」

「ん　？　ああ、あの化物もう来て　」

月光の中に見えるシルエット。返り血を浴びた様子はなく、自身の血液で腕や足に紅くラインが残っているのが見えた。

ジャリ、と石を踏みつけ、そのシルエットの男は長い銀髪を揺らして微笑んだ。

「こんばんは、お兄さんの愛しい人。無様だね」

冷めたような声色。嗤っているのか、表情はあまりはつきりしていなかった。

ほたりと、紅くラインが落ちた。

覚醒（後書き）

抜けていた、文字を入れ直しました

覚醒？

「てめエっ……文をどうした」

脚を庇って身構え、ノアはヴァニッシュを睨んだ。

ノアの方を向き、ヴァニッシュは嗤った。

「ああ、あのお兄さんね。生きてるかなー、死んでるかなー」

「んなこと聞いちゃいねえんだよ……あいつが死ぬわけがない」

「『信じてる』んだよな。つまんない」

そう言って、ヴァニッシュはカルヴォとクアトロに視線を戻した。表情もなく、カルヴォは本を開いた。

「化け物が……めんどうな」

「いいじゃん、別に。あのお兄さんもそのお兄さんも傷ついてるから　まずはあんたから」

「……ヴァンとは共闘関係です。私は関係ない」

「とぼけないでくれる。俺の遊び相手は誰でもいいんだけど、その遊び相手を潰そうとしてる。それが許せない」

余裕が戻ったのか、カルヴォの口調は戻っていた。脇には再びクアトロを従え、ヴァニッシュを前にしてもその態度を崩さなかった。にこりともせず、ヴァニッシュは剣を構えた。

「俺は、兄さんを殺す。その為に遊び相手のあんたらを殺すんだ。これ以上俺とおんなじような馬鹿作りたくない」

「失敗作が、ほざかないでいただきたい。完全体という失敗作ですよ」

「知ってるよ。完全すぎて使えない、種族のお荷物。言うことも聞かない、命令したらその相手を殺す。そんな気の触れた化け物は、死んだ方がマシだって」

自虐的にも見える笑みを浮かべ、ヴァニッシュは目の前に手をかざした。

臨戦態勢に入り、カルヴォは頁をめくった。

「全員殺しちゃったあ！うちの種族はもう、兄さんと俺だけなんだよ」

狂ったように咆え、ヴァニッシュは体勢低く駆けだした。

同じタイミングで瞬発的に駆けだしたクアトロは、カルヴオの合図によって牙をむいた。

「殺してもかまいません。脅威の芽は摘み取りなさい」

「っ……！」

ヴァニッシュが剣を振るいあげる寸前に、クアトロがその腕に牙を立てた。

眉をひそめ、ヴァニッシュは剣を地面に突き刺した。

「……どうせ、攻撃したら跳ね返ってくる。せつかく覚えた魔法、使わない手はないよな」

「直接攻撃なら。ここは、うちの領域ですからね。そういうのも使えるんですよ」

ボタボタと、赤黒い血液が腕を伝って地面に落ちた。さっきのノアのように。

もう一度剣をつかみ、ヴァニッシュはにっと口端を歪めた。

「くれてやる」

ぐしゅ。ひどい音が、耳障りに響いた。

ボタリと血を落とし、ヴァニッシュは剣を離した。

*

*

*

起きて。

誰かの声がする。自分と呼んでいるのだと、そんなことは知っている。

返事を返そうかと悩んでいるうちに、指先が喉元へと伸びた。

「っ！？」

ほら、まだ生きてた。こうやって殺せばいい。

死ななかったらどうするの？

まだ治癒の能力も高くないから死ぬさ。このまま、湖の底に沈めるぞ。

急激に力が入り、首が絞まっていた。呼吸なんて意味もないのにしているが、それでも意識が薄れていく。おおよそ、誰かが能力を封じる術をかけたんだろう。

息を吐き、手を思い切り前に突き出した。

「やめてよっ……俺何にもしてないっ……でしょ……？」

誰も答えちゃくれやしない。もう、意識も限界だ。

大きく息を吐くと同時に、振り上げられた杭が心臓を貫いた。痛みがあるのに声が出ない。血反吐を吐くのに視界が曇っている。カチャカチャという音がして、両足首に何かが付けられる。

そして　そのまま、冷たい水の中に落されてしまったのだ。

「っ……は……」

どこまでもどこまでも、深く深く落ちていく。切れた唇から、コポコポと音を立てて泡が浮かんでいく。

死ぬのか　何も失うものはないけれど、やっぱり未練があつて困る。化け物のくせに。

そういえば、まだあの人は元気にやっているんだろうか。このところ会っていないけど、その間のことを何も覚えていない。

会えなくて会えなくて、辛くてたまらなかった。なのに、気付いたら自分は殺される寸前。

何があつた　？ 自分が何をした？

わからない　助けて　もう一度会いたいよ

「　文。大丈夫か？」

透き通るような声が、低く、耳をくすぐった。

深い海の底から、手を伸ばして抱き上げてくれた人。その肌は暖

かく、濡れた体を温めてくれた。

静かに目を開け、文はその頬に触れた。

「……おかえり」

「ただいま。すまない、俺がいなかったせいで」

「ダイジョーブ……助けてくれてありがとう……」

助けてくれただけで十分。これまで一緒に居れなかった分は、これから取り返せばいい。

二人で居るだけで満たされる。ノアの犯す禁忌は俺だけでいい。

そんな、甘やかな生活に少なからず憧れていたのは事実。叶わないからこそ願っていた。

*

「ん……ふあ……眠い……」

いつの間に倒れていたのだろう。体にあつた傷は何故か全て完治している。

ぼうつと輝く闇空の月。綺麗な綺麗な三日月の銀。

まるで幼児のように手を伸ばし、文は草原から立ち上がった。

「今、迎えに行くからね」

迎えに行かなければ。愛した人は、緋色月の似合う美しい人なのだ。そして、狂っている優しい狼の子

狂おしいほど愛おしい。愛しているからこそ、この手で終わらせる。

静かに微笑み、文は月を仰いだ。真っ直ぐな、紅い目をきらめかせて。

覚醒？

*

「くれてやる」

刃が光り、一撃がその肩口を貫いた。

明かりも射さない暗い道。それはずっと変わらない。

噛みつかれたままもう片方の腕で剣をもう一度持ちあげ、ヴァニッシュは舌打った。

「あんまり引つついてんなら……本当に殺すよ」

耳にざらついて邪魔な声。咆えるだけでは脳が無さすぎるのに、どうして分らない。

剣を振りあげた刹那、月光が斜めに刃を反射した。

「っ、クアトロー！」

「動くんじゃないよ、カルヴォー！」

自分は“獣”だ。そんなことわかっている。覚醒を経て、ここまですることができた。感謝こそしていないが、力はずいぶんと上がっている。

ぐしゅ、ぶしゅ、べしやり。音を立てて、血が飛び散る。

狂いの笑みで刃を濡らし、鮮血がヴァニッシュの顔に散った。

「逃げられればいいのになー？俺がちゃんと掴ませてるから、逃げもできないで俺の玩具になって死ねばいいんだ」

「今すぐにクアトロから離れる、薄汚い血汚しが！」

「血汚しィ？そんなこと言うなら、本当にこいつぶつ殺すよ」

手に噛みついた時点でゲームオーバー。そのまま離せないように術をかけて、ぶつ殺すために用意もした。勿論、喉は塞いであるから話せるわけもない。

苦しんで暴れるクアトロを眺め、ヴァニッシュは剣をカルヴォに向けた。

「理性までぶっ飛んでるくせにさ、何愛しちゃってんの。そういうの、本当にム力つく」

「私の大切なヒトだからだ、ふざけるな！殺すなら私を殺せ！お前をそうしてしまったのは私だ、クアトロは関係ないだろう！！」

「大いにあるね。愛だのなんだの、目に見えないことを語るな。それこそ反吐が出る」

「そんな理由で殺していいとでもっ……！！」

「あんたが言わないでよ。散々虐げてきたくせに、今更こんな化け物一匹に命乞いなんて馬鹿らしい。そんなに殺してほしいなら、お望み通り殺してやるから　黙って見てなよ」

「ふざけるなと言っているんだ！私の生きる希望をそう簡単につ

く

「ふざけてるとでも思ってる？」

何度も何度も、鮮血を散らして獣は裂かれた。その肉も骨も、何もかも。

満足気に攻撃を追加し、ヴァニツシュは逆手に剣を構えた。

「　　フィニツシュ」

「『覚醒解除《リリース》』！」

二人の声はかぶり、そして消えた。まるで二つはそのまま衝突したかのように。

ぶしゅ、とクアトロの心臓を刃が貫いていた。

すっかり動かなくなつたその死屍を地面に落とし、ヴァニツシュは頬を拭った。

「……っつまんない。最後まで邪魔しやがって」

「は……っ……ああああああ……！！！！！！」

カルヴォはやがて、壊れるだろう。ものの数分で、精神が限界に達して。

動かない狼カルヴォの足元へと蹴飛ばし、ヴァニツシュはノアを見やった。

「……口出ししないのは賢明だよ。お兄さんは、できれば殺したく

ない。一応部外者だからね」

「部外者か……今更何をほざく。ここまで首を突っ込んでいるんだぞ」

「だから、何。お兄さんは【純血吸血鬼】だから、殺せない。殺したって死なない」

「文はどうしたんだ」

再度質問を投げかけ、ノアは剣呑に眉をひそめた。

しゃがみ込んでノアの傷口を指先で触れ、ヴァニッシュは微かに笑った。

「【和製吸血鬼】 死ぬよ。けど、多分死んでない。兄さん殺してから殺すから、それまでお預けって自分ルール作っただんだ」

「っ……まだ死んでいない……？」

「殺すけどね。 お兄さんって、あのお兄さんのお気に入りなんだってねえ…… 【吸血鬼】って言うのは、本当にわからない」

「……何が言いたい」

明らかにぼかして言っている。何を望むのか、見透かせない。

ふっと立ち上がり、ヴァニッシュはカルヴォに目をやった。

「 あんな風に壊れないから。 あんたら【吸血鬼】は」

「……俺とあいつだからそれが成り立つ。他のやつなら、あれだけ愛していれば壊れるぞ」

「ああ、そうなんだ。まあ、どうでもいいけどさ。このままお兄さんは、壊れていく憐れな狼を見ていてよ。邪魔したら容赦しないよ」

「……だったら、殺せばいいだろう」

「殺せないって。それに お兄さんにメッセージを伝える人が必要だから」

それだけ言うと、ヴァニッシュは柄を握って持ち上げた。

うろたえて顔を両手で覆っているカルヴォは、地面に伏すクアトロの死屍にすがっていた。

ゆっくりと顔を上げ、カルヴォはヴァニッシュを視た。

「……クアトロがない…… どうしてお前はそこに立っているんで

す……？」

「ぶっ飛んでるね。大丈夫？」

「……どうした……私を早く殺せ！クアトロが待っているんだ……！」

狂ったように咆え、カルヴォはフードの下からヴァニッシュを嗤いながら見ていた。

不機嫌な風にも見える表情を浮かべ、ヴァニッシュは剣を斜めに構えた。

「飽きた」

そう呟き、ヴァニッシュは庇うようにクアトロを抱いていたカルヴォを刃で真っ直ぐに刺し貫いた。

背から地面へと二人を刺し貫いた刃は、血に濡れて引き抜かれた。悲鳴の一つもなく、血を吐いてカルヴォはふらふらと立ちあがった。

「……私が殺した……クアトロを殺したのは……」

「よく立てるね。そうだったら、何か問題でもあるの？」

「……ははっ……」

剣呑にそう尋ねると、カルヴォは静かにヴァニッシュへと笑みかけた。

風に落とされた葉のようにゆっくりと倒れ伏し、カルヴォはそのまま息を引き取った。

憐れむように二人を見下ろし、ヴァニッシュはノアの方も向かずに言った。

「じゃ、行くよ。また今度、会えればいいね」

「っ……死ねばいい。てめェも……」

「かもしれない。だから お兄さんが来る時はそれを覚悟して」
ニヤニヤと、さつきとは違って さらに狂気を孕んで。ヴァニッシュは明かりも持たずに進み始めた。

疼く傷口を押さえ、ノアは何も言わずにヴァニツシュを見送った。

「……は……っ」

こんな傷、本当ならすぐに治るのだが。あの化け物に付けられた所為か、全く治る気配がない。おおよそ、カルヴォが術でも掛けたんだろう。

嘲笑するように鼻で嗤い、ノアは動くことのない死屍を眺めた。

憐れ 本当に、それ以外の言葉が思い浮かばない。自分も、文が死んでいればここまで狂うだろうか

ああ、でも 狂いはしないか ただ、壊れるだけで。

覚醒？

キーン、と。乾いた音を立てて、天窓にはめられたくすんだ色の硝子が割れた。

森閑なる聖域、美しく輝く青い空。まるで子供のころに見ていた空のように、深く青く

パラパラと粉になって降ってくる硝子片を手にしたて眺め、静かに言葉が吐かれた。

「……死んだのか」

同胞　とは言えなくもなかった。少なくとも、共闘の関係であった。仲は良くなるつもりはなかったし、なつたところでどうになるものでもなかった。アレは、自らの願望と執念とで動いているようなものだったから。

周りの仲間はどうもない。“覚醒”した弟に、全て殺された。外から客が来るまで暴れて、また眠って　そんなところが子供の時から何一つ変わっていない。「困った癖」と片付けてしまうにも、それはそれでかなりの無理がある。

弟は、俺を殺しにきつと来るだろう。そして、あの【吸血鬼】も。どちらかに殺されるのなんて、わかりきっている。

「……死ぬつもりなどないが」

来るならば来るがいい。自分の行いに後悔はしていない。

幻の青い空を見上げ、ヴァンは声を殺して降り注ぐ光の雨を受けた。

*

*

許サナイ 絶対に許せない。俺は悪くない。

あのヒトは許してくれた。けど、俺はアイツを許さない。

【悪魔】という肩書きが嫌で【魔女】を名乗ったあのヒト。あのヒトは あのヒトだけは、俺を認めてくれた。他のやつとは違って、ちゃんと俺を見てくれた。

見ていてくれて、笑ってくれて、愛情をくれて、怒ってくれてそんな当たり前に慣れていたのに。

あのお兄さん達が邪魔をする。俺の何がわかるのかも知らないけど、邪魔ばっかり。そのくせしつこい。知ってるにしても面倒くさい。

「……やーな予感」

背後から駆けてくる足音。異常に速く、化け物並。ここに化け物がいないことの方がおかしいけど。

殺しても殺しても復活する。まさに不死の【吸血鬼】

駆けながら剣を銃に変化させ、ヴァニッシュは顔に付いた血を袖で拭った。

*

あり得ない 何なんだ、あの化物。何故ひと思いに殺さなかった。伝言係などと、そんなものいらなかっただろう。

ずいぶん痛みも引いてきた。さすがに、もう行かなければ あ
の化け物を止めなければ。

壁を伝いながら立ち上がり、ノアはふと辺りを見回した。

何かが近づいて来る。

「……っ……は……っ」

ほんの一瞬、風が遠くから吹いた。

濃い血の匂い。それに加え、懐かしい匂い。

何かを感じ、ノアはとつさに腕を伸ばした。

「っ、待ちやがれ！」

とつさに掴んだ割には捕まえられた。だがぬるりとした感触に、ノアは眉をひそめた。

「てめエ……」

「……」

返事はなかった。何一つ 呼吸さえも。

まるで闇に溶けるように、徐々にその手の感覚は消えていった。その瞳だけは闇の中でも静かにたゆたませて。

幻だったのかと思うようなそれがいた空間をじっと睨み、ノアは懐から一枚の写真を取り出した。

「……あア」

写っている、写ってはいけない者。そんなの撮った時点でわかっていたのだが。

ヴァニツシュ一人で映っているその写真を地面に置き、ノアは壁を伝って歩き始めた。

消えている。消えるはずなんてないだろう？なのに 常識なんて、そんなものは存在しない。

じゃあ、何が起こっているんだ。常識外の理、何もかもが間違っている

*

カチカチカチカチ 止まることなく時計の針は動き続ける。

吹き渡る風のように緩やかに、確かに それでも、異様なほどに速く

「……よく来れたな。あいつらを殺してまで」

「そう差し向けたのは、誰かわかってんの？」

開かれた扉から堂々と侵入してきたヴァニツシュを見やり、ヴァンは表情もなく再び天を仰いだ。

サラサラと未だに硝子片は落ち続け、光の雨のように陽を受け輝いていた。

「……覚悟して」

「了解。お前も、それ相応の覚悟を」

ガシャンと音を立ててリロードをし、ヴァニッシュはヴァンを睨みつけた。

足元につつましげに咲く花々を愛おしげに見やり、ヴァンは剣を引き抜いた。

感情の果て

「……何も聞きたいことはないし、何も言われたくない。あんたのせいで、何もかもがめちゃくちゃだ」

「そうか。だから殺しに？」

「うるさい」

まやかしにすがって生きていられるほどに強くない。この空間をぶち壊すために、兄さんを殺す。

死ねばいい　死んで償え。

銃を構え、ヴァニツシュはヴァンめがけて駆けだした。

「あんたがいるからっ……！！」

「っ……」

銃弾を避け、ヴァンもほぼ同時に駆けだした。

キンッ、ガンッ、バシュッ

当たって弾け、砕けて散る。動きが俊敏で当たらないところは、流石に【狼】の一族といったところなのだが。並んで駆けても、相手の方が能力は上を感じる。

はつと息を吐き、ヴァニツシュは地面を蹴って高く跳躍した。

そのままヴァンの頭部をめがけて、ヴァニツシュは何度か引き金を引いた。

「　　朽ち果てろ」

「“覚醒”しようとも、お前なんぞに負けるとでも？ 思いあがるな」
髪が乱れ、鮮血が散る。嗤っているのか、口端が歪んでいた。

狭められた距離に、ヴァニツシュは銃身をヴァンに叩きつけた。

ギィッ　と鈍い音を反響させ、それは受け止められていた。

「……もう、父さんや母さんのいたあの頃じゃない。お前は自由にしていればいい　そう思っていたのに！」

「じゃあ、どうしてそのままにしなかったんだよ！ 俺はっ……僕はただ、逃げたかったのに！」

「っ……何も言わずに、死んでくれ」

理不尽　兄さんはいつだっていつだって、一人で抱えて、理不尽に人を引きずりまわして、馬鹿みたいに孤独を演じて、結局は自分も周りも全部を壊して

剣呑に目を細め、ヴァニッシュはヴァンの胸部を蹴り、距離を取った。

「あなた　そういうとこ、全然治ってない。俺を捨てて、種族を守る方に走ったとは評価できたのに　なんで今更、未練がましくさつさと殺さないんだよ！」

「……うるさいぞ、化け物」

「……あなたがはつきりしないなら、昔みたいにっ……」

カチカチうるさい時計の音。歯車が廻り、視界がぼやける。

不敵に笑うお前が許せない。許すはずがない。許すわけがない。

ガシヤンとリロードの音をさせ、ヴァンは表情をなくして言った。

「　同族殺し」

「そんなの……あなたに言われなくてもわかってる」

どんなに攻撃しても、四肢をいでも、殺しても。そんなのに意味なんてあるわけない。それがわかってるからこそ、余計に殺したくなる。恨みつらみが重なっていく。

牙をむき、ヴァニッシュはヴァンに照準を定めた。

片目を閉じて見えた、あまりにも崩壊的に美しい世界に　憎むべき世界が。

「永久に苦しみ　俺の分まで全て」

「っ」

怯える風もなく、ヴァンはただ銃口をじっと睨んでいるばかりであつた。

ギリツとはを軋ませ、ヴァニッシュは引き金を引いた。

ガンッ　咆えるコエが、真っ直ぐにヴァンを打ち碎いた

戦火のように咲く花々。真赤に赤く、枝垂れて、そして　華やかに甘く。

地面に膝をつき、ヴァンは胸部を抑えて倒れ伏した。

「……………これで……………全部……………」

腕を下ろしてダラリと空を仰ぎ、ヴァニッシュは口端から零れ落ちる血を舐めた。

腑に落ちない。苦しいなんてとうに忘れたはずなのに

「ボンソワール……………マドモアゼル」

どこぞやで聞いたことのある声。吐き気がするほどにイラつく。銃を持ったまま振り向き、ヴァニッシュはダルそうに呟いた。

「……………折角殺せそうだったのに、邪魔しないでよ。お陰で急所外しちゃった」

「急所を外す？つまり、それはまだ壊れていないということだ。まだまだ楽しく遊べるだろう？」

「うつざい。それに、僕は男だし。頭でも打ったみたいだよ　お兄さん」

カラカラと笑いながら、ひどく胡散臭く。ヴァニッシュは、面倒そうにその姿を見ていた。

自身の血に濡れて紅く、そうして微笑をたたえる。黒の燕尾服に厚いコートを羽織り、文が扉の前に立っていた。

「……………やっぱり生きてた。危険な芽は摘むのに限るけど」

「私は君の知る、『牙城文』ではない　その体を借りて住みついた、古城の主である」

「ああ　知ってるよ。気持ちの悪い存在」

「……………ムーンエッジか……………」

ふらつきながらも立ち上がり、ヴァンは文を見やった。

静かに微笑を浮かべ、文は指を折って数えた。

「ヴァン、久しいとは思わないか。あの夢想世界では、存在できない存在としてしかこちらを見ることができなかった。とはいえあの子が私を殺したお陰で、こうしてここへ出てくることができた

のだがね。素晴らしいキリストだろう？」

「……何用だ。これは、こちらの種族どうしの問題だ。【吸血鬼】となるのを諦めたお前には関係ないだろう」

「あるといえばどうなるか、考えたことはあるかな？ 君の低脳な頭では、限界もあるだろうが」

挑発というよりは、むしろ嗤っているだけのようでもあった。それでいてクイズでも出しているかのようにおどけて

姿は文なのだ　しかし、中身は全く違う存在

手を差し伸べ、文はにいつと笑んだ。

「積年の恨み、なんてそんなものはないが。あの子を苛めたお前たちを私は許さない。まあ、そこまで執着しているわけではないけどね」

「……ノア・ジョーカーと同じような姿をして……初めは戻ってきたのかと思った」

「それはどうも。ノアは偶然だと思えばいい。この身体の子はその哀れな【吸血鬼】を愛してはいたがね　あの子は使えなさすぎる」

「お前が使えないほど、お頭がマシだということだろう」

「　君はいずれ死ぬ。そろそろおしゃべりをやめた方がラクに逝かせてあげられるだろう」

「どっちも黙れば？ うつざいのばっか増えて　」

低く呟き、ヴァニツシュは銃口を文の方へと向けた。

にこにこと笑んだまま、文はその銃口に手をかざした。

「撃てばどうか？ 狼君。その代わり、この身体が吹き飛ぶ。私の魂はもうすぐ消えるが　君の痛みは残り続ける」

「　何のためにここへ来た。

「ははッ……愚問だ。世界の変革！ それを心から望む、憐れな哀れな私目でございます」

「ふざけないで。うつざいつて聞こえない？」

「聞こえない聞こえない。愛を唄う声以外は、何もこの耳には入らない」

「死ね」

ガウンツ、ガウンツ！！

獣性を響かせて何度か引き金を引き、ヴァニツシュは文に向かって蹴りを入れた。

笑みを崩さず、文はその脚を強く掴んだ。

「蹴りは隙を生む。覚えておきなさい」

「その割には、服の端っことか切れてるけど？」

「アクセサリーだよ、おチビちゃん。少しはおしゃれの勉強もしようか？」

「黙れおっさん。何年生きてんの」

「ちよいと八百年ほどね」

ヴァニツシュの脚を離し、文はにこりと笑んだ。

そしてそのままチャツと銃を構え、文はヴァンに向けて発砲した。いやに軽い発砲音が、室内に響き渡った。

ヴァニツシュが振り返るころには、ヴァンは再び地面に膝をついていた。

「……お前……」

「ああ、大丈夫、心配しないで。私は別に、ヴァンを葬りたいわけじゃない。もつと崇高な意志があるんだよ、マドモアゼル」

「話聞いてんの？ あつたま悪すぎ」

「馬鹿といふなれば全てがそう見える。君は、オシャレとともに勉強しようか」

ガシャンとリロードを完了させ、文はヴァニツシュの胸ぐらをつかんだ。

「私が君を殺すか、君がヴァンを殺すか　もしくは、私がキミを殺すか。さア、遊ぼうか」

凶弾に花弁

文の調子に吞まれるように、ヴァニツシュは口端を歪めて笑んだ。
「何、そんなこと？ だったら、俺が全員殺してやるよ」

「できるかな？ 君の“覚醒”は、この子と戦ったときにかなり消費されているはずだ。そんな万全の身体でもないのに、二人を殺す。自分の力量を知らないさ」

「……こんなにムカついたの久しぶり。前にも」

「『前にも』なんて、君にはないだろう。この子との思い出も何もかも、君は忘れて消えた」

「思い出……？ ふざけないでよ、そんなの要らないしあり得ない」
イラついているヴァニツシュを煽るように、文はそう言っ
て笑っていた。

ふつと、ヴァンの方へその視線が移った。

「君は本当に弟が好きなんだろうな。私の嘘が見破れるかい？」

「……ここに出現した時点で全ての態度が嘘だ。お前はそんなに軽率ではない」

「それはどうも。見破れたね、ひとつは。しかし、まだまだ見破れていない。私の姿は存在するものの数だけあるということも、見破らなければならぬ嘘だ。現にこうして、別の姿を持っている」

そう言った刹那に、文はヴァニツシュの脇を抜けてヴァンに迫った。体勢も低く、まるで猫のように。

息をつく間もなく、ヴァニツシュが文に銃口を向け直した。それと同時にヴァンの額に銃口が向いていたが。

「何するつもり。さっさとどいてよ」

「御冗談を。葬りたいわけではないが、目障りなのは確か。キミに殺されるくらいなら、私が殺めてしまおう」

「……何言ってるの」

ギロリと眼光鋭く、ヴァニツシュは表情も消して数発文に向けて

発砲した。

返すように同じ数だけ発砲し、文は空いた手で空を混ぜた。
放たれた銃弾は互いにぶつかって弾け、地面に乾いた音を立てて
転がった。

「キミの声が聞こえるといいねえ。そうしたら、あの子も眼が
覚める 覚めなくてもかまわないが」

「また訳のわかんないことっ……！」

「わかるよ、考えなさい。少なくとも、ヴァンにはすぐに理解でき
る感情だ。いや 本当は君の方が近いんだけどね」

そう言って、文は空いた方の手を自身の胸にあてがった。

ドシュッ。鈍い音とほぼ同時に、文の背には翼が生えていた。

* * *

ふわりふわり、漂ったまま浮かびあがれない。空は冷たく色を放
ち、太陽が自分を照らしていた。

ノアあー……おなかすいた！。

知るか。何年物が欲しい？

んー……ノアが欲しい。

黙れ。そしてくっつくな。

他愛もないページじゃないか。どうしてこんな夢を見ている？

あア そっか、夢なのか。だから、こんなにもノアがいつも通
り。大好きなノアが。

俺はヴァニツシュ。そう呼んで。で……お兄さんの名前は？。

お兄さん言うな。同じくらのくせして……俺は文。

あや、か。うん、わかった。

ヴァニツシュ　　そうだ、リリスを追いかけていて、ぶつかって
血がおいしくて、ノアとはまた比べられなくて　　そのままヴ
アニツシュを押し付けられて、ノアに怒られて、初めのころはおど
おどしっぱなしで

思い出していたらキリがない。料理を作ったり、そのせいで嘔ま
れたり、伯母様が押し付けてきたり、ボロボロにやられたり、泣い
てたり　　楽しく、満ち足りた日々だった。

「痛々しいから」と、ノアに頼んでヴァニツシュの首輪を夜でも
視えないように消してもらった。本当は存在するのだが、見えない
というのはそれだけ安心してしまふものなのだ。

自分よりずっとずっと、周りのヒトは精神的にも肉体的にも強か
った。「守るよ」なんて、俺が守られてばかりじゃないか。

そして、誰かが囁いた。本を燃やして、殺して　　って。

誰なのかは思い出せない。思い出そうとすると頭の中がかすむ。
だからもう、思い出すことを半ばあきらめた。

ずっとずっと　　“闇”が恐ろしかった。一人でいさせられるの
なんて、たまらないほどに怖かった。

誰かが傍にいてくれただけで、あんなにもマシだったのに。どう
して怖かったのかは、自分でもわからない。

今は、真っ暗で独りぼっちだ。

愛した人と居たい。目を開けると全てが夢だったなんて、そんな
ちやちなオチでもいい。そんなことでもいいから、二人を返してほ
しい。

けど、待ってるだけじゃ解決は望めない。だから

*

*

*

鈍い色の翼が一对。アルビノカラーの文の背に、真赤にそれは咲

いていた。

何度かはためかせて血液を落とし、文は小さく溜息を吐いた。

悪魔のように雄々しく翼はためき、ハラハラと抜け落ちた羽が空を舞っていた。

「出し方がわからないな……だから出血するのか……」

「そんなもの出したところで、何か意味でもあんの？」

「この子の武器は「ヴァンパイア・ブラッド」というんだ。つまり、自身の身体に取りこんでいるものだから、自身の身体を操れるということになる」

「は……？」

跳ねるようにヴァニッシュと距離をとり、文は大きく翼をはためかせた。

刹那、散っていた羽根が、勢いを持ってヴァニッシュに襲いかかった。そのままで、ひとつひとつがナイフのように鋭利に

銃を構えていくつかは撃ち落とし、ヴァニッシュは柱の陰に逃げ込んだ。

「面白い！この子は本当に退屈しない」

「っ……ってえ……」

逃げ遅れたか、その後に撃ったのか。ヴァニッシュの脚や背には何本か羽根が刺さっていた。

ニコニコと笑んだまま、文は言った。

「当たればスパスパッと景気よく切れる。鉄塊だって真つ二つになるだろう」

「そんなもの使わないでよ……」

ほとほと呆れた。あんなもの、反則じゃないか。体中が痺れたように痛む上、羽根が痛すぎる。

笑いながらヴァニッシュに歩み寄って来ながら、文は銃を真つ直ぐに構えた。

「キミを屠る」

「っ、しまっ……！」

逃げられない。この距離では逃げたとしても距離をすぐに詰められる。

羽根を自力で足に刺さった分をいくつか引き抜き、ヴァニッシュは片膝について銃を構えた。

ガウンツ、ガウンツ。発砲音はすれども、文には当たることはなかった。

「残念。当たるわけないんだよ、君の攻撃なんて」

「っ……は……ふざけないでよっ……！」

やられるわけにはいかない。兄さんを殺すまでは絶対に

ゆらりと、影が文の背後に迫った。

「っ、おっと」

「何も感じずに殺す　そいつは俺が殺さなければならぬんだ」
大剣を振りあげたシルエツトが、逆光でヴァニッシュの眼に映りこんだ。

振り返ると同時に、ズブリと腐った肉の崩れるような音が鮮血とともに散った。

ほたたと左腕から血を流し、文は茫然とその場に立っていた。
すぐに刃を引き抜き、ヴァンはギロリと文を睨みつけた。

「……はあん。それくらいなら、特に警戒しなくてもよかったねえ」

「お前に殺されるくらいなら……自分で手を下す」

「いいアイデアだ。しかし　相手が私ということを忘れないように、ね？」

そう呟くと、文はヴァンを見上げて手をかざした。

ただでさえ弱っている。体も自由は効いていないはずだ。そんな体での化け物に挑むのは自殺行為にも程がある。そんなことわかっていくせに。

まだふらふらとしているのが目に見えていながら、ヴァンは再び剣を振りあげた。

「気に食わん化け物はもつと早くに殺しておくべきだった　っ！」
「楽しげだねえ、ヴァン。しかし、私はね　」

不敵に笑んだ文は、振り下ろされた剣を軽々と避けるとヴァンの背後に回っていた。その動きは肉眼では捉えられないほどに素早く、キーンっ。柱に刃が跳ねかえったその刹那であった

「逝ってらっしゃいませ、狼の頭領様？」

ギョーンッ

鉛色の銃弾は真っ直ぐに放たれ、スピードも衰えることなく狼の心臓へと。その間わずか数瞬のことであった。

痛みに表情を歪めるものの、ヴァンは剣を文に向けて精一杯振りあげた。

「道連れにしては品がない。この子に勝とうなんて百億年早いよ」

「が……はっ……」

グンと圧力を増して落ちてきた刃を文は、素手で受け止めた。当然ながら手の平は切れ、血が流れ出しているのだが。

そのまま刃を握って、文は容易くそれを折り曲げて粉碎した。

その光景を呑みこめずにいるヴァニッシュの前で、文はヴァンにさらに数発撃ちこんだ。

狼の頭領のがっしりとした体をもやすやすと貫き、目を見開いたまま彼は地面に崩折れた。

「ああ、嘆かわしい　私は昔、キミを愛していたよ。そこそこめんどくさくないほどにはね」

「……兄さん……？」

「君の手が煩わせないように私直々に殺して差し上げた。この子の能力は本当に未知数　」

自身の手を眺めながら、文はそう呟くように吐いた。

砕け散った刃の破片をつまみ上げ、ヴァニッシュは表情を殺して

文を見上げた。

「……殺す」

「あっはっはっはっはっはっは！どうぞ、ご自由に。私はいつでも待っているよ」

「嘔吐き」

人形のように言葉を紡ぎ、ヴァニッシュは柱の陰から姿を現した。ぴくりと小さく文は反応した。

「……私直々に、君も殺す。ヴァン亡き今、あの道化を演じる理由はなくなった」

「嘔吐き……あんたの言うことは嘘だ」

「なら、証明してみる。私の嘘がどこまで嘘なのかを」

ほたりと、花弁が一枚落ちた。

同時に放たれた弾丸は空を裂き、互いの頬を掠めて落ちた。

スタンドグラス・カラー

かすめ、弾き返される。どんなに“覚醒”して強くなっているとしても、いい加減体力の消耗が激しすぎる。

銃弾を避けて駆けながらリロードをし、ヴァニッシュは床に手をついて高く跳躍した。

口にくわえていた銃を手に持ち直し、ヴァニッシュは逆さに見える世界で文に狙いを定めた。

「おー……」

「っ、ざけんないでよ」

どうして笑う。笑いながら戦うなんて、真面目のかけらも視えない。

吐いた吐息をかき消すように引き金を引き、ヴァニッシュは文を見据えた。

「これでっ……」

「はい残念。学習しなさい」

かざした手の背後で目を見開き、文はそのまま降ってくる銃弾の雨を受けた。

まるで生き物のように 真っ直ぐに降っていたはずの銃弾の雨は、その軌道を曲げ、脇の花畑の中へと一斉に降り注いだ。

「……ははっ。満足して」

「うるさい」

いつの間にか文の視界から消えていたヴァニッシュが、声音も低く文の背後に回っていた。さっきの文のように。

気付かれるよりも数瞬早く、ヴァニッシュは文の右腕に噛みついた。

「っ……！？狼風情がっ……」

「悪いけど、結構限界なんだ。だから」

小さいころから、噛みついて引き裂いて。それが当たり前で、“

覚醒”を解く役目は兄さんだった。解けなくなっただけからは強制的に意識を飛ばしたけれど、それまでは。

離れないように文を噛みついたまま抱きしめ、ヴァニッシュは彼の腹部に銃口をあてがった。

「……私は消滅するだけだ。この子の身体が傷つくがそれでもいいのかな？」

「知らない。【吸血鬼】は殺せない」

「そう。なら、早く引き金を引いて」

ああ、ムカつく。この余裕も、笑みも。知っている気がして腹立たしい。

それに 殺されることを望んでいる そんな目をしていた。

噛みついた傷口から血を飲んでしまわないように注意しながらも、ヴァニッシュは引き金を引いた

「っ……ああ……痛い……」

「黙ってよ……その声は聞きたくない……」

知ってる ？けど、どうして？そんなわけないじゃないか。

いつにも増して香る硝煙の香り。煙を薄く放つ銃口には、散った血液がはつきりと残っていた。

動いてもいない心臓を抑え、文はヴァニッシュを振り払った。

「……我が夢は……幻惑にして狂気……ムーンエッジのその名において……死は許されない……っ」

「は……何言ってるの。あんたはもうすぐ……」

「死ぬことはない……死ねないんだ……ああ、神よ……私に祝福を……」

そう呟くように吐きながら、文はヴァニッシュに向けてまだ使える右手をかざした。

逃げる間もなく、文は羽を羽ばたかせた。

舞い散る羽根が、無数のナイフを出現させた。

「道連れ旅行。キミを生かしてはおかない」

「ふざけんなよ化け物っ……！」

逃げられない。どうあがいても射程距離に入るし、このまま離せばこいつは復活するかもしれない。【吸血鬼】の治癒能力の性能の高さは、十分わかってる。

覚悟を決めてさらに強く噛み付き、ヴァニッシュは文の首に尖った爪を立てた。

耳元で、微かに笑ったような声が漏れたのが聞こえた。

「上出来。キミは私とは違うんだね」

ほんの一瞬、時が止まったように感じた。

刹那、時が動き出し無数の羽根が自分と目の前の【吸血鬼】に向かって降りそそいだ。

痛い　肉を貫き、骨を刺し砕き、肌を引き裂く。逃げようにも離れられず、自分の血と相手の血が混じって溶けていく。

これを何と言うのだろう。阿鼻地獄とはまた違う。

心地良い痛みと擲掄するのに相応しい　そんな、奇妙な痛みだ。自分を引き戻してくれる、そんな痛み

*

痛みも何も感じなくなつて、もう何時間たつたんだろう。

寒いとか暑いとか、苦しいとか気持ちいいとか。根本的な感情の何もかもが崩れてしまった。

あれだけ派手に暴れれば、誰も来られないだろうとタ力をくくっていた。本当に誰も来れないくてとてもよかったと思っている。

さあ、片付けをしないと。

「いくら【吸血鬼】でも……これだけ大怪我なら死ぬよね……」

目の前に横たわる、紅の似合う麗人。そのヒトは自分を苦しめたのに　何故かひどく懐かしい。

ゆっくりと立ち上がり、ヴァニッシュは傷だらけの身体で文の襟首をつかんだ。

ズルズルと引きずりながら、どこまでも。窓から落とせば下は谷だ。【吸血鬼】は水に弱いから、このまま骨の髄まで消えてもらおう。

勿論　兄さんの望みだから自分も死ぬ。自分は生きようとしたのが間違だった。

幸せになんて、自分は向いていない。不幸の不幸のどん底がお似合いだ。そうでなくては化け物としての自分を全否定することになってしまう。

生きていた証を否定なんて　死ぬ方がずっとずっとマシだ。

「……は……」

「っ……！？何で生きてっ……！」

ぱちりと目を開けて、傷ついて死んだはずの文が目を覚ましていた。虚ろに視線は虚空をさまよい、やがてヴァニッシュを見つめたが。

焦っても手を離そうとはせず、ヴァニッシュは言った。

「何……！？僕よりも化け物なんて……」

「　おはよう。夜が明けるよ」

「うるさい！お兄さん……何でまだ生きてんの……僕、もう戦えないのに……」

勢力尽き果てた。これ以上戦うなんて無謀だ。

そつとヴァニッシュの頬に手を伸ばし、文は静かに笑った。

「ただいま　とてもとても、寒かったよ　」

「っ、話しかけないでよ！何で僕のことっ……知ってるはずなのに！」

「大好きな子を忘れるほど、記憶力は悪くないよ……ヴァニツシュ……」

「言わないで……言わないで……っ！お兄さん元に戻ってるよ……！！」

「ダメ？」

かすれたような声を上げ、笑顔を浮かべ。文は、じっとヴァニツシュを見つめていた。

イラつきを抑えようとせず、ヴァニツシュは文の襟首をつかんだまままた引きずった。

長く短く　そうして、時間だけが割れたガラスの破片のように突き刺さってなお進んでいた。

「……ヴァニツシュ」

「呼ばないで。頭痛い」

「……本当は“覚醒”なんてできてないでしょ？君みたいな臆病君が……できるはずない……」

「っ……その僕に負けたあんたが言うセリフ？」

話したくない、離したくない。二つはすれ違って交わって、距離をまたゆつくりと縮めていく

ニコッと笑みを浮かべ、不意に文はヴァニツシュの腕をつかんだ。それに慌てて文の襟首を離し、ヴァニツシュは壁に背を打ちつけた。

「……戻っておいで。俺は戻ってこれたんだよ。だから、君も」

「ふざけないで。僕は僕のままだし、戻ることなんてありえない」

「強情……体が思うように動かないのに……」

そう低く不満そうにつぶやくと、文は唐突に駆けだした。

驚くも避ける間もなく、ヴァニツシュはあっという間に文に手首を掴まれていた。今度はもがいても離してくれそうになかった。

「　血が足らない。もっと　もっと　もっと　！」

「あ……」

首筋に触れる唇。吐息は甘く、意識を侵していく。

ニツシュの脚を傷つけるばかりであった。

ふらつきながら窓辺に逃げ、ヴァニツシュは言った。

「この……“覚醒”を解かせはしないよ……そんなことなら、このまま　っ！！」

手を伸ばすのも遅く、ヴァニツシュは蒼い空へとその身を投げ出した。

刹那的に見えた笑みを追い、文も翼を広げてその場所から飛び降りた。

スカイ・ブルー

目も醒めるような、真っ青で美しいスカイブルー。吹き抜ける風が身を焦がし、真っ逆さまに奈落の底へ

薄れていく意識の中で、蒼い空には自分に手を伸ばす【吸血鬼】がいた。

愚かで馬鹿としか言えない。どうして追ってきたんだ、戦闘は終わったはずなのに。

僕の死で終わりを迎えるはずなのに。

「ヴァニッシュ

！！」

「……っ」

翼をはためかせて急降下。伸ばした手が、自分の頬を掠める。

空中でしっかりとヴァニッシュを抱きしめ、文はニコリと微笑んだ。

「捕まえた。もう離さない」

「

「……道連れして、あんたも死ねばいい」

「かも知れない。けど、君を守るためならそれでも悪くない」

そんな甘ったるい言葉を吐く余裕なんてないくせに。このまま落ち続ければ、谷へと落ちる。そうなったら、泳げない【吸血鬼】に勝ち目はない。

明けた空から燦々と 長く短い夜を終わらせるために、朝日が顔をのぞかせていた。

だんだんと元の姿に戻っていくヴァニッシュは、朝日を見ることが嫌って、文の肩をつかんだ。

震えるか細い声が、ヴァニッシュの喉から洩れた。

「……助けて……まだ死にたくないよ……！」

「俺だって死にたくないよ。だから、とっても困ってるんだけど」

「

朝日を浴びて抜け落ちていく漆黒の羽根。 おおよそ朝日のせいで

はなく羽根を使いすぎたことが原因だと思っただが。

息を淡く吐き、文は自分が案外高い場所にいたのだということを改めて確認した。

「最後かな」と弱気になりながらも、文はヴァニッシュの耳元でそつと囁いた。

「……もしも帰れたら、俺に一つプレゼントを頂戴」

「それ……今言うこと」

「今言わないと。俺の知ってる『ヴァニッシュ』が帰ってきたときに、ご褒美をもらうために」

「……いーよ。もしも帰れたら、何でもあげる」

「うん、ありがと。助かる見込みはないけどね」

真つ逆さまに蒼い空の中を落ちていく。止められず、翼は折れて散ってしまった。これではもう使えないどころか、ただ邪魔なだけだ。その邪魔な部分もすぐになくなってしまっただろうけれど。

強くヴァニッシュを両腕で抱きしめ、文は迫り来る水の音を目を閉じて聞いた。

昔から苦手な『流水』。あれは【吸血鬼】の苦手とするものの一つであることに変わりはない。鏡なんて比にならないくらいに、強い毒素を持っている。そんなところへ入ったら、この身体は溶けて消えてしまう。

いつか見た あのお嬢さんは確か、『人魚姫』って言ってたかな

瀕死の小鳥は二羽、羽ばたけずに今水中へとその身を投げ出した

ドブン 高い所から落ちた割に、音は少なかった。衝撃は大きくて当然だが。

息も続かない水の中。手を離せばヴァニッシュは生きられる

いや、もう意識も薄れているから離れた方が危険だ。

深い水の間。全身に急激に痛みが走り、熱りが覚めていくような感覚だった。このまま溶けて死ぬのかと、わかっていたのに痛みは遅かった。

「ヴァニッシュッ　　！！」

「あ……や……？」

もう死んだっていい。俺が死んでも、ヴァニッシュは生きてくれればそれでいい。それだけでいいんだ。

だから神様、どうかまだ俺を見捨てないで。

俺は地獄に落ちる体だからもう手を伸ばしてくれなくてもいい。でも、このヒトだけは。

どうにかなってしまいそうなひどい痛みにも耐えながら、文はヴァニッシュの頭を抱いて言った。

「ダイジョーブ　　守るよ　　」

* * *

結局、世界は何も変わらなかった。

いつも通り平穏を過ごす家族に、愛を語らうカップル。そんないつも通りに、少なからず憧れていたのは事実だった。平穏とは無縁、永遠に一人ぼっちのはずだったのに。

世界は廻る。廻っていた。自分が望まなくても、一瞬を永遠に続けることなんてしてくれそうにもなかったけど。

あなたがいてくれた時点で一人じゃなかったことにどうしてもつと早くに気がつかなかったんだろう。

昔から大好きだったのに。居なくなつた途端に発狂していたのに。

盲目すぎた　それを教えてくれたのがあの道化師だったのが腑に落ちないけれど。

私では、役不足だったか？

「ううん　十分。あなたはそれでいい。その為の名前　その為の存在」

君が喜んでくれたならよかった。私はもう、死にたいと願っていたからね。

「だからって俺の体まで取らないでよ……アレは聞いてなかった」

親しい友人と話すかのごとく、楽しくそして寂しげに。

文は、真っ直ぐに手を伸ばして息を吐いた。

「さようなら。ムーンエッジ」

ああ。今度はキミの番だ。キミが私の孤独を引き継ぐ　まだまだ永遠に。

消えかかっているもなお、はつきりと声は聞こえていた。自分の来る最後の時は、きっとまたこれを思い出すのだろう。

繰り返し繰り返し、終わらない連鎖。終わらせてしまおうと、願えども叶わずに

にこりと笑み、文は深く息を吐き出した。

引き戻されるような、あのときと同じ感覚。アレはもっと苦しくて腑に落ちなかったけれど

最後にもう一度、文は言葉を紡いだ。

「ありがとう

名捨てのお月さま

」

スカイ・ブルー（後書き）

翅 羽根

ムーンエッジ 名捨てのお月さま

晴れ晴れとおはよう

*

*

*

コポコポコポコポ……耳に優しいその音と、ほろ苦い大人の香り。静かに目を開き、一人の青年はぼうっとする頭を手で軽く押さえた。

「……朝……？」

「おや、起きたの？遅かったわねー」

くるりと振り向き、ポットを手にしてそのヒトは文に向かって笑いかけていた。

まだ覚醒していないからかぼーっとしたまま、青年はカーテンへと手を伸ばした。

見慣れた風景とともに、明け放たれた窓から室内に風が吹き込んだ。

「……帰ってきた……？」

「なあと寝ぼけてんのよ。早く目を覚ましなさい」

「伯母……様……」

体にうまく力が入らない。匂いだけはわかるのか、鼻がひくつく。自分の分のコーヒーをカップに注ぎ、マリアは青年の眠っているベッドに歩み寄った。

「おはよう、文。よく眠っていたわね」

「……っ……」

ああ、帰ってきた　そうだ、帰ってきたから自分はここに　！
頬をほころばせ、文はマリアに精一杯笑いかけて応えた。

*

どうやって帰ってきたのか、何をどうしてこうなったか　全く分らない。覚えていないのか、そもそもそんな事實はなかったのか　今思えば、現も幻も同じに感じる。

ベッドで眠っていて、気が付くと傍に伯母様がいた。これだけが今、わかっている。

仰向けになったまま、文は自身の腕に巻かれた包帯を眺めて言った。

「……傷だらけー」

「そうよ。全く……手当てするのは誰かわかってるんでしょうね、その傷だと」

「病人には優しくしてよ……けっこう頑張ったんだから」

「あら、どうでもいいわそんなこと。興味ない」

冷たく言い放ち、マリアは窓辺に腰掛けて髪をなびかせた。

黒のローブのようなドレスも一緒になびき、マリアは不敵に笑みを浮かべた。

「　勝つことは宿命よ。わかっていたからどうでもよかった」

「ああ、そういうこと……確信なんて珍しい」

「私は負ける賭事はしないわ。勝つから賭けた、それだけよ」

自信に満ちた発言と行動。この人はいつだってこうだ。

包帯だらけの身体を引きずり、文はゆっくりと体を起こした。

「……で。俺以外の大切なヒト達は？」

「とつくに起きてるわよ。下でリリスと話してるみたいだけど……」

「用事でもあったの？最近いろいろありすぎてわかんなさすぎ……」

「主にあなたのことよ。あー、疲れたー……心配して損したわよ、

文。元気じゃない」

「まあ、父さん譲りのタフだから」

実感がない。生きていることに対して、全く感覚がない。何故なのかは分からないけど、亡霊になってしまったようで。

マリアをおいて部屋を出て、文は階段を下りはじめた。

何やら声がするのに引かれ、花に集う蝶のように文はふらふらと

その方向へと寄っていった。

大切な人の声が聞こえる。姿は見えないが、ものの数秒で見えるだろう。

目に映っていたはずの、大切なヒトの美しさ。見えていたのに、わかつていたのに

歩みのスピードは速くなり、徐々に鼓動が高まっていく。心臓は動いていないはずなのに、それでもドクドクと血を走らせて

強くドアを開け、文は部屋に飛び込んで腕をめいっぱい伸ばした。
「っ！？文っ……………！？」

「何で……………まだ寝ててもいいのに……………」

「ノアっ……………ヴァニッシュ……………！！」

飛び込んで抱きついたからどちらに抱きついたかは分からない。けれど、暖かな感触は

不意にはたと気が付き、文は恐る恐る顔をあげた。

「……………あ」

「レディに抱きつくなんていい度胸ね、バーロー。死んでくれる」

【吸血鬼】なら暖かいわけがない　つまり、ヴァニッシュかと思つた。しかし、アイツならもつとオーバーリアクションをとるはずだ。

リリスのイラつく声を耳にし、文は慌てて彼女から離れた。

「リ、リリスって知らなかったから！知ってたら抱きつかない！」

「失礼な……………怒らせたいの？」

「いやいや……………あれ、二人は？」

「……………ここだ、馬鹿」

「バツカじゃないの……………」

きよろきよろと文が辺りを見回すと、同時に二人の声が背後から降ってきた。同時に、一発ずつ拳も。

慌てて振り向き、文はにひゃつと力の抜けた笑みを浮かべた。

「おはよー、二人とも。起きぬけ早々愛が痛すぎる……………」

「うるさい。こちらら、ためえと同じほどに傷だらけなんだ」

「そうそう。結構痛いんだからな……」

不機嫌そうだが、あくまでいつも通り。おかしく感じるほどに。包帯を巻いた手で文の手をつかみ、ノアはリリスに背を向けた。

「話は終わりだ。文が起きた以上、勝手なことは口出しさせない」

「勝手にして頂戴。ヴァニッシュまで……」

「文句は言わせないよ。リリスのことは好きだけど、僕はこっちを選んだんだから」

何やら自分の知らないところで話が進んでいるようだ。といっても、憶測はつく。

二人に腕を退かれたまま、文はそのまま外まで連れ出された。風が強いらしく、さっきよりも冷たく木々を揺らしていた。

「……文」

「ん 何？さっき、リリスと何か話してた？」

「ああ。てめエのことについてだ」

「俺？なにかやったつけ……」

まだはつきりしない。昨日自分が何をしていたのか、何ができなかったのか わからない。

少々表情を曇らせて、ヴァニッシュは言った。

「……その、さ……昨日のこと、頭に残ってる？」

「あんまり……ごめん、本当にぼんやりしてて……まだ寝てんのかなー？」

「茶化すな。真面目な問題だ」

と言われても、わからないものは解決のしようがない。思い当たらないものは、まだ脳が眠っているんだろう。

髪を押さえて、ノアはふうと息をついた。

「……ヴァニッシュはもう、ここから離れることはないだろう。てめエがここから居なくなることもないし、ずっと前のままだ」

「え……何、どういうこと？」

「こいつは、リリスの下からも自由になった。つまり、戻るところ

がなくなつたというわけだ」

「けど……戻るって、ここが居場所だろ？」

「てめエに渡した時点でそうなるはずだったんだが。正式に契約を交わしたというわけだ」

譲り受けたということか？記憶がぐちゃぐちゃで、どこからが正しいのかわからなくなってきたている

ん、と言葉を詰まらせ、文は絆創膏を張ったヴァニッシュの頬を指で撫でた。

「っ、何！？」

「……あ……」

そうか。そうだった、どうして忘れられたんだ。

ようやく覚醒し、文はヴァニッシュの首に両腕を絡めてその体を預けた。

不意な重さによたつき、ヴァニッシュはそのまま地面に尻もちをついた。

「あ、文……？」

「……俺……ヴァンを……」

「っ　それ、僕が殺したんじゃないか。文は悪くない」

「俺が体を奪われたから……だから……」

「いいんじゃないか、あの結末で。しなければ、こうして日の目を浴びることもできなかった」

そう吐き捨てるように言い、ノアは陽の下で大きく伸びをして見せた。

ぽかんと口を開けてそれを眺め、文はノアに指摘した。

「ノア、お日様……大丈夫なのか？」

「は？ダメに決まってるだろう」

「じゃあなんで……」

「　川で溺れていたためエらを体を張って助けたのはどこの誰だと思ってるんだ」

何事もなさそうにそう言い、ノアは文の手を掴んだままヴァニッ

シユを睨んだ。

むっとしたように、ヴァニツシユももう片方の手を離すまいとよ
り強く握った。

「仕方ないだろ！？僕だって、“覚醒”が解けるまでは自由に動け
なかったんだから。それに、傷ついただけで来なかったあんたに言
われたくない」

「文句を言うには十年早い。出直してこい、青二才が」

「黙れおっさん」

「待てって！何で喧嘩するんだよ……」

呆れたように思うのに、何故か笑いがこみあげてくる。くすぐつ
たいような、変な気分なのは間違いないが。

文を一斉に見やり、二人は同時に舌を打った。

「似てるじゃん、二人とも。性格全然違うつばいのに」

「うるさいぞ、文。こんな獣と似てるなど、心外だ」

「はあ？おっさんと一緒にされる僕の方が不憫じゃん」

晴れた空、明るい世界。こうやって笑っていられることが、こん
なにも素晴らしく楽しく、煌めいている　まるで、親しき友人の
その上

と、不意にノアがぎよつとしたように文の顔を覗き込んだ。

「おい、文…… どうしてここで泣くんだ」

「え……？あ、ホントだ…… 何でだろ……」

ボロボロとみつともなく、突然あふれ出してきた。こすつてもこ
すつても拭いきれないほどに。

しまいには諦め、文は涙を流したまま二人と繋いだ腕をぶんぶん
と振った。

「守れなくって、ごめん」

「……守ってもらったよ。離さないでいてくれたから、今こうして
ここにいられる」

「てめエが自分を責めることはないだろう。悪いのはこのアホ犬だ」
「喧嘩売ってんの？しつこいと嫌われるよ」

「てめエよりかマシだろう。文は従順だからな」

また始まった。止めてもキリがないが、放っておいたら自分に火の粉が飛ぶ。

逃げるように身を翻し、文は空を仰いだ。

「青すぎ。流石に眩しいかな……」

「……文。てめエ、俺を愛しているとかほざいてたよな？」

「っ、まあ、うん……ダメ？」

「いや、別に。喜んだら襲ってやろうかと思った」

恐ろしげもなくさうろと言いつ放ち、ノアはようやくいつもの黒い蝙蝠傘を挿した。

逃げる間もなく、ノアの手が文へと伸びた。

晴れ晴れとおはよう？

さらりとした髪が自分の肩に垂れ、ノアの声が低く艶やかに耳をくすぐった。

「ははっ……っかまーえた」

「っ、ノアっ……？熱に侵されすぎたんじゃないか……？」

「大丈夫、平常心だ。俺はいつもこうだろう」

心配になるほどに熱に浮かされている。柄にもなく太陽の下に躍り出るからだ。

傘でヴァニツシュに見えないことをいいことに、ノアは文に向けて静かに微笑んだ。

「好きだよ。今のこの瞬間のためエが」

「……ノア、もしかして偽物？」

「本物だ。失礼な……誰もいないから言っただけだろう」

「僕がいるんですけど。忘れないでくれる？」

ガツと、ノアの傘にヴァニツシュの爪が立った。

無言でバキバキと手を鳴らし、ノアはヴァニツシュをいきなり蹴りあげた。

ぽかーんと、口を開けっぱなしにしている文一人が取り残されると、文の肩に手が乗った。

「あらまあー、やってるわねえ」

「っ、いつの間に……そう思うなら止めないと」

「あなたがどうぞ。私は嫌よ、惚気られるのって嫌いだし……それに、私の理想はもっと崇高で艶やかだから。こんな愚民どもにかまっている暇はないのよ」

「じゃあ帰りなよ……」

高尚なのに高慢な魔女様。美しいのにどうにも厄介なのは、年のせいだろうか。

くすくすと笑いながら、マリアは箒に腰掛けた。

「まあ、いいわよ。平和が何よりって、退屈な言葉もあるくらいだから」

「……そう？退屈って、それほど悪いことじゃない」

「そうかしら。ああ　眩しい。リリス、帰るわよー」

「あーい。了解」

ひょこりと顔を出し、リリスはマリアの乗っている箒の後ろにひらりと飛び乗った。

風を巻き上げ箒に乗り、マリアはバチンと文に向けてウィンクした。

「　またね。孤独じゃなくなってしまったけれど」

「嫌そうなのは、強がってるって思ってもいいわけ？」

「何言ってるの。私は、孤独なあなたを監視するのが任務だったのよ？それが……もう、寂しくなくなってしまった。私の役目もおしまいよ」

「……俺、寂しい時なんてなかったぜ？」

いつだって　一人になったことなんてなかったじゃないか。それよりも、向こうにいるときにノアがいなくなった時の方がずっとずっと寂しい思いをしていた。

この城へ来てからは、ずっとずっと寂しくなんてなかった。そんなことを考えるまでもなく、ノアをただただ愛していた。

じつと文を見つめ、マリアは小さく舌を打った。

「　小憎たらしい。あなたはもっと、不幸だと思っていたけど」

「

「マリア。そろそろ、行くよ。まだ後片付けが残ってる」

「ああ、そうね。それじゃ、文。また今度、お茶でも出してね」

「了解。伯母様、ありがとー」

「……どういたしまして」

照れたようにふふつと声をあげて笑い、マリアは箒に腰掛けたままリリスとともに虚空へと飛び立った。その姿は、【魔女】の名に相応しく

それを笑って見送り、文は二人の喧嘩を止めに入った。

「なあなあ、もうそろそろやめろって。二人ともいい年なんだから……」

「こんなやつと同じにしないでよ。おっさんめ」

「おっさん言うな。このボケが」

傘を破る勢いで、でも地味に口喧嘩を続ける。それが二人の似ているところだと思うのだが、それを言うと怒られる。ついさっきのことじゃないか。

二人を面白そうに眺めつつも困ったように苦笑をして、文は言った。

「俺は、二人とも好きなんだけどな……」

「っ……ふざけるな。てめエの一番は俺だろう!」

「何言ってるの? 文の一番って、僕以外にあり得んの?」

「あのなあ……言っただこと忘れたのか? 俺、『二人に一途』って言っただろ?」

そんなに遠くない記憶だ。二人もわかってはいるはずなのに。

傾き始めた暑い昼の太陽は、燦々と未だに降り注いでいた。

生命は煌めき、淡く色を落とすかのように。

その太陽を背に受け、ノアは傘を肩にかけた。

「……いいや。てめエは俺のモノだ」

「は!?! ノア、本当に頭がイカれてないか!?!」

「大丈夫だ。てめエの愛する、いつもの俺だ」

キラキラとした何かが、ノアの周りで舞っている。こちらをじっと見つめるその熱っぽい視線は、まるで童話の王子様のように見える。

一瞬声を詰まらせた文に、ヴァニッシュの手が伸びた。

「っ、ひゃあああ!?!」

「文……僕のこと、好きって言ったよな……?」

「っ……うん、言った……」

大好きな狼の子。それもまた変わらない。この髪も、何もかも

大好きだ。

首の後ろにフードを垂らし、ヴァニッシュは文に言った。

「……僕を助けてくれたのは、紛れもなく牙城文。だから、大好きなんだ」

「もう、かぶらなくてもいいのか？」

「まだ、人前では嫌だけど。文なら……何されても大丈夫」

「……そっか」

純粹で、もう充分に傷ついた。もうこれ以上傷つけてたまるか。

「守る」と宣言したのに守れていない自分が嫌でたまらないが。

ぐいっと、ヴァニッシュから引き離すかのようにノアは文をその腕に抱いた。

「渡すか」

「……ノア、終わんないからやめろって。ずっとこんなの繰り返す気か？」

愛されてるなあと、今更ながら自覚する。二人にこんなにも、近く熱く、そして

ふっと、ノアはその言葉を聞いて文の腕を離した。

「……鈍いな」

「は？なんか言った？」

「いや、別に。で　てめエ、俺たちに話でもあるんじゃないのか？褒美がどうのこうの……」

「あア　！ごめん、完っ全に忘れてた！」

言われてようやく思い出した。大切なことが抜けているじゃないか。

小首を傾げ、ヴァニッシュは文に尋ねた。

「それさあ……僕にも言っただけじゃなかった？」

「二人共に言った。何言っても許されるか？」

「ある程度は。で　どんな頼みだ」

ジリジリと蒸し暑く、陽は傾き落ちていく。夜に近づき、そうして月が見え始めてくる。

ニツと、文は二人に向けて笑んだ。

「明日話すから、それまで待つてろよ？ ちゃあんと待つてたら教えてやる」

「は？……今じゃダメなのか？」

「用意とかあるから……うん、やっぱ明日がいい」

「そう。りょーかい」

大したことじゃないんだが。少しでも、サプライズと感謝の気持ちを多く伝えるために。

ざわつく風を聞きながら、文は目を閉じて息を吐いた。

＊

たくさんの感謝と愛情と、そしてこれからも一緒だからその分も込めて。精一杯、今自分にできることを考えて、深く深く焼きつくようなことを。永遠に愛していられるように。

考えてみれば間違っていた。このままではいけないのに、もっと早く気が付くべきだった。

蒼白の、耽美で麗しい月。ミッドナイトブルーの空は星をちりばめており、まるで天の川さながらであった。

窓辺に降り立った一匹の【吸血鬼】は、開けっぱなしの窓からその中へと侵入した。

微かに聞こえる寝息の音。足音をさせずにその枕元へと行き、そっと薄いタオルケットをめくる。

「おはよう」

もちろん、返事なんて期待していない。これから起こすのだからトントんと肩を叩くと、ゆっくりとその瞳が光を入れ始めた。

「……え……何してんの……」

「おはよう、ヴァニッシュ。月のある晩は、【吸血鬼】に襲われるのが定石だぜ？」

「……それはお嬢さん限定」

眠い目をこすりながら、ヴァニッシュはそう言った。

目を丸くして笑い、【吸血鬼】はくりとその場で回って見せた。
「　　憐れ哀れな、血に飢えた獣にございます。どうか、その血を分けてくださいまし」

「何それ、変なの。誰かに影響受けた？」

「とあるペテン師に。あのヒトの名前をもらったから、真似してみたくなつたんだよ」

【吸血鬼】をやめた【吸血鬼】。あのヒトは美しく儚く、死を望んで死を受け入れた。それだけでも十分凄いと思うけど、そのヒトの名前をもらってしまった

膝についてヴァニッシュと同じ目線になり、【吸血鬼】は手を差し伸べた。

「……これは俺の独断なんだけど、ノアに怒られるかな……嫌ならそれでもいいから」

「……重い話？」

「ちよつと。ヴァニッシュと俺たちの寿命って違うから……その話」

「ああ　うん、わかった」

そもそも考えればわかる話だが。物事が多すぎてそこまで頭が回らなかった。

耳をぺたんと垂らしたまま、ヴァニッシュは口籠りつつ言った。

「……一緒にはいられないんだろ。わかってるよ」

「……かつしこーい」

「茶化さないでよ。で　追い出すために？」

「違う。俺は、あんたを離す気はない」

「だったら、どうして来たのさ。そのつもりがないなら、ここに来ることもないだろ」

「あるよ。正当な、俺の理由」

お前がそうして不安そうに見つめるから。あらぬことを口走りそうで怖いんだけど　言わなくちゃならない。

にこりと、できるだけ優しく笑み、言葉が吐かれた。

「同じ、永遠の命を持てばいい」

今晩はミッドナイトブルー

*

ふわりと舞い降りた、闇空の下。魔法を使ってもこれだけかかったのは二人分の重みに箒が耐えられなかったせいなのか。それとも力の使いすぎか。どちらにせよ、思わしき事態ではない。

ひらりと箒から飛び降り、【魔女】はうんと背伸びをした。

「あーあ……疲れたあ」

「何言ってるの。操られるだけの魔法使いのくせに」

「うん？文とヴァニッシュに久々に会ったから、嬉しくってさ」

「魔法、完璧じゃないからいいんだけどね」

そう言って、リリスは箒を掴んで傍にあった大木を箒にまたがって上った。

居る　ずっとずっと、文達の下へなど行かなかった【魔女】が。

「　　こんばんは、【魔女】様」

「ん　　あら、早かったわね。もう片付いたの？」

「一応ね。で、いい加減アレと居るのが嫌だから来たの」

ここまで来るのに結構かかる。一体何をしにここまで来ているのか、その真偽を問いたい。

両手で水晶玉を抱えて鳥の巢の隣に座り、マリアはニコリと微笑んだ。

「……『誰が殺したコマドリを　私よ　と雀が言った』」

「マザーグースね。って、何か関係あるの？」

「魔法の呪文よ。あのマザーグースってのはね、呪文の総集編。知らなかった？」

「……ただのお伽噺よ？」

「いいえ。まあ、見てないさいな」

ただ静かに微笑み、マリアは目を閉じて祈るように言葉を吐いた。

Who killed Cock Robin?
I said the Sparrow,
With my bow and arrow,
I killed Cock Robin.
All the birds of the air
Fell a-sighing and a-sobbing,
When they heard the bell toll
For poor Cock Robin.

『誰が殺したコマドリを 私よ と雀は言った
私の弓矢で 私が殺した』

『かわいそうなコマドリのため 鳴り渡る鐘を聞いたとき
空の小鳥は一羽残らず 溜息ついて泣きだした』

水晶玉を抱いたまま静かに口を閉じ、マリアはゆっくりと目を開いた。

「魔法の呪文 実はね、A君に少し前から頼まれてたのよ。まあ、成功するかどうかはあの子の力量次第だけど」

「……だからって、あんな人形よこさないでくれる。完璧じゃなくてよかったけど、貴女なら完璧にだってできたでしょ？」

「完璧にして見分けがなくなったらどうするのよ。その為に、わざと名前をインプットしておいたのに。他は私とそっくりだけだね」

そう魔性の微笑を浮かべながらマリアは言った。あどけなさを演出するつもりだろうが、そんな要素は全くなさく。

ため息をつき、リリスは言った。

「処理するわよ。内蔵された魂を消しさる」

「どうぞ。いつもありがとね」

「私にしかできない仕事だもの。自分が大っ嫌いな原因だけどね」
吐き捨てるように言い、リリスは箒に乗ったまま地面へと降りて行った。

透き通るような水晶玉の中をじっと見つめ、マリアは占い師のように優しくその表面を撫でた。

深淵の淵のように暗いその世界からは今、一筋の光が漏れ出していた

*

「同じ、永遠の命を持てばいい」

その言葉を聞き、はっと、嘲笑するような声がヴァニッシュの喉から洩れた。

「馬鹿にしてんの？僕、あんたとは違うんだけど」

「知ってる。そんなこと言われるまでもない」

「じゃあ、言わないでくれる。それとも他に案でもある？」

わかってない。わからせてあげたいのだが、わからせるのが難しい。

肩に羽織ったマントを翻し、文はヴァニッシュの頬に指を滑らせた。

「【吸血鬼】になればいい」

「は？文……頭でも打った？大丈夫？」

「ダイジョーブ。で、ヴァニッシュはなりたい？なりたくない？」

「根本的に不可能。種族が違う」

吸血行為をした相手も【吸血鬼】になるのは、ほとんどあり得ない。100%相手を仲間にしてしまうのは、どんなに能力が強くてもその血を元から持っていないと不可能なのだ。それくらいは常識として流通している情報だ。

そう言うと思っていたと言わんばかりにタイミングよくニツと笑

んで見せ、文はぐつと顔を近づけた。

「俺を信じなよ。絶対にうまくいく　けど、ちょっと痛いかも…

…」

「ちょっとじゃ済まないって顔しながら言わないでよ……」

「下手なんだから仕方ないだろー。つか、痛いのが嫌いだったっけ？」

「……ヒトをマゾみたいに言うのは心外だけど……文なら許せる」

「そっか。まあ、なりたくなかったらならなくてもいいよ。その代わり、死んだら墓の前ですつと泣いてやるし、忘れない。それだったら死ぬのもいいんじゃないか？」

「殺したいわけ？ 魅力的だけど、それじゃ僕はあんたの泣き顔見れないじゃん。それにあの堅物とずっといるってことだろ？」

「それはね。で、結論は？」

答えなんてどっちでもよかった。どの道、これからしばらくは一緒に居られるし、今決めてもらわなくてもよかったから。もつとつと、後でもよかった。

月光を遮るカーテンを腕を伸ばして開け、ヴァニッシュはムツとしたように言った。

「……なれるなら、なりたいよ。でなきゃ、独り占めできる確率減るし」

「変な理由ー……それ、痛いのも我慢できる？」

「激痛だったらぶん殴る」

「それじゃ諦めな。おやすみー」

そう言っただけで部屋を出て行こうとした文の肩をとつさにヴァニッシュはつかんだ。

ゆっくりと振り向き、文は小さく溜息を吐いた。

「　覚悟しなよ？」

「っ……いいよ、わかった。覚悟でも何でもするから　見捨てないでよ」

その言葉を待っていた。絶対にこう言うってわかっていた。でなきゃ

や離れたりしない。

少しの恐怖に震える声に、文はただ笑っていた。伸ばされた手にびくつくヴァニツシュの頭をそつとなで、文は尖った牙を見せて言った。

「いただきます」

「ッ！！」

何か、声が聞こえた気がした。

両肩を掴んで抱き寄せたその体の首筋に、紅く線を引くように。牙は白い肌をなぞり、ほたたと血が流れ出す

貪るように首筋に噛みつき、文は血を吸い尽くさんばかりに喉を鳴らした。

激痛　なんてそんな、生半可なものじゃない。【吸血鬼】になれるのは、五十%くらいしかない。それを考慮しても、素早く血を抜き取る必要がある。ヘタな自分よりはノアにやつてもらった方がいいのだが、あいつはあいつでヴァニツシュを故意に殺しかねない。体が芯まで冷えて、力も抜けていく。死なない程度に血を吸っているつもりでも、そのギリギリまで吸わなければいけない。

くつたりとベッドに倒れ、ヴァニツシュは文の腕を掴んだ。あまり力も入っていないかったが。

「あ……や……っ！痛いって……！！！」

「んッ　我慢するんじゃないかったのか？」

「けどっ……」

「……ごめん、我慢して」

苦しめたくない。笑っていてももらいたいから血を吸って　そんなこと、望まれないわけないだろう　？

まっさらなシートに口端からこぼれる鮮血を垂らし、真赤に真赤に染めていく。終わらなくて終わりが欲しくて、それでもまだまだ離れたくない。【吸血鬼】としての性が、憎らしくうめしい。

もっともつと　勝手に体が求めるんだ。ヴァニツシュの体温

と、その全てを

*

ようやく離れることができたのは、夜はもう明けかけていた時だった。

手の中に残る体温は暖かく、噛みついて食ったのは記憶に新しい。心はまだ熱く、流れ落ちる汗には、ところどころ血をにじませていた。

腕の中でぐったりと倒れている狼の子を見やり、文は口元を拭いた。

「……ごちそう様。おいしかったよ」

「……ッ……馬っ鹿野郎　！！」

「あははー、罵ってもいいよ。君が望んだことなのにね」

否定させない。愛してるって言葉は、嘘なんかじゃ言えないのだから。

ゲホゲホと咳き込んで血を吐き出し、ヴァニッシュは文の首に腕を絡めて起き上がった。

「……唇も……首も……体中痛い」

「ノアにはもつときつくやってるよ。これでもゆるい方」

「いつもの……アホ面は？僕なんかこんなことして……！！」

「許してよ。我慢できなかったんだから」

ちゅ、と、音を立てて唇をふさいでみる。これでまだ反論するのなら、次は容赦なく喉を噛み切ってもいい。

はだけた肌に紅い世界。垂れる血液は、舐めとっても足りない。愛おしさが体温で伝わる

唾液と血液でねとつくキスを交わし、文はヴァニッシュの頬を何度も手の甲で擦った。

「……無様で、他愛ない。大好き」

「繋がらないワード入れないで。噛みつきまくって、馬鹿でしょ」

「それでも綺麗な声だった。聞いていて、興奮するくらいには」
「うるさいよ、ド変態。鼻血垂らしてたくせに」

「すぐ止まったでしょーが。【吸血鬼】が出血なんて笑えない」
「笑いながら言うな。ニヤニヤニヤニヤ……」

「笑いたくもなるのだ。こんなにも愛おしく、かわいらしい 【吸血鬼】を前にしては。」

軽く髪を掻き上げてその額にキスをし、文はヴァニッシュの齒を指で撫でた。

「……これが、血を吸うためのものになったんだよ。噛みついて引き裂くものじゃない」

「つまり……【吸血鬼】？」

「そう。どれだけ傷つけても、すぐに再生する ある程度までは」
「……そっか」

ペロリと腕に付着した血を舐め、ヴァニッシュは目を伏せた。
が、不意に甘い囁きが、耳をくすぐった。

「悪いね。俺、結構血が足りないんだ これじゃ、ノアの相手できない」

「っ、じゃあ、僕一人を愛してよ!!」

「戯言。俺は二人に一途なんだ、それを承知の上で、俺にされることを望んだんだろう？」

「……納得もしてるし、後悔はしてないよ。悔しいだけ」
優柔不断とか、そんなことじゃない。もっともっと、深く面倒く

さい 文にしか分からない葛藤やめちゃくちゃな理論。それに付いていくと決めたからには、イケるところまで。

そつとヴァニッシュを離し、文は血まみれのシーツをまとめて抱えた。

「……ちよつと噛み過ぎたかもなー。くらくらするようだったら休んどけよ？」

「遅いよ、その忠告……ものすごい気分悪い……」

「人間と違って半分以上なくなっても死なないけど。それじゃ、お

やすみ」

くるとターンを決め、文は音を立ててドアを閉めた。

一人きりになった部屋の中、ヴァニッシュはそっと自分の八重歯に触れてみた。

尖っていて、触るだけでも危うい　けれど、文と同じ　それだけで満足しているのはきっと、重症なのだろう。

体中にできた噛み傷が徐々に治っていくのを眺め、ヴァニッシュは枕に顔を埋めた。

手を差し伸べて

＊

タンタンタンと、軽く重く、足音は沈むように鳴りながら床板を軋ませる。

シーツを置いてきた代わりに紅茶を淹れ、文は屋根裏へと向かった。

部屋数は足りなかった　というよりも、物置と化している部屋が多すぎた。あの先代の趣味が骨董品収集なのだから仕方ないと放っていたのだが、ヴァニツシュが来てマリア伯母様も今後もしも泊まるようなことになればいい加減片付けないといけない。

脚で屋根裏のドアを押し開き、文は微笑みながら言った。

「入るよー、いい？」

「入ってから言うな、アホ」

窓辺に腰掛けていつものように読書。いつもと同じポーズ、同じ姿

サイドテーブルの上に盆を置き、文は角砂糖の瓶を開けた。

「何個入れる？俺は三つ入れるけど」

「同じでいい。入れなくてもいいぞ」

「甘いのが嫌いだもんない、ノアって。了解」

二つのカップに紅茶を注ぎ、片方には三つ。もう片方には、六個ほど入れさせてもらった。

本から目を離さないノアへ大量の角砂糖の入ったカップを渡し、文はニツと笑んだ。

ありがとうと言ってカップを受け取り、ノアは熱く湯気のたつカップの縁に口をつけた。

「っ！？」

「どう？旨いだろー？実はな、ダーズリンからジャスミンティーに変えてみたんだよ。苦いけど香りがいいよなーって」

「……殺すぞ」

「あははー、バレた？」

馬鹿なふりをして、砂糖をさらに足す。ぽとんぽとんと音を立てて、カップの底に角砂糖が沈んでいく。

言葉を失ったように呆然とカップを眺め、ノアは読みかけの本をしおりも挟まず置いた。

「……いつかの綿あめみたいな味がするが」

「おお、覚えてたんだ。不味いとか言ってなかったっけ」

「甘味が嫌いなんだ。てめエがどうしてもというから食べたまでであって」

「はいはい。じゃ、これもどうしても」

人の食べ物嫌い、人が嫌い、外が嫌い、太陽が嫌い、人の作りだしたものが嫌い、何もかもが嫌い、好きなものは

角砂糖の一つを指先でくると弄び、文はノアの唇にそれを押し付けた。

「甘いの、嫌いなんだろ」

「行動と言動が伴っていないな。てめエ、何を考えて」

「あはー。ほら　ノア、口開けてくれないと襲うよ」

「色々と間違っているぞ。大体てめエ、あの狼を変えたらうが」

「情報早いね。見てたとか？」

「勘だ。てめエに意見する気はないし、あいつも同意の上だから構わんが」

そう言葉を吐き、ノアは角砂糖を文の指ごと口に含んだ。ぷつつと指先が歯で切れ、数滴紅く血が流れた。

「……折角治したのに」

「何度も何度も、てめエの血を飲み続けて　治らなくなったって、不満なんてないくせに」

「愛してる。だから許せるんだけど　わかれよ」

突然表情を失くし、文はノアの首に両手をかけた。

強く力を入れ続け　小さく音が鳴った。

ふっと笑んで、ノアは言った。

「そうして俺は　てめエのように翼を生やして窓から飛び立てばいいのか？」

「っ……何それ。当てつけか」

「勿論。ヒトの首を黙って折るようなやつには、お灸をすえてやる」

文の力が緩まったその一瞬を見計らい、ノアは片方の腕で文の身体を抱き寄せた。

コキツと音を立てて折れた首を戻し、ノアは静かに文の耳元で囁いた。

「　殺してやろうか」

「……殺せないくせに。ノアは、俺がいないと生きていけない」

「わかってるじゃないか。なら、どうして笑わない」

「笑ったら、ノアに馬鹿にされる」

そう言いながらも、こんなことを言った時点でもうにやけ始めている。ノアのこと好きすぎている自分は今も、末期なのだろうか。ぼそりと、ノアは静かに何かを囁いた。

「は……？」

「だから、キスしようと言ったんだ。聞こえなかったか？」

聞こえたとか聞こえなかったとか、そんなことはどうでもいい。

問題は何を言ったか

ただ静かに笑ったまま、ノアは文の唇に指を滑らせた。

「俺には文、てめエが必要なんだ。どんな世界よりも、ずっとずっと美しい」

「ノアお前っ……首折ったから怒ってんのか！？だからそんな恐ろしいことっ……！」

「いいや。てめエを愛している　ただそれだけだ」

くっと思指先を顎にかけて上げられ、文は嗚咽に似た声を漏らした。

サラサラと風になびく黄金色の髪を垂らし、ノアは文の頬に軽くキスをして見せた。

「奪われたくないんだ。あの狼にためエを奪われるのが、たまらなく怖い　わかるよな？」

「わかるかよ……だって、ノアは……」

「ためエがいなければ、きっと今頃生きているお偉方とともに荒らしまわってるだろうな。ためエは、俺の生きている理由だ」

「……そんなの、卑怯だろ」

この言葉を聞くのは遅すぎた。今、心は真つ二つだ。どちらか片方を愛することなんてできそうにない。

ノアの腕を払いのけ、文は目を閉じて唇を噛んだ。

「その言葉　嘘じゃないなら、願いを叶えろよ」

「あア。“ご褒美”か」

「……ヴァニツシュにも言うつもりだけど。先に、ノアに言うておいてもいいよな　」

宣言なんて大層なものじゃない。このまま　キスして

噛みつくようにノアの首筋に牙を立て、文はまた喉を鳴らした。

少々表情を引きつらせ、ノアは文に言った。

「またヘタになったな……　もっとうまくやれ」

「無理。ヴァニツシュよりは激痛にしてるけど」

「何の気遣いだ。慣れたが、うつつうしい」

文を無理矢理に離させ、ノアは細く血の垂れる口端を舌で舐めた。すっかり冷えてしまった紅茶の香が、潮風に混じって部屋にたちこめた。

「珍しいな……海からの風か」

「もうすぐ秋だから……そしたら、あんまり部屋の中でも薄い格好はできないかな……」

「知るか。【吸血鬼】なのに風邪を引くこと自体おかしい」

甘く甘く、溶けた角砂糖のように。唾液と血液と紅茶と　それから、全ての何かに対して。

無駄と思われる、倒錯的で意味のないキスに抱擁。愛情なんて目に見えないものを信じているとも思えない。なのに、離れがたく辛く苦しい。

ただ何度か苦しそうに息を吐くものの、ほとんど呼吸なんてしていない。心臓が動いていないのだから。

舌を絡めるような深いキスを交わし、文はノアを強く抱きしめた。
「起きようか。俺の願望を叶えたい」

「……もう少しこうしていたいかな。独占できる時間は長くない」

「あははー。そーだねえ」

「馬鹿に戻るな。俺だけを見ていろ」

見ていたいけど 叶わない。見つめていると惑わされる。心がおかしな方向に動いてしまう。朝から体を舐められ自主規制レベルのことをするのはまだ良心が許さない。

にぱつと笑んで、文は紅茶をぐつと飲み干した。

強い甘い香りに、舌が痺れるようにノアの血の味を思い出させた。

*

森の真ん中、世界が傾き月は泣いて沈んでいった。

何も無いなんて誰が言った。喧嘩するよりは何もなく、ひっそりとした日陰でいる方がずっとずっと楽しいじゃないか。

チクタクチクタク。針は回ってくるりくる。終わらない世界に言葉はない。

朝日を遠目に眺めている“マリア”に近づき、リリスは箒を機に立てかけた。

「……おはよう。綺麗な朝ね」

「あら、リリスいたの？どうかした？」

「おやすみ」

油断している今なら、叶わないことも叶う。したくないことでも叶う

“マリア”に急いで駆けより、リリスはその頬にキスをしてみせた。

「……なん……で……？」

「……だから大っ嫌いなだよ」

カチリ、と歯車が最後の音を立てて止まった。

足元から灰と化して消えた“マリア”を見つめ、リリスは思い切り木を蹴りあげた。

「っ……あのねえっ！！私、嫌って言うてるの！！！！わかってよ！！！！！！！！！！」

「……わかってるわよ。そう怒鳴らないで頂戴な」

「嘘つかないでー！！」

シユタツと木の上から降り立ち、マリアはにこつと微笑んだ。

気が立ったネコのように興奮しながら、リリスはマリアを睨んだ。

「あの子たちのためじゃない、ありがとう」

「これがヴァニツシユ達のためじゃなかったら、引き受けるわけないでしょう！？」

「はいはい。感謝してるわよ」

「っ、【魔女】のくせに……！！」

「あなただつて。【魔女】であることを望み、【悪魔】の地位を捨てた。そんなあなたが大好きよ」

「いい道具でしょうね。協定を結んでいなかったら、あなたとなんてありえない」

いい加減キャットファイトを起こしそうなリリスをなだめ、マリアは足元の灰を踏みにじって朝日を仰いだ。

「……うまくやったんでしょね、きつと」

「？何のことかしら」

「A君よ。やっと休めるわあー……」

ふわぁとあくびをして見せ、マリアは箒に腰掛けてリリスに手を差し伸べた。

ハテナマークを顔に浮かべ、リリスは訝しみながら言った。

「その手は何」

「休暇と洒落込みましょう。おいしいプディングをご馳走するわ」

「……餌で釣るつもり？」

「来ないならいいわよ」

「っ、行くに決まってるでしょ！？待ちなさいよ！」

飛び立とうとしたマリアの腕を掴み、リリスはその後ろに飛び乗った。

薄いが青く澄んだ色と混ざる朝焼けの美しい桃色の空に向かって、マリアは風を切った。

手を差し伸べて（後書き）

次回最終回予定です

願いと一日

＊

陽も高く上った、午後二時きっかり。涼しげな風の吹く夕方へはまだ遠い時間だが、この時間は一番好きなのだ。

いつか来た時のように、楽しい時間を。そう思って、ここまで来た。そうでなければここまで売る理由がない。

バスケットを肩にかけ、文は手招きして二人を呼んだ。

「おい、早く来いよ！待ってるから！」

「なら、ためエも少しは手伝ったらどうなんだ」

「はえー？聞こえない」

ああ、いい天気 他には何も要りません、神様ありがとうございます。

なだらかな斜面の丘を一人で先に登ってくるくと回って見せ、文は吹きわたる風と共にふもとを見下ろした。

人々は今日も変わらない日々を送り、ただ楽しく過ごしているのはごく一部だけ そうなのかもしれない。苦しいことをしているのもいるだろうし、辛くて辛くて涙を流しているのもいるだろう。心が張り裂けそうになって、我慢できずに全てを吐きだしてしまうのもいるだろう

赤やオレンジと言ったカラフルな屋根屋根を眺め、文はバスケットを開けた。

中は空っぽ これから入れるために、中には何も入れていない。

「はあっ……文、早すぎ……」

「ヴァニッシュは傘持っていないからいい方じゃない？俺と血を分けただんまし」

「そうだけど……何か、陽の下にしていると結構しんどいかな……」

「一応【吸血鬼】だしね。月光 三日月を受けて変身することは

なくなっただと思うよ。その代わりと言っては何だけど、副作用かな」
「ああ、そう……」

重い荷物を持ってきたせいもあり、ヴァニッシュはへとへとに疲れていた。玉のような汗が顎や頬のラインを描いて垂れた。

遅れてノアも着き、文はにぱつと笑った。

「大丈夫かよ、二人とも」

「心配するなら荷物を持て」

「そうそう……重いんだから」

「そうかなー……俺のお願い、聞けないか？」

「っ、そういうわけじゃない。持つのを手伝えと」

「重……夫婦漫才みたいに見えるからやめて。僕とイチヤついてくれるなら歓迎するけど」

「黙れ狼」

「今は半分【吸血鬼】だから。指図しないでよ、おっさん」

「はいはい、喧嘩終了ー」

今日はそんなことをしに来たわけじゃない。もっと別なのはわかっているはずだ。

地面に荷物を置き、ノアは息を吐いた。

「悪いが、先に言う。【吸血鬼】は写真に写らない」

「知ってるよ。けど、俺は写っただろ？」

「見せてないはずだが。何故知っている？」

「見たよ。というか、ノアの血を飲んだときに知った。俺が写ったんだから、ノアも写るって」

「……性質の悪い能力だな。確証もないのに」

苦笑いを浮かべてそう言くと、ノアは鞆の中からあの古いカメラを取り出した。

「ありがとう、と言ってそれを受け取り、文はヴァニッシュに言った。」

「ちょっと改良したんだよ。脚立の上に乗せて、スイッチを押すだけ」

「……おー」

「反応薄いな……いい？ポチッでピカッでパシャッ」

「擬音語多すぎ。つまり……文明の塊か」

「まとめるな。俺が撮るから、てめえらは立ってる」

「ああ、ダメダメ。まず話聞いてよ」

二人の腕を引いてカメラから少し離れたところに立ち、文は両手を広げた。

訳が分からずじつと文を見つめて、二人は同時に小首を傾げた。

「お、似てるなー。で “ご褒美” の話なんだけど」

「ああ。それを聞きたい」

「じらさないで教えてもらわないと……いい加減わかんない」

「納得して、肯定してよ？」

それまでニヤニヤと一人他の始祖に笑っていた文が、不意に真面目に二人を順に見やった。

陽の下でも煌めきを放ち、【吸血鬼】は静かに微笑して言った。

「家族になってほしいんだ」

ほんの一瞬、世界中の時間が止まったようであった。

ざわつく風を受けながら、ノアは不機嫌そうにふいと文から目を背けた。

「っ、ノア……？」

「……今までは、何のつもりだったんだ？」

「今まで？その……恋人とか……けど、他人だったから……」

「へえ、そんなこと思ってたんだ……」

「ヴァニッシュまで……何だよ。嫌なのか？」

二人して、どうして聞いてくれない？ そんなに悪い提案ではないと思うし、この三人なら良い家族になれると思うのに。

しゅんとしてしまい、文はイジけたように口をとがらせてうつむいた。

と、その刹那 二人の言い争う声が頭上で聞こえ始めた。

「っ、てめエ、俺とかぶせる気か」

「何言ってるの！？ そっちこそ、何でかぶってるの！？」

「これしか思いつかなかったんだ。もう少し、頭を働かせろ」

「そっちこそ考えなよ。こんなありきたりなもの、かぶらないって思ったのに……」

「……何が」

ブワッと、何か甘い香りのするもののカケラが文へと降りかかった。

文が顔を上げると同時に、真赤なそれがあつという間に視界を遮った。

強い甘いその香り。何かはわからないが、どうにも 嗅いだ事のない匂いだ。

地面に散るそれを押し付けられたようで、文は慌ててそれを包む紙ごと抱えた。

「な、何これ……」

「かぶった。二倍の愛情だ、喜べ」

「あんまりいいものじゃないけど。その、薔薇の花……」

真っ赤な真っ赤な、見たこともないようなその花々。まるで血のように紅く、香り高く、崇高で瀟洒だ。触れたくても、刺が多くて触れられない。

目をぱちくりとさせ、文は交互に二人を見やった。

「……もらっていいの？」

「あげる。なんか……もつと反応あるかと思った」

「あア、同感だ。喜ぶというか……何というか……」

「……その、えつと、な……いや、見たこと、え、その……」

しどろもどろになるのはどうにか勘弁してほしい。全く持って実感が無いのだ。

口をパクパクとさせながら、文は花束を抱えたまま言った。

「っ、大好きだからっ……えと、この花束も、全部っ……」

「ちゃんと話せ。聞いてるから、落ちついて」

「……文？」

「……はッ……」

何もかも、飲み込むように体の中は熱く冷たい。この花束は、自身から流れ出た数多の血液と、自身が流させた数多の血液なのだと。

声を震わせ、文は言葉を無理に押し出した。

「……あり、が、とう……」

「何、泣いてんの？らしくないよ」

「だって……その、さ……！」

否定されたわけではなかった。肯定されたことに自分自身信じられず、震えが止まらない。

言葉を詰まらせ、文は必死に言葉を押し出した。

「二人とも……だい、すき……！」

「っ……外でそんなこと言うな。もつと別の場所で言え」

「照れないでよ、おっさんのくせに。文は僕に言ってくれてんのにさ」

「はあ？文は『二人とも』と言ったが？耳は大丈夫か？」

「うるっさいな……とにかく、文には僕の方が似合ってるんだよ。

邪魔しないで」

「黙れ。これだから獣は頭が弱いんだ」

「はあああ！？何言っちゃってくれてんの！？僕の方がっ

」

ほわりと、風に乗って花弁が舞った。

花束を地面に落とし、文は二人の首に腕を絡ませて抱きついた。
慌てて二人は文の表情を見た。

「っ、大好き大好き大好き！！二人とも、最っ高に愛してる！！！」

「あ、文！？苦しいよっ……………」

「絞めるな絞めるなっ……………！大体、てめェ……………」

「ごめん、ありがとうっ……………何にも用意してないけど、許してよね」

「

「は？」

照れて頬を紅潮させつつも、呆然と二人は文を見つめていた。
うつすらと涙をためつつ、文は満面の笑みで言った。

「ずっと、ずっと一緒だ！これから先、永遠に……………」

淡い風と、溢れんばかりの愛情。それ以外にはもう、なんにも必要ないなんて　　ああ、神様！俺はあなたに感謝します　　さっきよりもずっとずっと。

頭の中を真っ白にしながらも、先に再起し反応したのはヴァニッシュだった。

「っ、えと……………文……………？」

「　　そうか、それが望みの核心か　　俺が完璧に叶えてやる。命が尽きるまで」

「何言ってるんだよ馬鹿！文は僕の……………」

「……………あは……………はははっ……………ははっ……………！」

必死で笑いをこらえながら、文は言い争っている二人の耳元で囁いた。

「　　あのさ、二人とも」

「ん……………どうした？」

「さっきのはやめにするとか、言わないでよ？」

「そうじゃなくて……ほら、写真……」

「……当初の目的だったな。陽が暮れる前に撮ってしまいたいが……」

……」

「前、シャッター切れる寸前に誰かさんはキスしてたよね？」

「てめエが言うか。同じことしてたくせに」

「すればいいんじゃないの？ 今日も」

何か問題でもあっただろうか。完璧だったはずだが。

呆れたように笑みを浮かべ、ノアは花束を担いでカメラに向かった。

「もしもてめエにその気がないのなら、シャッター切る寸前に消え失せろ。悪いが、忠誠で付き合っているだけなら必要ない。俺自身、その忠誠心に駆られている部分があるのは否めない」

「何それ……今更、好きじゃないってことかよ」

「そうじゃない。レンズはすべてを見通す　嘘も誠も、何もかもを。だからこそ、撮る意味がある」

今度こそ　今度こそ、三人ともが写るように。何もかもが壊れないように、何もかもを元通りに。

嘘をつけば写っている。種族以前の問題として、そうなるのがこの古いカメラの特徴なのだと

花束を抱え、文は前と同じ位置に立つて二人を呼んだ。

「もしもいなくなっても、捜さないから。勝手に消えて、また勝手に現れればいい。二度と姿を見せてくれなくてもいいから」

「っ……文まであんなの信じてんの？」

「ノアの言うことに嘘はないから。信じるも信じないも、俺は本当にノアを疑ったことはないよ」

「五秒でバレルような疑い方はされたことあるがな」

カメラの角度やレンズを調整し、ノアは文の手を引いた。

とずっとその胸に頭を軽く打ち、文はノアを見上げた。

「……なんか、夫婦みたいだねえ」

「それもいいな。挙式を上げるとするなら、てめエには緋色のドレスを着せてやる。ムーンエッジの収集品の中には古臭い上に変なものが多いがな……あるんじゃないか、そういうのも」

「えー、俺は礼服がいいんだけど……背広とか、めったに着る機会ないし。ノアがドレスでいいじゃん」

「うわ、文それ本気？文の方が絶対可愛いつて」

「不服だが同感だ。そいつは外で待機だな」

「ふざけないでよ。文のドレス姿、あんたに見せるわけないじゃん」
「何で俺がドレス着る前提で進んだよ。全員タキシードでいいんじゃない？」

そう言っている間にも、カメラの準備は着々と進んでいた。あとはボタンを押せば、約十秒後に写真が撮れる。

前と同じように文を中心に並び、文はカメラに向かって駆けた。

「じゃ、撮るよー」

眩しい昼の陽は、もうすぐ沈んでしまう。まだ夕日と化してはいないけど、もうすぐなくなってしまっただろう。

カチツと音がし、スイッチが入る。そして、キュイイイン……と、光を取り込むような音がし始める。

慌てて二人の間に入り、文はレンズをじっと見つめた。

両手に花。まさに今、その状況だろう。

両手に薔薇の花束と、大切な二人の麗人。これはことわざも二倍の効果を持つのだと計算していいのだろうか。

カチカチという、秒針の刻む音。動いてもいない心臓も高鳴り、手に汗さえわいてくる。

静かに笑みを浮かべ、七秒前にノアがパチンと指をはじいた。

何が起こったのかはわからないものの、五秒前。

両手を掴まれて引かれた三秒前。

やわらかく唇が触れ、同時に雫が頬を流れた一秒前

パシャッと、カメラのシャッターはいやに軽い音で切られていた。

「ッ……何で……二人とも、何で泣いてんの……？」

「ん、ああ……その、だな……」

「嬉し泣って言うのかな……なんか、止まんない……」

止めようと思えば止まるだろう。なのに、それは自分からもぼろぼろとみっともなく流れていく。頬は流れる涙に体温を奪われてどうにも奇妙な景色になっている。

ゴシゴシと腕で涙を拭い、文はバスケットを持って駆けだした。

「今日の目標、それだけじゃないんだけど？夜には花火するって言っただから、その為に買い物」

「あー……花火買いに行くんだっけ？」

「勿論。ノア、現像お願い！」

「了解。先に戻るぞ、夜までにやってしまいたい」

「ん……しゃーないな……じゃ、お願いするな」

さっきのお返しと言わんばかりに頬にキスを返し、駆けながら文はノアに手を振った。

目を細めて笑み、ノアはカメラを片付けながら二人を見送った。散った花弁のカケラが、再び風に舞い上がった。

「うわっ！？何これ、あつつい……」

「ネズミ花火だっけ……気をつけないと火傷するから、遠くに放り投げて……」

「投げるなって！余計危ない！！」

夜は、予定通りに花火。周囲に家々がないことが唯一の救いだろ
う。どれだけ騒いでも何の文句も言われることがない。

二階の窓から二人のはしゃぐ様子を眺めながら、ノアは線香花火
の一つに火をつけて垂らした。

ぱちぱちと、ゆるく淡く燃える小さな光。命とは、こんな風に儂
く美しいものだ。いつか、誰かが言っていたような気もする。

街の明かりは優しく冷たい。恐れて近づかないが、その方があり
がたい。来られるとうつつうしくて仕方ない。

「……ん」

ほたりと、小さな光は手の甲の上に落ちていた。熱いが、叫ぶほ
どなわけではない。

指先で簡単にそれをもみ消し、ノアは現像し終えた写真をじっと
眺めた。

偽りも何もない、真っ直ぐな笑顔。頬にキスをされている文が、
笑ってそこに映っていた。両側の自分たちは、文同様涙を流しては
いるが。

くすくすと笑いながら、ノアは優しく蒼白な光を落とす月を仰い
で呟いた。

「もうすぐ、夏も終わりだな」

これから、寒い秋になる。とはいっても、文のことだ。どうせ栗
だのブドウだのと勧めてくるに違いない。それもまた愛嬌だろうが。
ふと何かを思い、ひらりと身を翻して窓から飛び降り、ノアは二
人に言った。

「……楽しいか？」

「あつついけどね……ノアもしない？」

「遠慮する。楽しいなら、続けてろ」

「……手、いたわりなよ」

目ざとく見つけられるのはいつものこと。慣れているが、やはり嬉しい。

一人写真を眺め、ノアは嬉しそうに満足気に溜息を吐いた。

*

俺は礼服がいいんだけど……。

叶えてやろうじゃないか、そこまで全て。

葉の茂る陰った大木の下、タキシード姿で三人。大輪の薔薇の花束を持ち、頬に軽い口付けを。まるで本当に　結婚でもしたみたいじゃないか。

愛おしげに写真から目を離して空を仰ぎ、ノアは新しい線香花火に火をつけた。

もうすぐ夏も終わりだな、と、再び呟く声が漏れた。

願いと一日（後書き）

最終回でした、50部までに終わらせたかったのに無理だったのは
ちよつと残念です

番外編もちよこ書きたいですね…ヴァンたちの過去や、主人
公組の過去とか…未来は描けるかどうか微妙ですが…リクいただけ
たら書くかもです

ブログ等での応援のコメント、ありがとうございました！
そしてここまで読んで下さった方も、本当にありがとうございまし
た！！

不定期な投稿にも関わらず、一か月で3000アクセスは心臓に悪
いです…チキンハートなので、一日に10アクセスでも心臓がバク
バクでした

ではでは、また不定期にまったり番外編は書きたいと思います
き、期待はあんまりしないでね！（え

なお、一つお知らせで書いておきます
とあるSNSにてひどい中傷を受けましたので、今書いているもう
一つの方の小説をしばらく停止にしたいと思います

勝手に決定してしまつてすみません…そして、応援して下さい方にも申し訳ないです…

ほとぼりが冷めたらまた書きたいネタですので、今はそつとしておいてください…本当にすみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2224m/>

古城の記憶とムーンエッジ

2011年1月2日19時25分発行